ISSN 2189-387X

中島醫家資料研究

第1巻　第1号

平成30年5月31日発行

通 巻 第2号

一般財団法人　中島醫家資料館

中島醫家資料研究　第１巻　第１号
目　　次

創刊にあたって　…… 中島洋一　…　1

論文

中島友玄の京都遊学日記（一）　…… 中島洋一　…　3
中島友玄の京都遊学日記（二）　…… 中島洋一　…　8
中島友玄の京都遊学日記（三）　…… 中島洋一　…　19
戦時下の郵便メディア
－中島一太関連「軍事郵便」を中心に－…　平崎真右　…　27

資料紹介

中島家の売薬能書板木の翻刻　…… 梶谷真司　…　43
岡山県医学校（第三高等中学校医学部）在籍時の
中島一太に関する資料の紹介　…　町泉寿郎　…　74

概説

The Nakashima Family Collection and its State of Research
…　Erin Kitagawara　…　80
「医家」という視点の豊穣性について
～現代の医療制度の原点～…　松村紀明　…　89

活動報告

資料館展示報告　…… 木下　浩　…　95
研究活動報告　…… 松村紀明　… 101

創刊にあたって

中島醫家資料館は、岡山県南部の穀倉地帯のひとつ千町平野を見下ろす上寺山南面中腹にあり、上寺山の山頂には天台宗余慶寺と北島神社が神仏習合の形で居を構えています。

父達二は、岡山医科大学卒業後に南満州鉄道付属病院の内科医として中国大陸北東の地を転任し、終戦後に帰国しこの地に父が内科医院を開業しましたが、それは決して「たまたま」という訳ではありません。我が家の先祖である玄古が宝暦年間に医家として本家・中島家から分家し居を構えたのがこの地なのです。ではなぜ玄古がこの地に開業したのかというと、もともと我が家の先祖は北島神社の神官の家系であったというのです。池田光政の政策の余波により神官の家系から分家したのが本家・中島家ですが、さらに、大工職であった父に常住寺円務院の再建に連れられていったのをきっかけに才能を見出された友三が医業を始め分家したのが現在の医家・中島家であり、宝暦年間に友三の息子である玄古がこの地に開業していたという訳です。

父達二がこの先祖伝来の地にもどり医業を再開した自宅兼内科医院は、すぐに上寺山の中腹から麓へと移転し、私を含めた家族はしばらく毎日麓の医院と山の中腹に残った自宅との間をふぅふぅ言いながら往復しておりましたが、そんな我が家の歴史を日々体感していたということかもしれません。

現在の中島病院は、私が消化器外科を専門としたことから、さらに岡山市妹尾へと移転しております。しかし、満州に渡っていた時期を除き宝暦年間から昭和時代まで医業を行っていた邑久のこの地に遺されているのは旧宅と先祖の墓所だけではありません。玄古以降の医家・中島家の活動を示す数多くの蔵書・文書・器物が先の戦災を免れ現代に伝わっています。これほど長期間同じ地で医業を行ってきた医家の資料が、散逸することもなく残っている例は、おそらく余り多くはないのではないでしょうか。

父とともに満州から帰郷した際、長持に入った先祖伝来の蔵書・文書・器物を見せられ中島家の歴史を教えてもらい、中学一年の時にはそのなかのひとつ『解体新書』も大変貴重なものであることを歴史の授業で知りました。ちなみに、その時の先生は、中島家の先祖から深いつながりのある北島神社の

多くの資料が入っていた長持（現在は薪入れ）

10 代目宮司である業合隆雄さんであったというのも、何かの縁だったのでしょう。

それ以降、私個人の趣味のひとつとして行ってきたこれらの整理・分析・研究ですが、2003（平成 15）年にテレビ番組「開運！なんでも鑑定団」でスタジオ出演したことをきっかけとして、何人もの医学史の研究者にも加わって頂き、2015（平成 27）年には『備前岡山の在村医　中島家の歴史』（思文閣出版）を成果のひとつとして刊行しました。さらに、2016（平成 28）年には中島醫家資料館を開館しましたが、ここに新たに、資料館の紀要として「中島醫家資料研究」を創刊することとなりました。

“地域医療”という視点が注目されている昨今、地域医療を歴史的側面から考える際の一事例として、長期間邑久のこの地で医業を行ってきた中島家の歴史の研究が進められることを願っています。

平成 30 年 5 月 31 日

中島醫家資料館館長　中島　洋一

中島友玄の京都遊学日記　(一)

中島　洋一
中島医家資料館　館長

※本論文（一）～（三）は、「医譚」復刊第 88～90 号に掲載された同名の論文[1]を一部加筆修正したものである。

まえがき―中島家について

本論文は備前邑久郡の在村医・中島友玄の残した「京遊備忘」（**写真 1**）及び「京遊厨費録」（**写真 2**）を基にして、京都における医学遊学生の生活を概観するものである。

中島家は、江戸後期寛文年間豊原北島神社の社家の家より分家し二代目玄古（1715（正徳 5）年～1789（寛政元）年）の代より専業医家となってから、備前国邑久郡北地村（現在の岡山県瀬戸内市邑久町北島）で代々医家を継承してきた家である。

宗仙（1774（安永 3）年～1840（天保 11）年）の長男である四代目友玄は、1808（文化 5）年に生まれた。ちなみに、宗仙の執筆した長崎遊学の際の記録「筑紫行雑記」については、平成 19 年度日本医史学会秋季大会のシンポジウム「長崎游学」における発表「中島宗仙の筑紫行雑記」にて報告している[2]。

友玄は 1833（天保 4）年 25 歳の時、京都に遊学し吉益北洲、清水大学、緒方順節、小石元瑞、藤林泰祐などに医学を学んでいる。「京遊備忘」は同年 1 月 26 日より 9 月 5 日までの上京道中より京都での生活をほぼ毎日綴った日記であり、「京遊厨費録」はその期間の出納簿である。いずれも克明に遊学生活が記録されており当時の医学遊学生の生活が偲ばれる貴重な記録である。

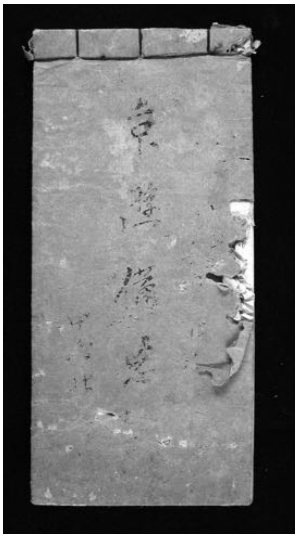


写真 1　「京遊備忘」表紙

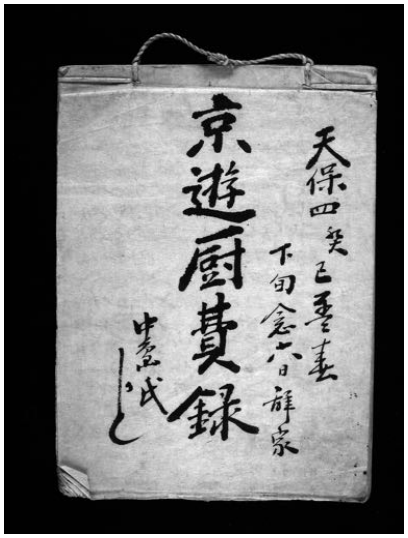


写真 2　「京遊厨費録」表紙

なお、父宗仙も長崎だけでなく 1801(享和元)年に京都に遊学し、吉益南涯につき古方を学び、他に外科、産科を学んでいる。友玄の京都遊学についての記録としては、ほかに父宗仙が友玄に送った書簡が数通残っている（「中島宗仙書簡集」）。友玄の手紙が残っていれば往復書簡として面白いのだが宗仙は息子の手紙を保存しなかったらしい。

2008(平成 20)年の第 109 回日本医史学会総会及び学術大会で田中祐尾先生に「京遊備忘」や「京遊厨費録」について話したところ、「医譚」への投稿を勧められた。本論文はこれらの概要紹介を主たる目的とし、「京遊備忘」を原則記載順に（時系列的に）追い、必要に応じて「京遊厨費録」の対応する金額などを紹介している。内容の詳細な検討や学問的考察は別に譲ることとし、「京遊備忘」、「京遊厨費録」、「中島宗仙書簡集」（「宗仙書簡（一）～（九）」）の全文翻刻については町泉寿郎（二松学舎大学・教授）によるものがある[3]ので、そちらを参照されたい。本論文（一）で紹介する部分は、岡山を出発して京都で宿を決め遊学準備をする辺りまでである。

1　上京道中記録

「京遊備忘」の冒頭（**写真 3**）によれば、1833(天保 4)年、25 歳の友玄は医学研修のため京に出発した。1 月 27 日が吉日なので、この日出発する予定で 27 日の宿を赤穂に取っていたのだが出発前急に脚が痛くなり、明日の労を思い 26 日夕方雨天ではあったが下僕孫平に荷を背負わせて富岡の小山家に向かい出発した。小山家は現在の瀬戸内市長船町富岡にあり、友玄の家の邑久町北島より東 4～5㎞ あたりにある。現在も富岡に数軒の小山家が道をへだてて残っており旧家の風格が残っている。友玄の手による「種痘諸事留」のなかに種痘館設立の願書の写しがあり郡内の医師達が署名しているが、この中に「富岡　小山良助」という名前が出ている。「種痘諸事留」は友玄が 1865(慶応元)年に記録したものであり天保 4 年の京都遊学より 32 年後である。小山良平は小山良助の縁者（おそらく父か）であろう。脚痛については「宗仙書簡（一）」に「出立之頃、足痛有之、其後如何候哉」という記載がある[4]。これよりこの書簡が京に旅立ってから最初に宗仙から出された手紙とわかる。良平の従兄弟市松が京見物に同行することになった。一行は友玄、下僕孫平、小山良平夫妻、下僕、市松の 6 名だったようだ[5]。

1 月 27 日、長船を出発しまず片上に寄った。片上には良平の親戚前海屋がありそこで良平の下僕を待って酒などのみ別れを惜しんだ。最初の宿は赤穂である。赤穂では小田鎌蔵宅に宿ったが鎌蔵は良平の舅父である。京へは良平の妻も同行しているので妻の里に寄ったのであろう。

1 月 28 日は、赤穂義士の墓に詣で、天野駅に宿泊（宿料は 328 文）。

1 月 29 日は、西谷駅に宿泊（同 320 文）。

2 月 1 日は、兵庫駅に宿泊（同 328 文）。

2月2日は、灘田（灘のことか）で酒を飲み池田に宿泊（同364文）。

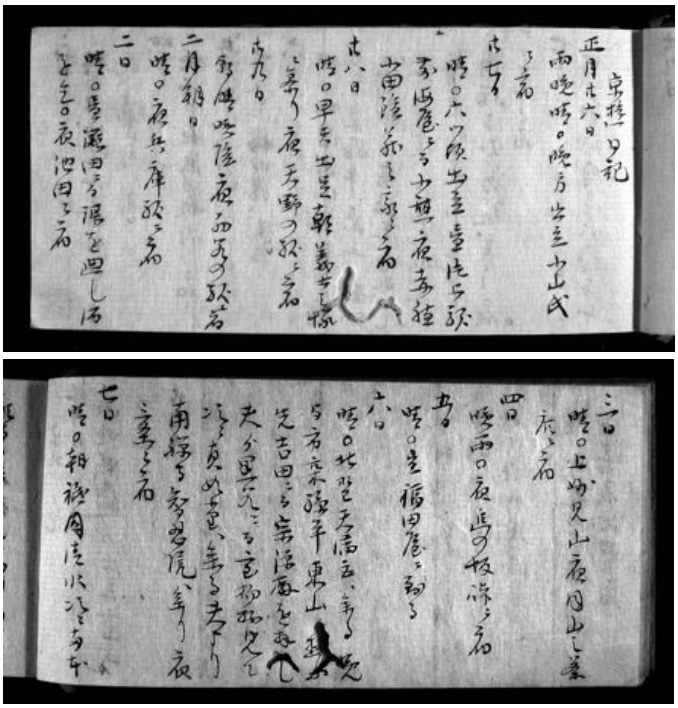


写真3　「京遊備忘」本文

2月3日、妙見山に登り、その夜は妙見山の茶店に宿泊（同392文）。

いずれも、宿料については「京遊厨費録」の記載による[6]。

2　京都での下宿生活

2月5日、京に着き定宿の福田屋に宿をとった。このとき5日より15日までの宿料銀8匁8分を払っている[7]。

2月6日、北野天満宮に参詣、市松と孫平は東山で遊んだ。吉田山では宗原殿を拝観し黒谷で宝物を見て真如堂、南禅寺、知恩院に参りその夜は三条に泊まった。

2月7日、朝祇園、清水、両本願寺に詣で昼に福田屋へ帰った。暮れ方、孫平は備前へと帰り、路銀として1歩1朱100文を渡している[8]。

以後、京都では福田屋を常宿とし、ここを根拠地として京都遊学の準備をしている。

2月10日、清水大学と吉益会を訪れ、束脩を訊ねている。吉益入門式は2歩1朱100文であった[9]。清水大学は産科医であり、吉益家の当主は古方医の北洲であったがこの日は会えなかったようである。

2月11日、朝に吉益会を訪問したが、北洲先生は往診（大往）より未だ帰っておらず、緒方会を訪問し束脩3朱を納めている[10]。

2月12日、吉益北洲先生に初謁する。この日より本格的に医学の勉強を始めたよう

である。以後、緒方会、吉益会に毎日のように出ており、緒方塾では写本をしている（「緒方会」と「緒方塾」を明確に区別して記載している。写書をしているのが「塾」のようである）。日記は、その日の天気から始まり、出席した学舎、その日の行動、結髪、入浴、寺社への参詣、揚弓、酒肴などの個人的な行動に加え、地震、火事、祭りなどの記載も多く、大変興味深い。

3　京都での準備

「京遊厨費録」では、京都での遊学生活に必要なものは日用品についてまで事細かにその値段を記録しているのが興味深い。その一部を以下に抜粋する。

茶碗 1 組	100 文	下駄一足	170 文
雨傘 1 本	300 文	蒲とん 1 枚	銀 14 匁 5 分
ゆ（銭湯）	8 文	丸行灯	750 文
丸行灯皿	12 文	朱硯	22 文
真書筆	26 文	鹿紙	10 文
土佐小杉	17 文	朱	50 文
熨斗	12 文	砥石	50 文[11]
半切 30 枚	48 文	椀	45 文
そふそく	14 文	机	金 1 歩 1 朱[12]
富札	60 文	酒 2 合	32 文
箸ばこ	16 文	手傘 1 本	380 文[13]
絵の具上品	100 文	猪口二つ	10 文[14]

などである。

また、「京遊厨費録」では、京都で買った医学書などの書物の一覧表とその価格も記録している（**写真 4**）。

傷寒論	320 文	金匱要略	310 文
京都人物誌	160 文	内科撰要	金 1 歩 1 朱 200 文
小刻温疫論	銀 6 匁 5 分	和蘭医話	170 文
産科蒙	銀 18 文	名物考	金 1 両 2 歩 200 文[15]

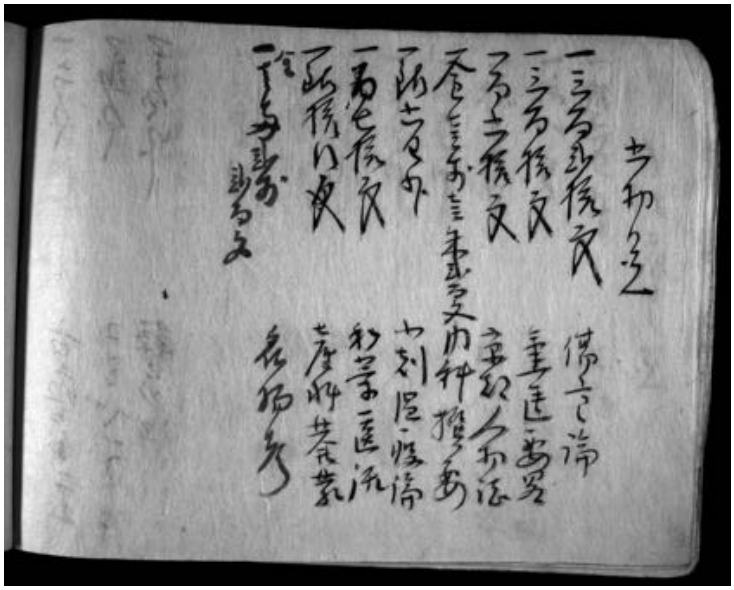


写真４　「京遊厨費録」本文

今回は遊学の導入部として学舎への出席、京都での買い物などをまとめてみた。次の（二）では京都での生活、勉学を日記に従って記載する。

---

[1] 中島洋一．中島友玄の京都遊学日記(1)．医譚 2008；88：5571-5575
中島洋一．中島友玄の京都遊学日記(2)．医譚 2009；89：5743-5754
中島洋一．中島友玄の京都遊学日記(3)．医譚 2009；90：5868-5875

[2] 「筑紫行雑記」については、下記を参照されたい。
中島医家資料館・中島文書研究会（編）．備前岡山の在村医　中島家の歴史．京都：思文閣出版；2015．p.251-6
中島洋一・松村紀明．中島宗仙の「筑紫行雑記」について：文政二年一医師の長崎遊学日記．日本医史学雑誌 2008；54(4) 387-391

[3] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.219-251

[4] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.232

[5] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.220-1

[6] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.236

[7] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.237

[8] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.236

[9] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.237

[10] 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.237

[11] ここまで、中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.237

[12] ここまで、中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.238

[13] ここまで、中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.239

[14] ここまで、中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.240

[15] ここまで、中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書．p.248-9

中島友玄の京都遊学日記　(二)

中島　洋一
中島医家資料館　館長

「中島友玄の京都遊学日記（一)」では、友玄が 1833(天保 4)年 1 月 26 日岡山を出発し 2 月 5 日京都に着き福田屋に宿を定め、本格的に京都での勉学を開始するまでを述べた。ちなみに、友玄は下宿先を何度か変えている。2 月 5 日～15 日は福田屋（一条通千本東入る)、2 月 15 日 ～3 月 27 日は小山氏（裏御門通上長者町上る)、3 月 27 日～6 月 8 日は富小路二条上る西側、6 月 8 日以降は某処、といった具合である。

今回は、京都での医学研修と下宿生活を中心として紹介する。6 月 11 日には郷里より母が京都見物に上京しているので、2 月 15 日～6 月 11 日までを一区切りとして述べてみたい。

4　母が上京する 6 月 11 日までの生活

「京遊備忘」によれば、2 月 15 日、当初の下宿先の福田屋から裏門通上長者町に転居している[1]。「宗仙書簡（二)」にも「裏門通り上長者町上ル處ハ、何れ之方角ニ而候哉」と[2]、宗仙から友玄への下宿先の場所の問い合わせの記載がある。

2 月 25 日には、「家書二月九日、〃十四日出、二通達」という記述がある[3]。どうやら､父宗仙が五明屋第左衛門に託した手紙 2 通が到着したようである｡「宗仙書簡(一)」のことであろう[4]。岡山から 11 日後に届いたということになる。

2 月 29 日には、玉里湯で入浴し、結髪をしたとの記載がみられる。他にも定期的に入浴（だいたい 7～10 日おきか）や髪に関する記載が数多くみられ、「京遊厨費録」にも、「一、八文　　ゆ」「一、三拾弐文　　月代」といった記載が散見される。

同日の晩、浦上春琴[5]を訪問している。郷里出身の文人画家ということで訪ねたのであろう。「春琴山水」と軸のその側に書かれた山水画が遺されているが (**写真 1・2**)、この山水画の中には落款が無い。推測であるがこのとき頂いたものではないだろうか。友玄は「京遊厨費録」に「一、金壱朱　　春琴へ遣」と記載している[6]。

3 月 3 日には、吉益・緒方へ謝儀を支払ったという記載があり、「京遊厨費録」にも「一、金弐朱　　三月三日吉益　緒方へ謝義」とある[7]。以降も同様の記載がみられる。なお同日昼からは小林良敬、望月春平、小山良平とともに嵐山で花見をし、小遣いとして 52 文を支出している[8]。

3 月 5 日、望月春平の紹介で蘭学医小石玄瑞に入門したようである。「京遊厨費録」には「一、金壱歩三朱　　小石入門式」という記載がある[9]。ちなみに、『究理堂の資料と解説』に樫園先生門籍のなかにも「備前邑久郡上寺　中嶋友玄」という記録が確認できる[10]。

写真１　軸の外部に書かれた「春栞（琴）山水」　　**写真２　軸の山水画**

3 月 9 日、吉益会の後に伊勢屋に行き、五明屋経由で岡山の実家宛の書状を託したようである。「宗仙書簡（二）」にも「書状ハ伊勢徳より西大寺呉服五明や当ニ被成候ハヽ、早速相届キ可申候」という記載がみられ[11]、書状あるいは送金、品物、書籍などの移送はもっぱら京出入りの商人に託していたようである。飛脚便はほとんど使っていない。時には比叡山に上る上寺山の住職に依頼していたようである。

3 月 10 日、今出川の辺りで良平夫妻と共に「仙洞御所修学寺への御幸列」を見物している。席料は 24 文である[12]。この見物については父宗仙にも行列書を送り詳しく伝えたようで、「仙洞様修学院　御幸御行列」という文書も現存し、「宗仙書簡（四）」にも「扨仙洞御所、先月御幸ニ而行列書、御指越、緩々一覧仕候」という記載がある[13]。

3 月 16 日、日中に吉益会と緒方会に出席後、夜には小石会に出席したという記載がある。この時の小石会の費用と思われるのが、「京遊厨費録」の「一、六拾文　　小石夜會ろふそく代」と書かれた記載であろう[14]。

3 月 21 日、緒方会出席後、島原太夫の道中を見物している。席代は 16 日の小石夜会と同じ 60 文である[15]。

3 月 27 日、富小路（富小路二条上る西側）に転居したようである。「宗仙書簡（五）」の追啓にも「冨小路へ轉宅被致、諸生同居之由、先達承り申候」とある[16]。

3 月 28 日、緒方会と小石会の後、夜には小関会に出席している。小関会とは、小石

門下の小関亮造の会のようである。「京遊厨費録」の「小石束脩」の中に「一、金壱朱　　小関亮造」という記載がある[17]。

4月9日、緒方会の席上、大地震があったとの記載がある。美濃西部での地震のことであろう。大垣北方の村々では山崩れが多く発生し、死者30余名が出たM6クラスの比較的大きな地震であるが、京都も震源に近かったので揺れが大きかったようである。余震は8月まで続いたようで、「京遊備忘」にもこの余震と思われる記載がいくつも見られる。

4月10日、吉益会の後、貫名省吾[18]を訪問したが会えず、13日晩再度訪問して会ったようである。

4月11日、吉益会に出席した後、清水大学を訪問している。

4月21日、賀茂祭礼を見物している。「京遊厨費録」には、「一、三拾弐文　　葵祭見物席料　　一、弐拾八文　　〃　繪圖壱冊」とあり、見物席料が32文、絵図1冊が28文だったようである[19]。

4月27日、福田屋に行き、実家からの書状2通(「宗仙書簡(三)」、「宗仙書簡(四)」)[20]を受け取っている。

4月28日、岡田剛之介に入門している。束脩金2朱である[21]。

5月7日、岡田会に行き、「入内術」とある。内術の支出として「京遊厨費録」には「金壱歩」[22]、「金百疋」[23]とある。

5月12日、この日は吉益南涯忌日で東福寺の南涯の墓に詣でたようである。香典として銀2匁支出している[24]。

5月16日、猪飼敬所[25]を訪問したが会えなかったようである。猪飼敬所については、「宗仙書簡(四)」に「猪飼より別紙之書状到来いたし候」という記述がある[26]。

5月20日、緒方会に行き、「入内術」とある。内術の支出として「京遊厨費録」には「金百疋」[27]とある。

5月29日、吉益会の後、祇園へ行き夜宮見物をしている。「京遊厨費録」には「一、弐拾文　　祇園夜宮山鉾見物小遣」[28]とある。

6月4日、淀屋文兵衛を訪問し、「貸座敷」を頼んだようである。転居先のことと思われる。

6月5〜7日には、山鉾を見物している。席料は1人64文で、「京遊厨費録」にも「一、六拾四文　　山鋒見物席料」[29]とある。

6月8日、昼に良平とともに淀屋文兵衛を訪れ、謝礼として酒手形を2升持参したようである。同日に転居したようで(転居先不明)、転居祝いに2合の酒で恭造、文礼を招いたようである。

6月9日の晩、四条福屋が火事で焼け落ちるのを三条大橋から見物たようである。またその夜ははじめて蚊帳を掛けたようで、「宗仙書簡(四)」にも「此度被申越候、小蚊帳、指登申候。御受取可被成候」とある[30]。

6 月 11 日、母と泰造が、書状持参で京都に来たようである。ここからしばらく、母と泰造ほか数名があちこち見物した旨の記載がある。

以上、2 月 15 日より 6 月 15 日までの主な出来事を、日を追って記載してきたが、この 4 か月の間に吉益会に 57 回、緒方会に 39 回（内緒方塾での写書 6 回）、小石会 10 回、岡田会 4 回出席している。緒方会、岡田会では「内術」に出席しているがこれは臨床実習のようなものであろうか。

ちなみに、医学研修以外に浦上春琴、貫名菘翁、猪飼敬所など京の文人画家、儒学者を訪問し教養を深めていたようである。

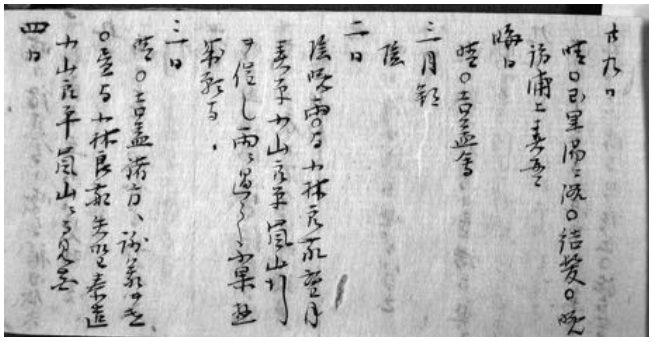


写真 3　「京遊備忘」（2 月 29 日～3 月 3 日）

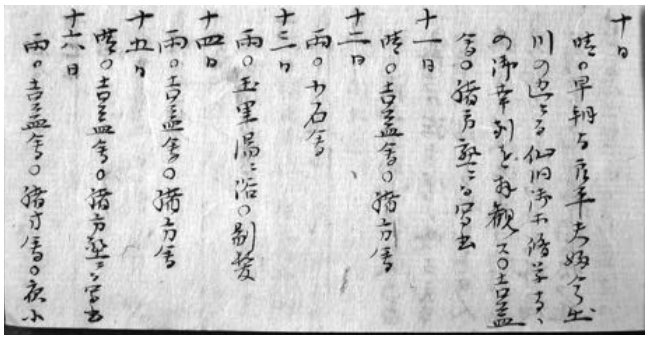


写真 4　「京遊備忘」（3 月 10 日～16 日）

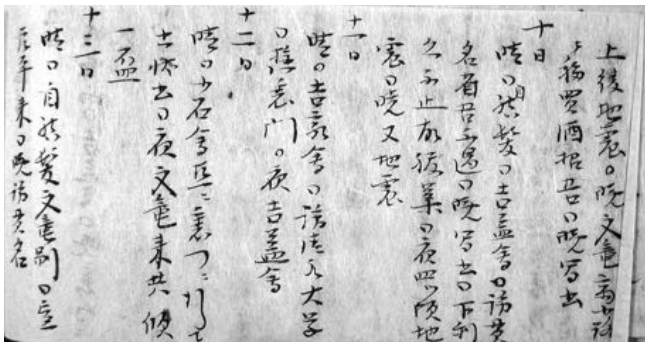


写真 5　「京遊備忘」（4 月 9 日～13 日）

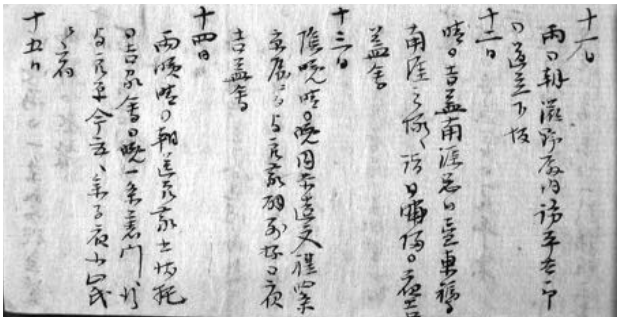


写真 6　「京遊備忘」(5 月 11 日～14 日)

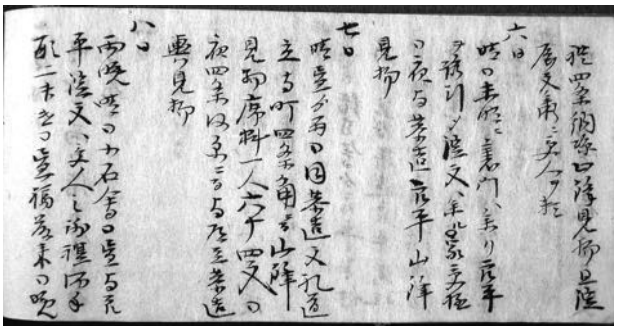


写真 7　「京遊備忘」(6 月 5 日～8 日)

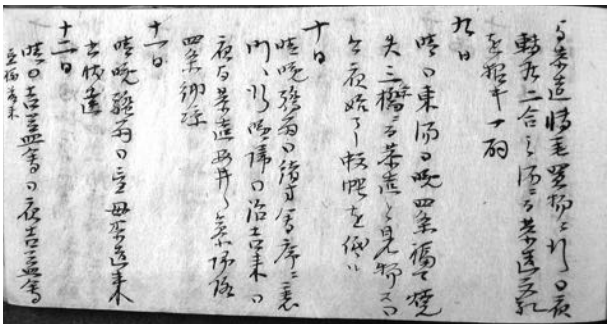


写真 8　「京遊備忘」(6 月 8 日～12 日)

5　友玄の京都での下宿先と入門先

ここで友玄の京での下宿の変遷と入門先をまとめてみよう。

2 月 5～15 日は福田屋（一条通千本東入る)、2 月 15 日～3 月 27 日は小山氏（裏御門通上長者町上る)、3 月 27 日～6 月 8 日は富小路二条上る西側（道立・ 養隆・敬二ら医学生と同居)、6 月 8 日以降は独居（場所不明)、といった具合ある。この間の主な入門先は、吉益北洲、緒方順節、小石元瑞、藤林普山などである。

6　友玄の「京遊厨費録」

本論文においてここまで、「京遊厨費録」にはつまみ食い的に言及してきたが、こ

こではまとまった部分を紹介し、どういう内容構成であるかを概観したい。「京遊厨費録」には「六月六日より獨居雑費　六月九日より算用」という項目があり、6月8日以降の独居時の支出についてまとめられている（**写真9**）。この約20日分の記載について紹介しよう。

写真9　「京遊厨費録」（「六月六日より獨居雑費」より）

六月六日より獨居雑費　六月九日より算用

一、金壱歩　○家賃
一、六百三拾弐文　○町銀
一、百六拾文　○酒壱斗手形年寄へ
一、三百文　○たわし　ひしゃく　貝杓子
一、四拾八文　○飯籠并すだれ
一、弐拾八文　○すり鉢壱
一、弐拾八文　○古火ばし
一、六拾文　○切ば
一、七拾五文　○包丁
一、弐拾文　晩茶
一、百文　○こん炉　ゆきひら
一、三拾文　○どびん
一、拾八文　○井ばち壱
一、拾弐文　○塩壺壱
一、六文　○〃　壱
一、拾弐文　○團壱本
一、拾八文　○油つぎ
一、八文　○飯杓子壱本
一、五文　○吹竹壱本

一、拾文　○塗ばし壱膳
一、八拾文　○桶壱　塩壱合
一、百文　○手だらい壱　醤油三合
一、五拾五文　○転宅夜酒料　ミ噌
一、拾五文　味噌　しじみ壱合
一、四文　しを壱合　昆布巻
一、弐文　きうり　油壱合
一、五百三拾二文　米五升　かぼちや
一、百文　割木壱束　梅干
一、七拾五文　柴壱束　金三朱百四拾文　六月六日より晦日迄宿ちん
一、八拾文　炭壱貫目　番こ
一、五拾六文　油壱合半　かぼちや
一、拾三文　○硫黄燈心　醤油弐合半
一、八文　○ほくち　内
一、八文　茄子十　三貫五百八拾九文　道具代引
一、四文　きうり六　三貫六百三拾二文
一、三拾六文　醤油三合　二十二日刻
一、壱貫六十六文　△米壱斗　一日分丁銀　百五拾八文程
一、拾五文　味そ　一、七貫弐百弐拾五文之内
一、五文　きうり十五　壱貫六十六文　米壱斗代母より出
六貫百五拾五文

6月8日よりの「家賃」は金1歩とあるが、これとは別に「町銀」を632文払っている。これは町内会費のようなものだろうか。これらに加えて「一、金三朱百四拾文六月六日より晦日迄宿ちん」とあるのは、滞在していた母の宿料ということであろうか。また、出費中米1斗代7貫225文のうち、1貫66文は母が出したとの記載がある。天保4年京都での1ヵ月の生活費が伺えて面白い。天保4年といえば天保3年の大飢饉の後である。

加えて、医学研修に関する費用も克明に記載している。たとえば、友玄は6月の出費の中に、外科道具代3貫589文がある旨を記載しているが、この外科道具の一覧と思われるのが「京遊厨費録」の「外治道具覚」の項目であろう（**写真10**）。

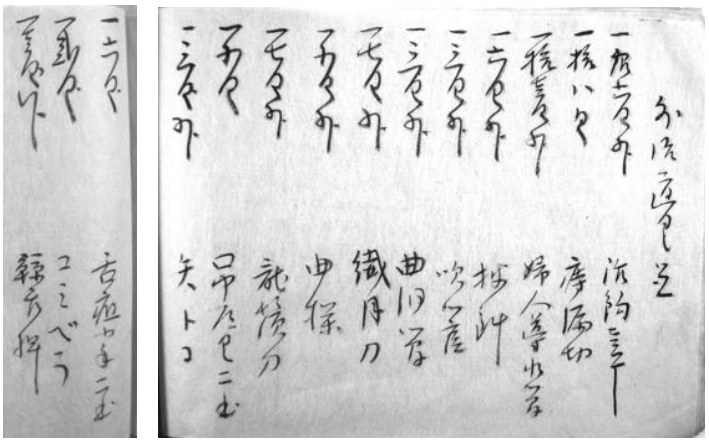


写真 10　「京遊厨費録」の「外治道具覚」

外治道具覚

一、銀六匁五分　活鈎一丁
一、拾八匁　痔漏切
一、拾壱匁五分　婦人導水簡
一、六匁五分　按針
一、三匁五分　吹管
一、三匁五分　曲洞簡
一、七匁五分　繊月刀
一、五匁五分　曲操
一、七匁五分　龍鬚刀
一、五匁　口中道具二本
一、三匁五分　矢トコ
一、六匁　舌疽小手二本
一、弐匁　コミベラ
一、壱匁八分　鯨舌押

また、それぞれの入門先への束脩などの支出も、別途「京遊厨費録」の末尾にある「諸師家束脩覚」の項に抜き出されて一覧化されている（**写真 11、12**）。

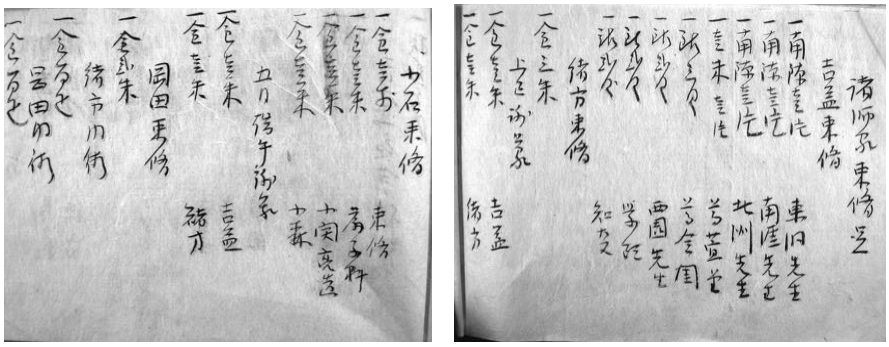


写真 11　「京遊厨費録」の「諸師家束脩覚」（1）

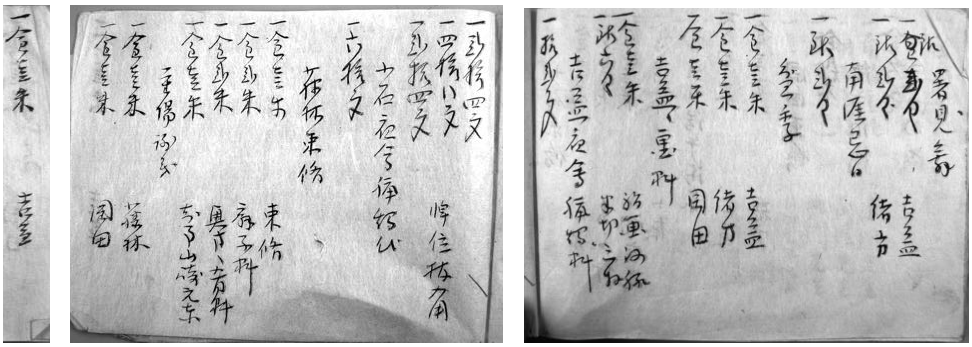


写真 12　「京遊厨費録」の「諸師家束脩覚」（２）

諸師家束脩覚

吉益東脩

一、南嶺壱片　東洞先生
一、南嶺壱片　南涯先生
一、南嶺壱片　北州先生
一、壱朱壱片　尊萱堂
一、銀三匁　尊令閨
一、銀弐匁　西園先生
一、銀弐匁　学頭
一、銀弐匁　知吏

緒方東脩

一、金三朱

上巳謝義

一、金壱朱　吉益
一、金壱朱　緒方

小石東脩

一、金壱歩　東脩
一、金壱朱　扇子料
一、金壱朱　小関亮造
一、金壱朱　小森

五月端午謝義

一、金壱朱　吉益
一、金壱朱　緒方

岡田東脩

一、金弐朱

緒方内術

一、金百疋

岡田内術

一、金百疋

暑見舞

一、銀弐匁　吉益
一、銀弐匁　緒方

南涯忌日

一、銀二匁

盆季

一、金壱朱　吉益
一、金壱朱　緒方
一、金壱朱　岡田

吉益へ画料

一、金壱朱　絹画河豚
一、銀六匁　半切三枚

吉益夜會臘燭料

一、拾弐文
一、弐拾四文
一、四拾八文　牌位報入用
一、弐拾四文

小石夜會臘燭代

一、六拾文

藤林東脩

一、金弐歩　東脩
一、金弐朱　扇子料
一、金弐朱　奥方へ肴料
一、金壱朱　知事山崎元東

重陽謝義

一、金壱朱　藤林
一、金壱朱　岡田
一、金壱朱　吉益

　このなかで「吉益へ画料」「金一朱　絹画河豚」とあるのは、吉益北洲の描いた河豚の画のことであり、軸に表装したものが現存している（**写真 13**）。「毒」を通した北洲の医学観が垣間見られるものなので、併せてこの内容を紹介したい。

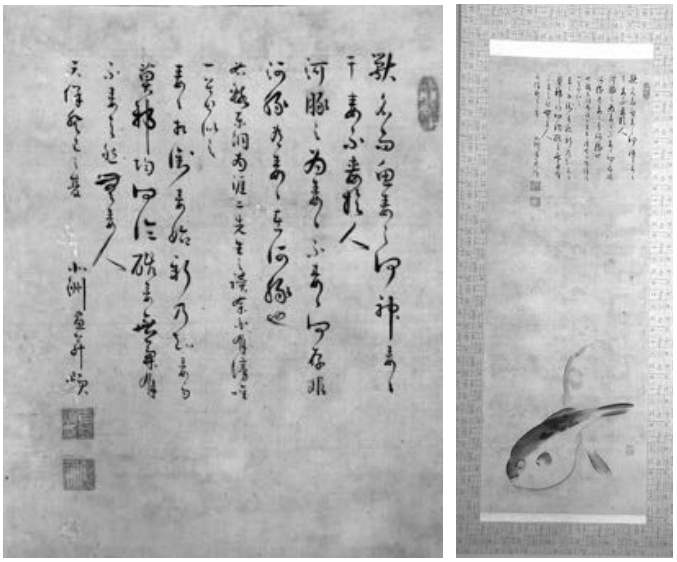


写真 13 吉益北洲「河豚の画」

獣名而魚　毒之何神　毒々
于毒不毒於人
河豚之為毒々不毒々何存非
河豚為毒々在河豚也
右録東洞南涯二先生之讃余亦有慢唫
一首書似之
毒々相衛毒始新　乃知毒而
莫邪均　何信酷毒無兼有
不毒之然無毒人
天保癸巳之夏　北洲画併題

＜読み下し文＞

獣名ナルモ魚ナリ　コレヲ毒スルハ何ゾ神ワザナラン
毒ハ毒ニ毒ス　人ヲ毒サズ
河豚之毒ヲナスモ　毒ハ毒ナラズ　毒ニ何ゾ非ノ存スルヤ
河豚ノ毒タルハ　毒ノ河豚ニ在也
右ハ東洞南涯二先生之讃ヲ録ス
余亦慢唫（キン）（吟）有リ　一首コレニ似タルヲ書ス
毒々相衛（ショウ）シテ毒始テ新（アラタ）ナリ
スナワチ知ル毒ノ　莫邪（バクヤ）ニ均シキコトヲ

何ゾ信ゼン酷毒ノ兼有無キヲ
之ヲ毒セザレバ人ヲ毒セザル無シ
天保癸巳(キシ)之夏　　北洲画併題

次回（三）は母の上京と友玄の帰郷までの日記を紹介したい。

---

1 中島医家資料館・中島文書研究会（編）. 備前岡山の在村医　中島家の歴史. 京都: 思文閣出版; 2015. p. 222
2 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233
3 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 222
4 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 232
5 春琴は備前鴨方藩出身の浦上玉堂の長子、1779(安永 8)年～1846(弘化 3)年、父の脱藩に従い各地を遍歴、のち京都に住む。当時は 54 歳。(上田正昭. 日本人名大辞典. 東京 : 講談社. 2001.)
6 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 237
7 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 237
8 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 238
9 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 237
10 宮下三郎・多治比郁夫（編）. 究理堂の資料と解説. 京都 : 究理堂文庫. 1978. p. 51
11 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233
12 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 238
13 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233
14 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 238
15 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 238
16 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 234
17 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 250
18 貫名菘翁、通称省吾、1778(安永 7)年～1863(文久 3)年、江戸後期の儒学者、書家、文人画家、号は「海屋」など、文化 5 年ころより京で須静堂を開く。幕末の三筆のひとりといわれた。当時 55 歳。(上田正昭. 日本人名大辞典. 東京 : 講談社. 2001.)
19 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 239
20 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233
21 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 239, 250
22 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 240
23 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 250
24 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 240
25 猪飼敬所、1761(宝暦 11)年～1845(弘化 2)年、江戸中期～後期の儒学者、伊勢津藩の儒者、著作に「論孟考文」「管子補正」など。(上田正昭. 日本人名大辞典. 東京 : 講談社. 2001.)
26 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233
27 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 240, 250
28 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 241
29 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 241
30 中島医家資料館・中島文書研究会（編）前掲書. p. 233

中島友玄の京都遊学日記　（三）

中島　洋一
中島医家資料館　館長

「京遊備忘」によれば、6 月 11 日に母と泰造が、書状持参で京都に来たようである。先ずは、ここから母が京都から帰る 27 日までの 17 日間の日記をたどってみよう。

7　母の上京

6 月 11 日の母の上京については、「宗仙書簡（五）」の追啓でも「母へ此度見物旁上京いたし候様被申越候由、しかし當方も甚繁事、殊ニ婦人之事ゆへ、登り申事、容易ニ難致候間、左様御心得可被成候」と、母の上京について触れている[1]。ちなみに宗仙は、同じ手紙の中で友玄に一旦帰郷するようにも書いている。

13 日、京都に着た母と泰造らが四条納涼に行き、その帰りに夜宮見物をしている。

14 日には先ず祇園会を見物し、母と泰造は大仏殿、三十三間堂、六波羅、清水、祇園へ参詣、夜は三条で御輿見物と大変忙しい。まるで現在の修学旅行である。

15 日、「緒方會、皆傳」とあり[2]緒方会は終了したようである。このあと数日、友玄は母の京都見物に集中しているようである。

17 日、母と泰造は裏門に行き良平夫婦を誘って北野、金閣寺を見物したようである。「京遊厨費録」には「一、百弐拾文　　金閣寺見物料」とある[3]。福田屋に戻り一杯呑んでから友玄は下宿に戻り、母はそのまま福田屋へ逗留した。

18 日、伊勢屋から 5 月 17 日と同 24 日実家発の書状が届いたとある。5 月 24 日の書状は先に言及した「宗仙書簡（五）」のことであり、母の上京に言及している書状である。つまり手紙より母本人のほうが早く着いたわけである。父宗仙の記述は無駄に終わったようである。

22 日、一条に母を迎えに行き良平を誘って大丸に行き買い物をした。「京遊厨費録」には「一、正銀五拾五匁弐分七厘　大丸呉服もの買物」とあり[4]、呉服ものを「色々」と[5]買い込んだようである。

23 日、母と南禅寺見物に行き雷雨に遭ったようである。帰り道四条で納涼する。

24 日早朝、母・泰造と共に大坂に向けて出発し、四つ頃伏見に着きそこからは船に乗り暮れ方に大坂備前屋に到着したようである。その夜は天満を見物したとある。

25 日、母と泰造は治吉をたずねその晩は備前屋治吉宅で酒宴を開いた。藤屋八兵衛、河越屋佐兵と共に祭礼見物をして四更の頃に備前屋に帰った。

27 日朝、母と泰造は大坂から直接に岡山へ帰ったようである。友玄は京への帰途につき、日暮れ伏見へ着舟し夜五ツ頃帰宅した。

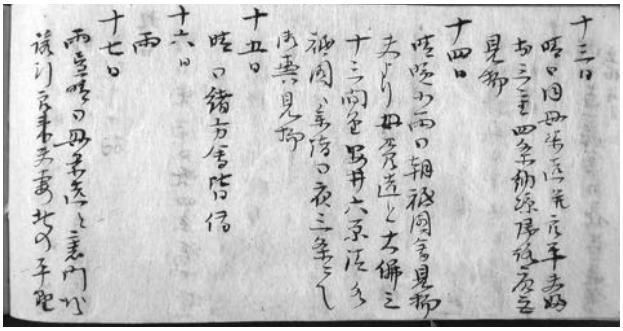


写真 1　「京遊備忘」(6 月 13 日～17 日)

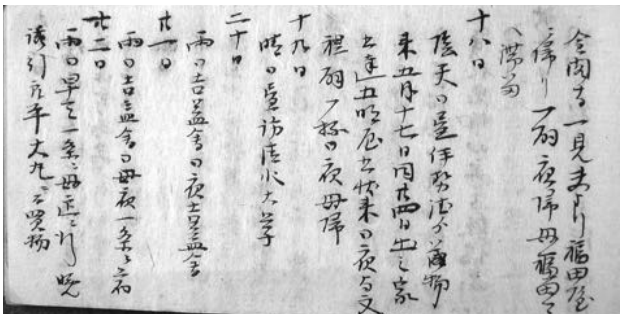


写真 2　「京遊備忘」(6 月 17 日～22 日)

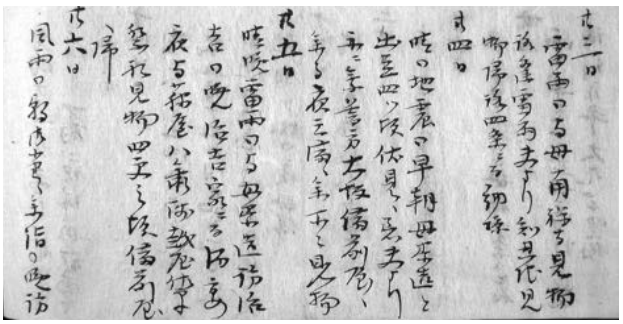


写真 3　「京遊備忘」(6 月 23 日～26 日)

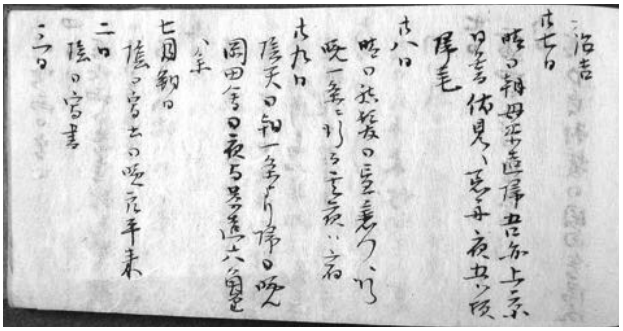


写真 4　「京遊備忘」(6 月 26 日～7 月 3 日)

6 月 27 日に母の京都・大坂見物は無事終わった。この間、友玄は 19 日清水大学に、20 日、21 日と 2 日間吉益会に行っただけで、母にかかりきりだったようである。

8　母上京中の京遊厨費録

「京遊厨費録」から、母の上京中の記録を以下拾ってみよう[6]。

一、拾六文　　泰造二人湯
一、六十文　　茶碗二組皿共
一、三拾弐文　　酒弐合福田屋へ
一、三拾弐文　　〃弐合　治吉へ
一、弐百六文　　朝日野飯料三人分
一、四拾文　　十四日山鉾見物小遣
一、拾八文　　枕弐ツ
一、百文　　泰蔵（泰造）へ小遣
一、百弐拾文　　金閣寺見物料
一、百文　　母へ渡
一、銀五拾五匁弐分七厘　　大丸買物色々
一、六拾文　　南禅寺行遣母共
一、壱貫弐百四拾文　　大坂天満祭見物諸費

入浴料、枕や食器類、食費、小遣い、酒、見物料など、支出は様々である。また、17 日の間、母を案内したのは十三間堂、六原（六波羅）、清水（寺）、祇園、北野、金閣寺、南禅寺、知恩院などと、京の名所はほとんど網羅している。そして伏見より大坂の天満祭見物で締めくくっている。あっぱれな親孝行である。以下に天満祭見物の支出の部分を紹介しよう（**写真 5**）。

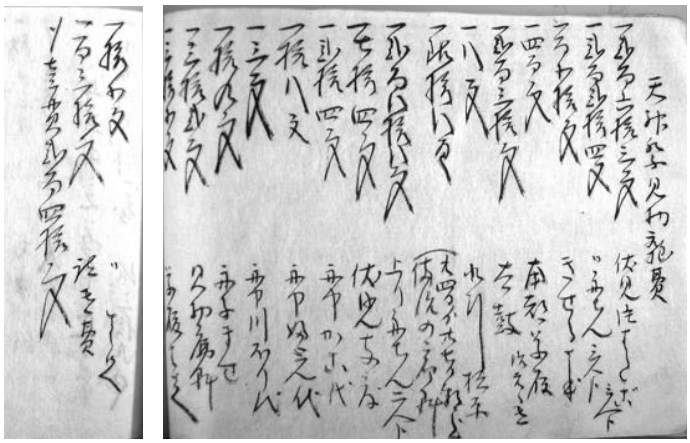


写真 5　「京遊厨費録」の「天神祭見物雑費」

天神祭見物雑費

一、弐百六拾三文　伏見片はた゛三人分
一、弐百弐拾四文　〃　船賃三人分
一、百五拾文　きせる壱本
一、四百文　南都草履　治吉へ遣
一、弐百三拾文　太鼓
一、八文　水引松原
一、銀拾八匁　廿四日より廿七日朝迄備治の宿料
一、弐百八拾八文　上り舟ちん二人分
一、七拾四文　伏見支度
一、弐拾四文　舟中かご代
一、拾八文　舟中ふとん代
一、三文　舟中川ほり代
一、拾九文　舟子ませ
一、三拾弐文　見物席料
一、三拾五文　草履壱足
一、拾五文　〃　壱足
一、百三拾文　諸遣賣
〆壱貫弐百四拾文

なお、「備治の宿料」とは、備前屋治平の略と思われる。

9　友玄の帰郷

2月上旬にはじまった友玄の遊学であるが、しばらくすると父宗仙から帰郷を促す手紙が届くようになる。先に言及した「宗仙書簡（五）」である。これの前に友玄は来春まで勉学をしたい旨を手紙で知らせたようで、それに対する返事のようである。

> 然は来春迄遊學被致度旨、書状被申越、致承知候。乍然吉家論講ハ一通り御聞、追々可被致研究、産科ハ奥術師傳より早速相済候事と被存候。蘭学ハ初心ニ而ハ一寸研究成しかたく、是も追々事と被存候。花岡内術も格別之秘術も無之と被存、何様盆前、又ハ盆後迄ニは一先是非ニ帰郷可被致。若修業半途ニ相成候ハヽ、其上ニ而又々直ニ再遊可被致候様存候。右之段能々相究、委曲御申越可被成候。

吉家とは吉益会のことであろう。「蘭学は初心者には簡単ではない、華岡内術はさほどの秘術も無いと思う、いずれにしても追々勉強すればよい、盆前後にはひとまず是非帰郷するように、もし続けて研究したければまた再度上京して勉強すればよい」といった内容である。

友玄の返事は残っていないので、友玄がどういう考えだったのかは分からない。ただ、友玄は父からの帰郷の督促について日記で全く触れていない。それに対し、宗仙は「宗仙書簡（六）」でも再度帰郷を促している[7]。

> 消二光候。然は帰国之日限急便ニ先達而御申越可被成候。扨又此度用意金三両三歩、南鐐〆数三十、指登し申候。太兵衛殿より御受取可被成候。先得御意度、如

是ニ候。匆々不備。

帰国の日時を急便で知らせるように、帰国の用意金を送る、といった内容である。8 月 16 日に書かれた書簡であるからもう盆は過ぎている。また、9 月 4 日の「宗仙書簡（七）」にも送金の旨と安否を伺う文面がある。さらに、10 月 12 日の「宗仙書簡（八）」は飛脚便を使って催促している。

以急飛申遣候。時下寒冷之節ニ候處、弥以無御障候哉と存知居申候。然は先月、本乗院主帰山之節、并書状被差越候ニ付、何角承り、弥先月下旬迄ニ帰郷致候様被申越、相待居申候処、當月ニ相成候而も下向不被致、甚家内一統大心配致居申候。右ニ付、此度乙子利八子相頼、迎ニ指登し申候。片時も早く下向可被致候。委細は同人へ申含遣し候。得与可被聞届候。何様長逗留故、當方世評も不宜、迷惑致候。何角指置、利八子同道ニ而、急々出立下向可被致候。右之段申遣度、甚指急荒々認、如是ニ候。匆々不具。

今度はかなりきつい調子で帰国を迫っており、乙子村の利八の子供を迎えに遣るといっている。いつまで経っても帰郷しない友玄に業を煮やした宗仙は、北島神社の神主業合右仲（大枝）にも友玄宛の帰国督促状の執筆を依頼したようで、それが残っている（**写真 6**）。業合右仲の書状の宛名は中島宗仙であるが内容（以下）は友玄宛である。以下に、その一部を紹介しよう。

さて御学術は無論、其の他何かと良きお楽しみ多きと、さてさて御羨ましく、生田良右衛門などと御噂致し候、しかし長居はおそれ有りと申し候へは、大抵に成されてお帰り成るべく候、ご両親様にも殊のほかご案じ候ように相聞き申し候、まず一度は御帰省も然るべく存じ奉り候、

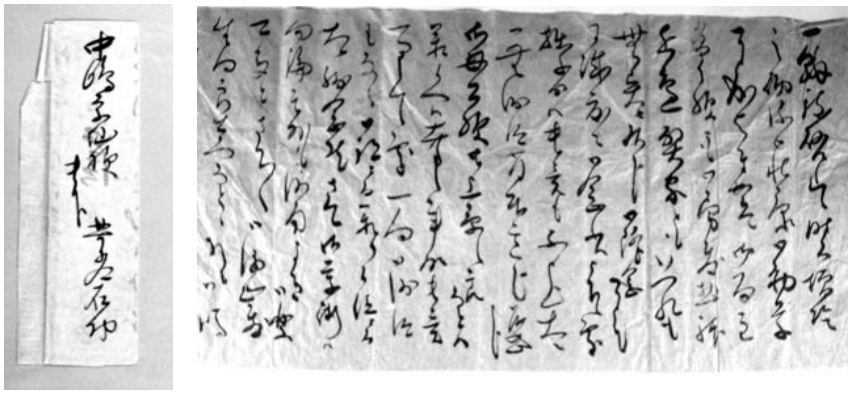


写真 6　業合右仲書簡（冒頭部分（右）と封筒（左））

父宗仙がなぜ帰郷を急いでいるのか記録はない。ここからは私の推定であるが、友玄の結婚問題ではないだろうかと思っている。友玄の室登和は 17 才で友玄と結婚し一男玄章を生み 1837（天保 8）年 19 才で死亡している。これから逆算すれば 1835（天保 6）年に結婚したことになる。明治になってから岡山県に提出した「中島友玄履歴明細書」などによれば、友玄が再度京へ遊学したのは天保 8 年である。二度の京都遊学の間に、結婚、長男誕生、妻の死亡を経験したという訳である。

最終的には 8 月下旬に帰郷することが決まったようだが、友玄にとってよほど不本意だったのだろうか、これ関する日記の記載は少ない。

8 月 27 日、福田屋へ行き国元へ送る荷物と書状をまとめ誓願寺に運ぶ。

8 月 28 日、真如堂へ荷物を運び法泉寺に泊まる。

9 月 4 日、恭造が夜きて銭屋で宴会。

9 月 5 日、吉田山に登り蕈を採った。夜銭屋で入浴し又宴会。

ここで京都での記載は終わっている。なお、「京遊厨費録」には、岡山に持ち帰った土産物と思われる一覧表が載っている（**写真 7**）。内容と併せて以下に紹介する。

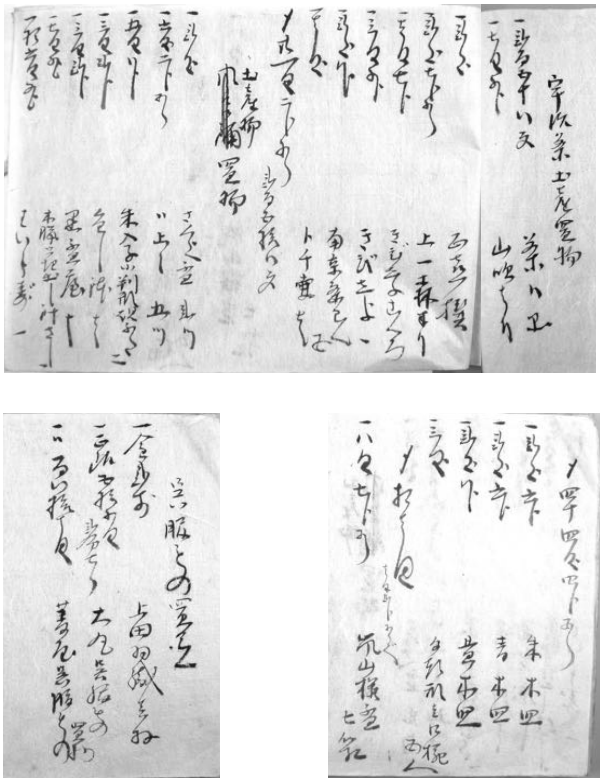


写真 7　「京遊厨費録」より、土産などの買い物記録の部分

宇治茶土産買物

一、弐百五十八文　茶八品
一、七匁五分　山吹壱斤
一、弐匁　正嘉撰
一、弐匁七分五厘　上一森半斤
一、壱匁七分　きびしよ　こんろ
一、三匁五分　きびしよ一
一、二匁八分　南京茶わん五
一、壱匁　トチ壺壱
〆廿一匁二分五厘　弐百五拾八文

土産物買物

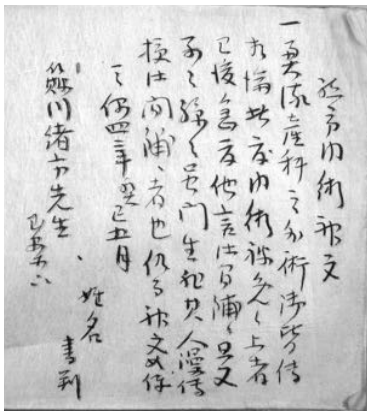
一、弐匁　さくらへ　盃弐ツ
一、六匁二分五厘　〃　上之　五ツ
一、五匁八分　朱入子小判形硯ふた弐
一、三匁弐分　くわし鉢壱
一、三匁弐分　黒盃台壱

一、七匁五分　木臘とき出し針さし一
一、拾六匁五分　はいらず一
〆四十四匁四分五厘
一、二匁六分　朱木皿
一、二匁六分　青木皿
一、二匁八分　黄木皿
一、三匁　夕顔形壱口椀五人
〆拾壱匁　壱匁弐分　ありがへ
一、八匁七分五厘　嵐山桜盃七箱

呉服もの買覚

一、金二歩　上田羽織壱枚
一、正銀五拾五匁弐分七厘　大丸呉服もの買物
一、〃　百八拾匁　菱屋呉服もの買物

最後に、「京遊厨費録」に載っている緒方内術神文と岡田内術盟證の写しを紹介して（**写真 8、写真 9**）、友玄の京都遊学を概観する本稿の終わりとしよう。



緒方内術神文

一、奥流産科之外術御皆傳
相済、此度内術被免候上者、
已後急度他言仕間鋪候。且又
子々孫々雖門生非其人漫傳
授仕間鋪候者也。仍而神文如件。
天保四年癸巳五月　姓名　書判
簸川緒方先生　玉案下

写真 8　緒方内術神文

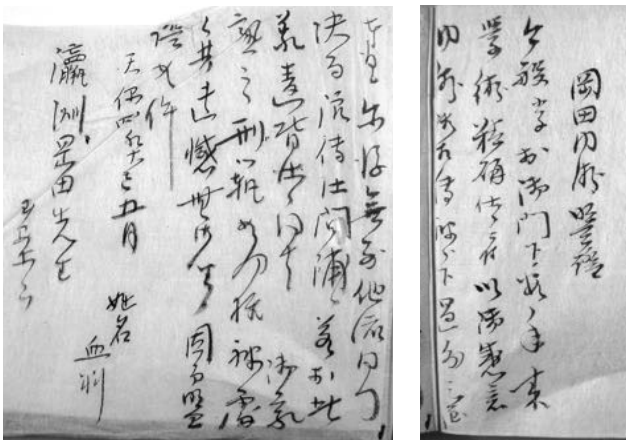


写真 9　岡田内術盟證

岡田内術盟證

今般小子於御門下数年来
學術精研仕候ニ付、以御感意
内術御相傳被下、過分之至
奉存候。尓後無別他流同門、
決而浪傳仕間鋪候。若於此
義違背仕候得者、御家
塾之刑範如何様被處
候共遺憾無御座候。因而盟
證如件。

天保四年癸巳五月

姓名　血判

瀛洲岡田先生　玉案下

以上で中島友玄の京都遊学の紹介を終わる。備前岡山の地方から、26 才の青年が京都での勉学、下宿生活を赤裸々に記録した「京遊備忘」と「京遊厨費録」は後世に貴重な記録を残してくれた。友玄は 1876(明治 9)年 68 才で生涯を閉じことになるが、青年時代の筆まめが生涯を通じて衰えなかったようで数多くの文書を書き残し、たとえば晩年に記した「種痘諸事留」は、幕末から明治にかけての岡山における種痘の貴重な記録といえよう[8]。

---

1 中島医家資料館・中島文書研究会（編）. 備前岡山の在村医　中島家の歴史. 京都: 思文閣出版; 2015. p. 234
2 前掲書. p. 227
3 前掲書. p. 241
4 前掲書. p. 249
5 前掲書. p. 242
6 前掲書. p. 241-2
7 前掲書. p. 234
8 「種痘諸事留」については、木下浩. 中島友玄と岡山県邑久郡における江戸末期から明治初期の種痘. 前掲書. p. 96-110　などを参照されたい。

戦時下の郵便メディア
―中島一太関連「軍事郵便」を中心に―

平崎　真右
二松學舍大学 SRF 研究助手

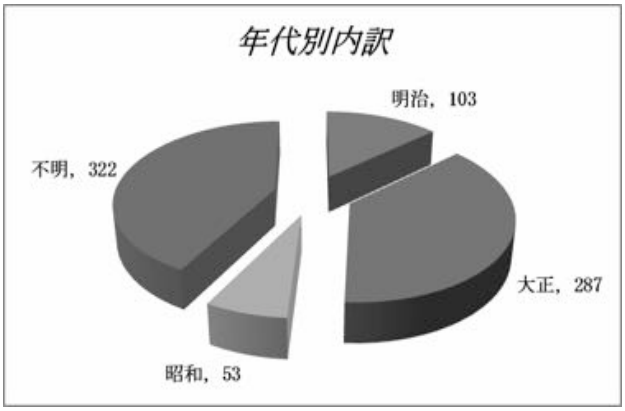
１　はじめに

岡山県瀬戸内市内の邑久地域において、江戸期より在村医として活動してきた中島家には、数多くの文書史資料類が所蔵されている。そのなかには、「郵便はがき」や「手紙」といったプライベートな資料も多数含まれる。これらの資料は、近年の歴史学においても「パーソナル・メディア」として位置づけられ、公文書類などだけからは伺うことのできないミクロな歴史を知るうえで、まさしく「パーソナル」な面から歴史を捉えていくうえでも注目されている[1]。

小稿では、中島家文書中の「パーソナル・メディア」の概要と、そのうち特に「軍事郵便」と呼ばれる資料群に注目し、その紹介と一部内容の検討を試みるとともに、当該資料の特徴について考えていきたい。

２　中島家文書の「パーソナル・メディア」と「軍事郵便」

まず、中島家に所蔵される「郵便はがき」や「手紙」類はおよそ 765 種が認められるが、これを年代別に分けると**図①**のようになる。



図①

ここからは、大正期が全体の 3 分の 1 強ほどであることがわかるが、推定年代不明のものには未使用の絵葉書が多数含まれている。これらの「パーソナル・メディア」の所蔵者（発信者または受信者も含む）は、中島家のなかでも医門七世・中島一太（1870

（明治 3）-1928（昭和 3））の時代のものが多くを占めるが、なかには一太の息子・達二（1904（明治 37）-1984（昭和 59））宛てのものや、中島医院宛てのものも散見される。このうち本稿で注目する「軍事郵便」は、年代的には明治期のものが多数を占めており、中島家文書中の「パーソナル・メディア」のなかでは 141 種（約 18.4%）が認められる（内訳は、明治期：95 通、大正期：6 通、次期不明：40 通）。

軍事郵便が一太時代に集中してみられる理由は、彼が日露戦争前後の時期にかけて「軍医」として兵役に就いていたことが挙げられる[2]。1894（明治 27）年 12 月、岡山医学校予科（後の第三高等学校医学部）から転校先の愛知医学校を卒業した一太は、1895（明治 28）年 3 月から 1 年あまり豊橋病院に勤務したのち、翌年 1896（明治 29）年 12 月には「愛知県第三師団歩兵第一九連隊第三大隊第九中隊」へと志願入隊する。その後、見習い医官として三重連隊に勤務したのち、1904（明治 37）年 7 月には日露戦の充員召集として「第五師団第六補助輸卒隊付陸軍二等軍医」となり、広島県宇品碇泊場より中国大連に向けて出航。同年 12 月には停泊場司令付となり、終戦まで宇品港に勤務と、少なくとも日露戦争中は軍属にあった。軍事郵便資料は、この時期にかけてのプライベートなやり取りを記録した「パーソナル・メディア」となる。

そもそも軍事郵便とは、その前史を「太政官布告第一一五号・飛信逓送規則」にとり、直接的には 1894（明治 27）年の「勅令第六十七号」と「逓信省公達第二四一号 軍事郵便取扱細則」を淵源とする郵便制度のことを指す（1904（明治 37）年には「勅令第一九号」が制定され、以後も若干の改正がみられると指摘される）[3]。日本では第二次大戦終結までのあいだに、戦地やそれに準ずる地（駐屯地や派兵先の兵営等）にある軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人、軍属およびその地の軍衙の許可を得た者から出された郵便物と、それに宛てた郵便物とをその範囲とする[4]。形態としては、「軍事郵便」の朱書きまたはスタンプ、あるいは切手が附されたものとなるが、なかには明らかに兵営や戦地よりの発信／宛てにも関わらず、朱書きやスタンプ類がみられないものも認められる。

軍事郵便の発行・郵送された全体数については、日清戦争期には約 1,239 万通であったものが、日露戦争期には飛躍的に増加して約 4 億万通を越え、昭和に入ってからの日中戦争期にも年に約 4 億万通平均と、その概算が報告されている[5]。またこの資料の特徴としては、そもそもが当事者本人にとって価値を有するものが大半のため、その当事者が亡くなれば多くが資料的価値を見出されずに廃棄されやすい性格をもつ。これらに鑑みるとき、中島家所蔵の軍事郵便も所蔵資料中に占める割合こそ多くはないものの、この国で本格的な軍事郵便制度が整い、盛行する日露戦争期のものであり、さらには発信／受信者が「軍医」という立場性を帯びるなどの特徴を有するものと言える。

３　中島一太と軍事郵便

一太関連の軍事郵便資料を、差出人や内容面を基準に大きく分けるなら、次のように区分できる。

① 一太から家族宛て
② 一太宛ての挨拶状・見舞状の類
③ 日露戦後、一太の帰郷に関するもの

以下順に、その内容の一部を概観していく。
（以下の軍事郵便資料の年代表記は、時代性を強調するために元号とした。なお年月日の「付」は投函日を、「着」は配達所管地域への日付けをそれぞれ意味する。未記載のものは判別不可を意味する。）

① 一太から家族宛て

一太からの家族宛て郵便には、(a) 母親である「政子」と、(b) 妻である「ふさ子（ふさ、房子とも）」へのものに大別できる。内容としては、家族の体調を気遣うものや、母や妻が郵便で尋ねてきたことに対して一太があれこれと応える様子、また逆に一太から家族に対する要望などもみられる点で、極めてパーソナルなやり取りが見受けられる点に特徴がある。

(a) 政子宛てのものは、所蔵される軍事郵便資料中もっとも分量が多く（全 17 通）、すでに父親を亡くしている一太だけに、母親に対する気遣いが伺えるようである。まだ日露戦最中の郵便には、「昨十七日無事帰港任り候御安神／被成度候（中略）都／合ニ依つてハ今一航海致候やも／難斗航海するとせハ廿三日出／帆之豫定ニ御座候」（明治 38 年 4 月 18 日付）など、自身が無事である旨を伝える通知も見えるが、戦後（あるいは戦争期間外）のものには、諸事についてのやり取りや要望が目につく。例えば「御送付之所昨日着委細了承仕候／早速手続致置（候）二日両三日の内通知書／到着可致と存じ候其□ハ速ニ回送相成／度候捺印之上直ニ返送可致候 受領ハ西大／寺□ニ致し置候猶通帳並ニ預り証之番号ハ通知／書と同時ニ御送可申候」（明治 38 年 10 月 18 日、**写真 1**）との文面からは、文面中の「通知書」の内容は不明だが、家族との密接なコミュニケーションを伺わせる。

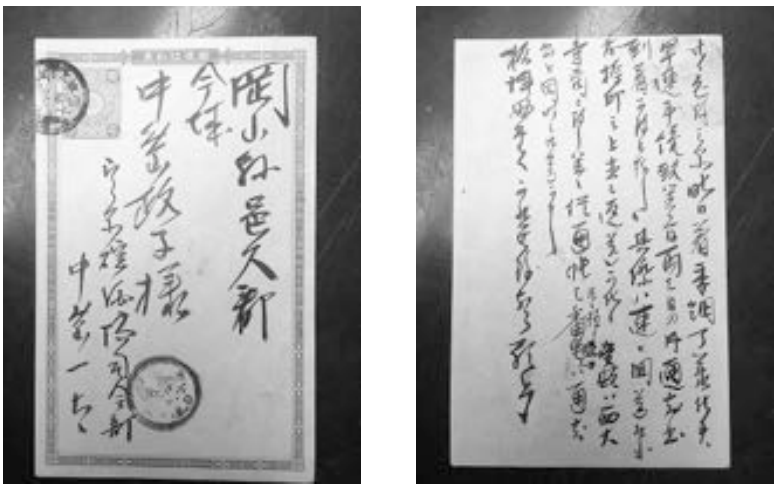


写真１（一太より政子宛て）

また、自分の留守中の来客への対応について指示する文面として、次のものも見える。

「(前略) 本日坪田／嘉平次氏より士官学校保証人／依頼越候ニ付き承諾之趣申送／置候后右願書持参せハ直ニ捺／印被遣度候（後略)」(明治 38 年 10 月 20 日着、**写真２**)。文中の坪田嘉平次とは誰か不明だが[6]、このような留守宅への筆まめな通信は、この他にも多々認められる。

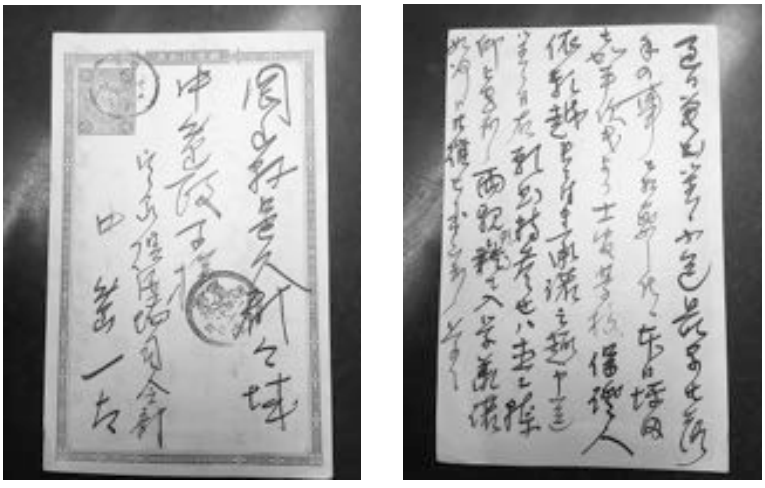


写真２（一太から政子宛て）

例えばこれは妻のふさ子宛て郵便ではあるが、時計や自転車に関する話題もみられる。「過日手紙被下委細承知致候所御修繕／之義時機を見て可致（中略）自／転車之

義ハ今二三ケ月の后修繕御扣へ置／被成度候時計之義ハ今暫し見合せ郵便貯金に致し置候」（明治 38 年 10 月 9 日付）との文面には、時計と自転車は修理して使用したいものの、しばらくは蓄財を優先する様子が見て取れる。この話題と連続するもので、政子宛て郵便中には「（前略）彼の時計／之件は如何ニ御座候や過日御送被下度候（中略）自転車ハ当方へ御送被下度候当地／ニて修理（中略）使用致度候ニ付き」（恐らく明治 38 年 11 月 20 日付）と、一度は修理を控えていた時計と自転車の件も、時間が経つにつれて焦れてきたのであろうか、自分の手元で何とかしたい一太の様子が垣間見える。一太と自転車について触れた息子・達二の回想によれば、一太は往診時に使用していたようで、その鑑札が邑久郡では第 1 号であったと言う[7]。往診に使用した自転車は日露戦出征の際に郡役所へ返したというが、郵便中の自転車はまたそれとは異なるものであろうか。その点は不明だが、邑久郡で最初の自転車を使用していた点などもまた、「新しがり屋[8]」であったと言われる一太の人となりを示すようで興味深い。

また、書籍の配送を依頼する文面も認められる。「（前略）過日御送置字書之／中袖珍医語字林（茶色布表紙ニテ長サ五寸巾之ニ準ズ）（中略）郵送相成度候」（明治 38 年 1 月 28 日着）と、『袖珍医語字林』なる字書の郵送を求めている。この『袖珍医語字林』とは、1903（明治 36）年 2 月に東京医事新誌局より出版された、ドイツ語・ラテン語の医学関連用語（原語）を収録したその対訳本である。一太も「長サ五寸巾」と記すように、「袖珍」とは袖に入る程度の大きさの袖珍本のこと。また東京医事新誌局とは、太田雄寧（1851（嘉永 4）-1881（明治 14））が 1877（明治 10）年に創刊した、近代日本における医学雑誌の草分け且つ中心的存在と言われる『東京醫事新誌』の発行元である。雄寧の死後は、蘭学の師であった松本良順（1832（天保 3）-1907（明治 40））が編集局長となり、以後も数度の変遷を経て、1960（昭和 35）年 12 月まで継続刊行された[9]。先の政子宛て郵便は 1905（明治 38）年のものであるから、その 2 年前に出版されていた『袖珍医語字林』を一太は入手し、恐らくは日常的に使用していたと思われる。

次に（b）ふさ子宛てのものには、「過日中腫物之為メ難義なされ候由／其后ハ如何母上御不在申とて定めし／別事難渋被成候事と相察し候／母上御逗留久敷相成候ニ付き一明／御帰□被成候様御通知被成度候」（明治 38 年 9 月 3 日付、**写真３**）と、健康を気遣う文面や、郷里の家庭事情についてやり取りする様子が伺える。

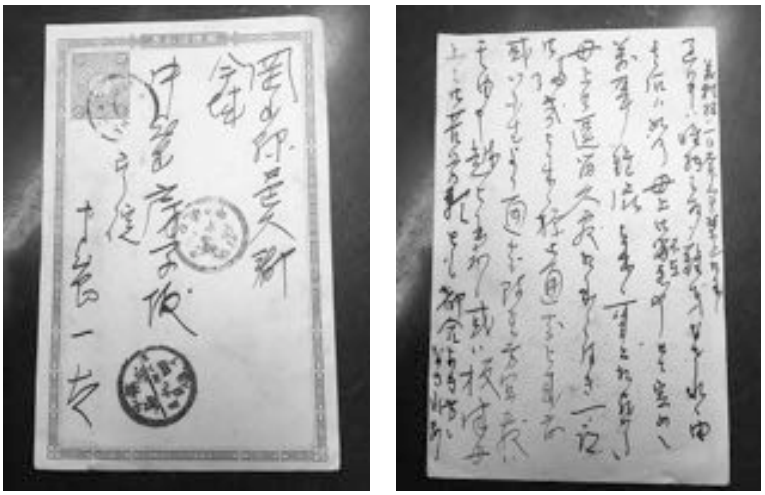


写真３（一太よりふさ子〔房子〕宛て）

さらに、書籍配送の依頼に関する通信はふさ子宛て郵便中にも認められる。「過日申置所の外ニ／診断学一冊（赤色表紙）／御送被下度候」（明治38年11月28日着）や、「（前略）書籍棚ニ婦人科準縄なる者あり□ニ送付を乞う」（明治38年12月8日付）など、医学書の配送をしばしば依頼している。前記の『袖珍医語字林』と同じく、「診断学」「婦人科準縄」も現在の中島家所蔵資料中には未見だが、「婦人科準縄」とは1894（明治27）年11月に柴田耕一・平出謙吉によって南江堂より翻訳出版された、『充爾僊氏婦人科準縄』を指すであろう。同書は、ベルリン大学の婦人科産科教授Alfred Dührssen（アルフレッド・デュールセン、1862（文久2）-1933（昭和8））が1891（明治24）年に刊行した『Gynäkologisches Vademecum für Studierende und Ärzte』の第三版（1893（明治26）年）を翻訳刊行したことが、柴田・平出訳本の凡例から判る[10]。これらはいずれも宇品港に配送を求めているが、軍港勤務時には同書が必要となる機会があったのか、もしくは自らの勉学のために求めたのかは定かではない。少なくとも先の『袖珍医語字林』と併せて、産科を専門としていた一太が当時どのような書籍を閲覧していたのかについて伺える資料である。

②　一太宛ての挨拶状・見舞状の類

区分したなかでは、この挨拶状・見舞状の類が数量的には最も多い。挨拶状には大きく2通りあり、(c) 新年の挨拶と、(d) 一太の陸軍一等軍医への昇進祝いとなる。

(c) においては、宇品港碇泊場に勤務する一太宛てに1906（明治39）年の新年を祝う挨拶が並ぶが、そこでは健康などを言祝ぐ定型文のほかは、前年の日露戦勝利を祝う文面が多く目につくのが特徴となる。

「謹而賀戦勝新年／併而平素ノ疎遠謝シ／猶ホ祈益々御健在」（明治 39 年 1 月 1 日付、葉上顕祐より、**写真４**）
「謹賀平和克復後／新年併待屈指健康凱旋」（明治 39 年 1 月 2 日付、柴田風太より）
「賀正／丙午元旦／凱旋に駒のいななく年の春 金玉」（明治 39 年 1 月 3 日付、岡本太麻丈より）
「古来勇有し戦も凱歌も／戦局を結び過去及び近い将来ニ／あらざるの目出度春を迎へたるは（後略）」（明治 39 年 1 月 4 日付、赤田千次郎より）
「戦捷ノ陽春目出度申納候／併而祈貴下健康」（明治 39 年 1 月 9 日付、秋山益二郎より）

これらのうち、中島家との関係で興味深いのは葉上顕祐よりの郵便（**写真４**）だが、同人の肩書きには「上寺山定光院」とある。上寺山は中島家も居宅を構える小山のことだが、その頂部には「上寺山余慶寺」が鎮座し、中島家も江戸期にはその塔頭（明王院）と遠戚関係にあった[11]。定光院も余慶寺の塔頭の 1 つだが、その関係者より「平素ノ疎遠」と文面にあるのは、ミクロな生活空間の様子がわずかではあるが垣間見えるようで面白い。

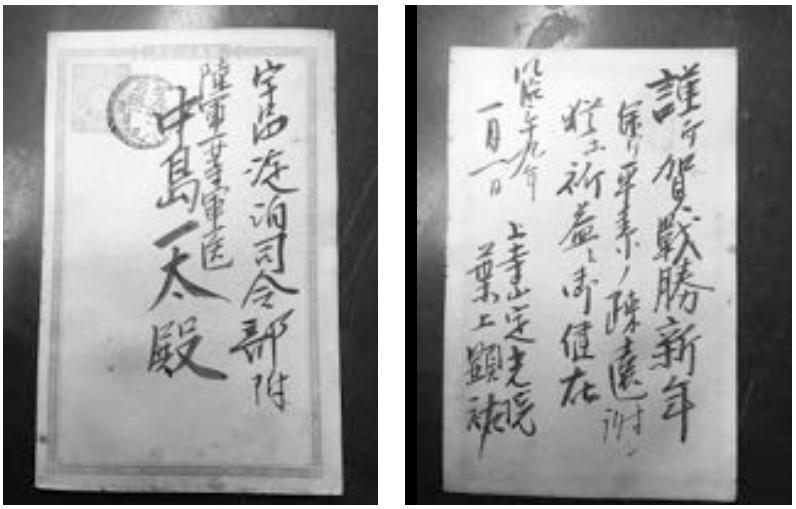


写真４（葉上顕祐より一太宛て）

またこれは新年祝いではないものの、日露戦における日本海海戦の勝利の翌日には、早くもそれを祝う一太宛て郵便も見られる（明治 38 年 5 月 30 日付け、差出人不明、**写真５**）。

写真５（差出人不明より一太宛て）

美人画の下には、「薫病／気見／舞ノ為／母堂御／来顔ニ而／子供三人／麻疹引／続キ御／看護ニ而／長々御逗／留奉多／謝候本／日御帰／宅され／候御報／せ候」と、病気見舞いとしてやって来た政子が、訪問宅の子供が麻疹に罹患していることから引き続き看護したことに対する礼状が添えられている。このあたりには、留守の一太に代わって家族の者による（恐らくは）地域の患者への対応が表れており、在村医としての中島家のあり方が（政子は在村医の娘として生まれ育っている分だけなおのこと）よく伺える資料だと言えよう。

次に、(d) の昇進祝いについてだが、一太は 1905（明治 38）年 10 月に陸軍一等軍医へと昇進する[12]。その昇進について、「一太兄ニは先搬／御昇級之由奉賀候也」（明治 38 年 11 月 16 日、小野寺古登子より）のほかは、いずれも軍属からの郵便が目につく。

「祝御栄達」（明治 38 年 9 月 22 日着、亀川尚一より、**写真６**）
「賀／御昇／進」（明治（恐らく 38 年）9 月 29 日？、板倉半右衛門より）
「祝／御栄進／祈／御健康／先／日／ハ／御／尊／影／頂戴／多謝々々／両／軍／医／殿／へ／宜／敷」（明治 38 年 10 月 8 日着、小笠原源次郎より、**写真７**）

これらの祝い状は、それぞれ自筆の風景画や絵葉書が多く目につくのも特徴だが、上の亀川・板倉は両人ともに「第五師団第六補助輸卒隊」所属と一太と同じ隊員であり、小笠原は「第十四師 第二野病（第十四師団 第二野戦病院）」所属の、（「両軍医殿へ宜敷」との文面から察するに）恐らくは軍医関係者ともみえる。

また、先に一太の陸軍一等軍医への昇進は 1905（明治 38）年 10 月と記したが、軍関係者よりの昇進祝いは 9 月下旬には発送されていることが消印より判る。恐らく、軍隊内での内示を受けてのことであろうが、これらの軍事郵便資料をみることで軍隊の内外における若干のタイムラグが存在した事実も垣間見ることができるだろう。

写真６（亀川尚一より一太宛て）

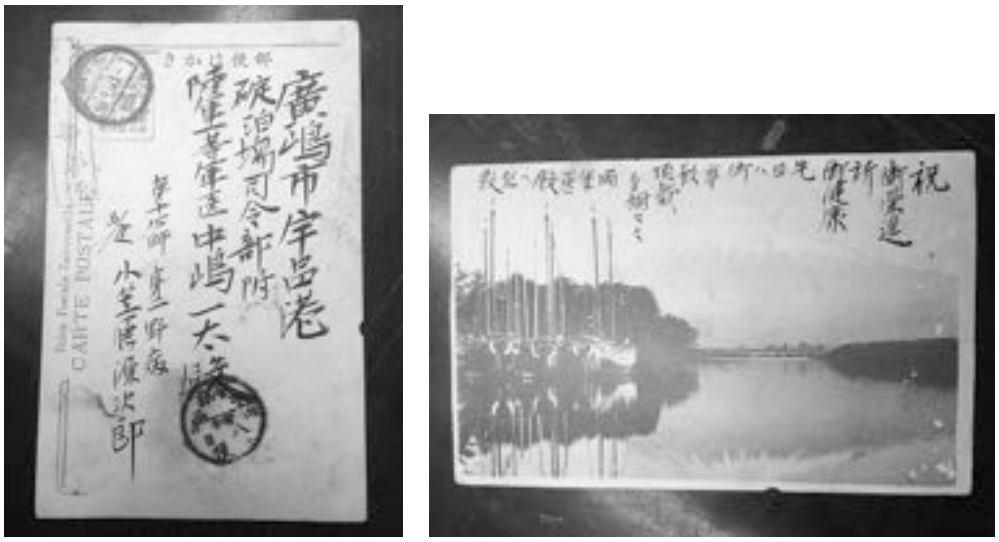


写真７（小笠原源次郎より一太宛て）

次に見舞状だが、「於清国柳樹屯　第五師団第六補助輸卒隊本部」の「陸軍三等看護長三藤多一郎」からは、宇品碇泊場に戻った一太の「奉伺御病勢」として以下の郵便がみられる。

「御病気御見舞トシテ／玲瓏玉ノ如キ美人差送リ／候間此可憐ナル美人ヲシテ／冷衾ニ泣カシメザル様長ヘニ／御愛観被下度願上候頓首」（征露 2（明治 38）年 1 月 19 日付、**写真８**）。

写真８（三藤多一郎より一太宛て）

ここから、この頃一太は何らかの病気に罹患していたことが察せられるが、「三藤多一郎」よりの郵便も美人画の絵葉書となり、発行元は右下に「文藝倶楽部絵端書 博文館」とある。博文館は明治より戦前期までの大手出版社として著名だが、多くの美術絵葉書を発行したことでも知られる[13]。

また、「岡山市上石井」の「野宮こたよ」からの一太（宇品碇泊場）宛て郵便（明治 38 年 9 月 6 日付、**写真９**）には、「兄様先日は能ク出でまして／遍ニ有難ふ御座い／ました私事も本月一日ニ無事／帰岡致しましたから憚り乍／御安心下され（中略）御あづかり／の金子／は早速／和田氏にお渡し致しま／した御伯母／様より宜しくとの事／に候／兄様またどしどし絵葉書／を頂戴な」と、「金子」を託すほどのコミュニケーションの様子と、一太がこれまでにも絵葉書を送っている様子が推察できる。この「野宮こたよ」からの郵便も、葉書裏上部に「征露記念」とあるように、日露戦争を契機に急速に拡大する郵便メディアの一端に位置するものとなる。

写真９（野宮こたよより一太宛て）

ところで、これは一太が既に軍医を退いてから後のものになるが、「姫路歩兵第十聯隊 第二中隊河本虎二郎」よりの一太宛て郵便（大正６年付）には、「出発の際は御繁忙中をも御厭なく□心／より御見送り下され且つ其上御餞別賜り／有難く深謝奉り候本日無事入隊／仕り候條御□心下され度候」とあり、新しく軍属となる若者を気に掛ける一太の様子が伝わってこよう。

この「河本虎二郎」からは、その後に所属部隊内の様子を伝える次のような郵便（大正８年２月 10 日付）も届いている。「当第十聯隊は今年は早々より脳脊髄膜炎の流行屢々右／之当□に第二中隊第七中隊の如きは一名死の患者有之候就ては二月六日ゟ第二中隊は隔離致し外出は中隊以外の区域には／出ずる事得ず」と、聯隊内に脳脊髄膜炎が流行していたこと、第二中隊ではすでに死者も出ていること、そのために中隊は隔離して外出区域も制限されていることなどが報告される。このような病状の報告は、郵便の受信者（一太）が医者であるからこその内容とも言えようが、当時の軍隊内の様子がリアルに伺える資料である。

③　日露戦後、一太の帰郷に関するもの

日露戦争後の戦地または兵営地からの引き上げ（または凱旋）について触れるものが、若干みられる。

「楢本大蔵」より一太（宇品碇泊場）宛て郵便（明治 39 年１月 10 日付、**写真１０**）では、「貴部在勤中ハ種々御高配ニ預リ／難有奉深謝候」と、差出人は一太と同じ部署に属していたことが判るが、続けて「去ル八日宇品発／十時五十分ノ列車ニ乗シ翌九日午前／五時三十分着ノ（後略）」と、一太よりも先に帰郷していることが伺える（楢本の帰郷先は差出場所が無記入のため不明）。文中の「去ル八日」とは、郵便の

消印から「明治 38 年 12 月 8 日」であることも判る。

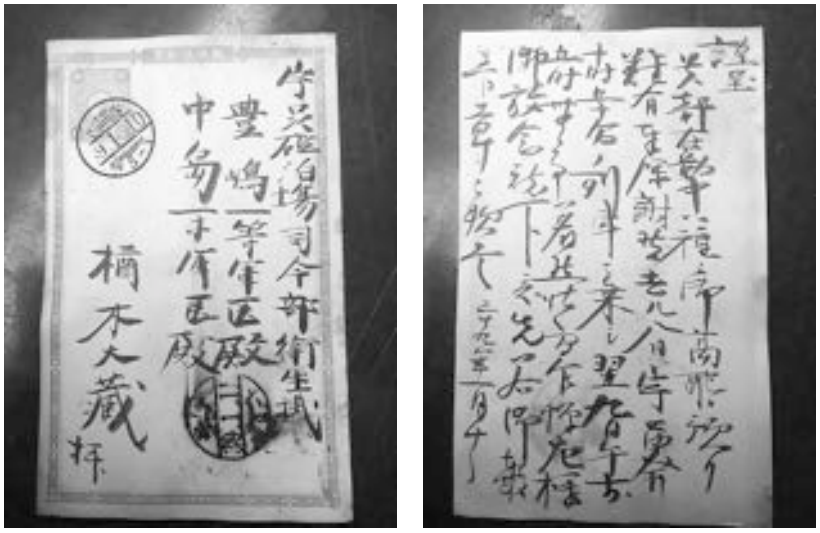


写真１０（楢本大蔵より一太宛て）

また、上道郡富山村の「久山大吉」の一太（宇品碇泊場）宛て郵便（明治 39 年 1 月 13 日着）では、「扨各軍共順次凱旋相成候ニ就テハ貴下ニモ近々／御帰リ可相成ト存候」と、周囲の状況から一太の帰郷が近々のことではないかとの文言が見える。ただし一太の帰郷は周囲の人々の期待や予想よりも意外に遅かったことが、次の一太からふさ子宛て郵便（明治 39 年 3 月 27 日付、**写真１１**）より判断できる。

「当司令部にても昨今頻に凱旋致し候も／未た河上（人名か）の内命ニ不接（中略）当部開散ハ明月下旬／との事に御座候待遠しき次第なり」との便りには、1906（明治 39）年の 3 月下旬になっても一太はまだ宇品碇泊場に勤務していたこと、所属部の解散は明月下旬の可能性と、解散を待ち遠しいと記す心情が吐露されている。さらに帰郷するための支度金として、「送／金之義ハ都合ニ依りて四十円月々送被下／度準備金之事ゆへ二十円若くハ三十円／にてもよろし」と、額は少なくても良いからと送金を依頼している。その他に、「川池（人名か）軍医ハ二月十五日に凱旋致し大阪ニ／て開業致し候」と、恐らくは同じく軍医として勤務していたであろう同僚の軍役後の動向について、帰郷先で開業医を営むことを記すあたりは、一太自身が郷里で開業医を営む身上を思いあわせるとき興味深い。

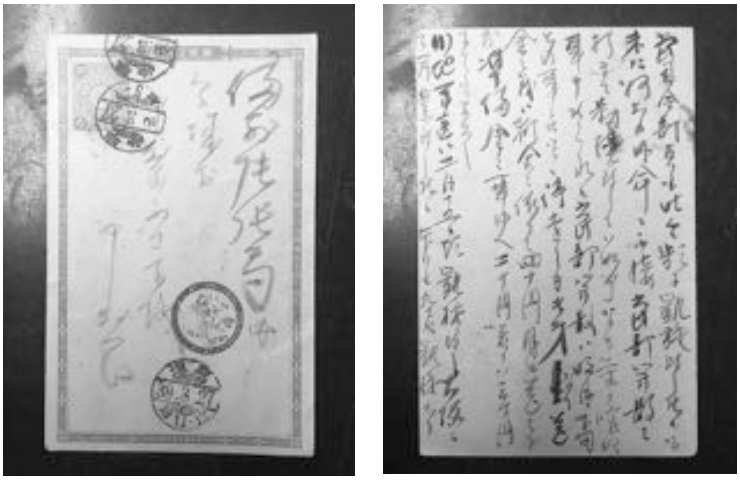


写真１１（一太よりふさ子宛て）

周囲より帰郷が遅れていた一太が、最終的にいつ頃帰郷できたのかは正確には不明だが、所蔵資料中からは少なくとも 1906（明治 39）年 4 月 8 日までは宇品碇泊場に在勤していたことが判る。一太からふさ子宛ての郵便（明治 39 年 4 月 8 日付、**写真１２**）には、「明日ハ生駒艦進水式ニ列／席之都合ニ御座候」との一文がみられるが、当時の一等巡洋艦「生駒」は 1906（明治 39）年 4 月 9 日、皇太子時代の大正天皇臨席のもとで進水式が行われていることから、一太の帰郷はその後であったことが推測できる[14]。また同じ葉書中には、「御申越之儀委細承知／致し候伊勢講之義明／月の方と交代してハ如何」とあり、郷里で関係する伊勢講のお役目などのことであろうか、妻よりの相談に受け応える様子が見てとれよう。

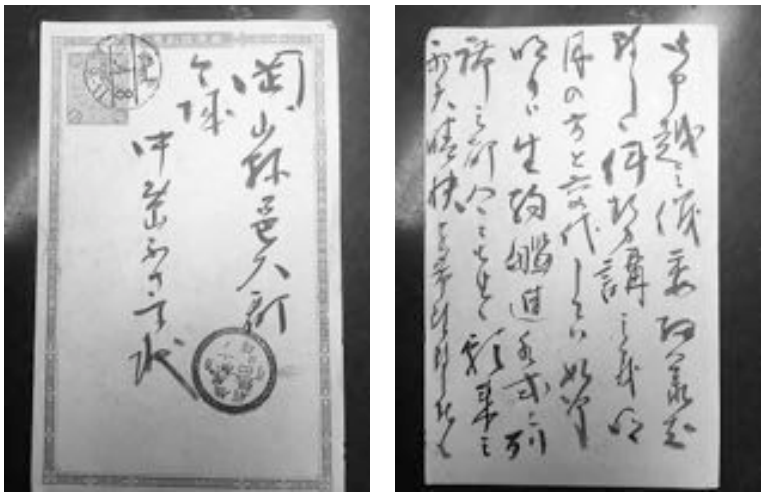


写真１２（一太よりふさ子宛て）

4　まとめ

前節では中島家に所蔵される軍事郵便中より、蔵書資料としての特色が比較的によく現れているものをいくつか取りあげ、簡単な内容の検討を行ってきた。その最大の特徴としては、一太が軍医であったことに関係する文面が挙げられる。家族とのプライベートなやり取りのなかでも、医学書の郵送を数度にわたり希望する点や、軍医の階級昇進に対する祝い状や日露戦勝利を喜ぶ郷里からの通信、また日露戦後の帰郷に関する動向と知人の軍医の顛末などといった、細かな様子を伺っていくうえでは貴重な資料群となる。

さらに発信／受信者の立場性という点は、軍事郵便に関する先行研究の多くが、(残された資料による制約という点は考慮しなければならないが) どちらかと言えば戦闘に直接的に参加する「一兵卒」に焦点を当てたものが目につくなかでは[15]、軍医という専門職の立場性をもつ資料群として、おのずとその特色が浮かび上がる面もあるだろう。先行論の多くが、出征地（外地）より内地へ宛てた郵便を基礎資料とすることに比べ、一太が受け取り／送る軍事郵便の半数以上が内地勤務先（宇品港碇泊場）を拠点としたものであるという点も（約 93 通、66%)、大きな違いとして指摘できる。そのため、(特に一太より送られる郵便は) 戦地の風俗や時には戦場の様子を伝えるような生々しい通信であるよりかは、自転車や時計の修理の話題といった、日常生活の延長にある穏やかな文面が多く目につくのだとも言える。

また、このような日常性を担保しうる要素としては、勤務地が郷里の岡山（邑久）からさほど遠くない距離にある広島県であったという点にも注意される。読み取り可能な消印からみる限り、宇品発の郵便は宛先が岡山県内であれば、早ければ翌日か翌々日には所管配達所に届いている。この距離の近さという点は、家族や郷里との頻繁なやり取りを可能にしていたと考えられよう。そこにはまた、日清戦争期には設けられていた軍事郵便の発信制限が[16]、日露戦争期には撤廃されたことも影響している。

これ以上の検討は小稿の任に余るが、より詳細な検証を行っていくうえでは、中島家所蔵資料を１つ１つ丁寧に検討していくことに加え、他の軍事郵便資料群との比較も有効であるかもしれない。この点、例えば岡山県立記録資料館に所蔵される岡山県内が差出／宛先となる軍事郵便資料などもまた、郵便の発信／受信者の立場や赴任先は中島一太とは異なるにせよ、ある同時代に発信／受信された軍事郵便の実態を多面的に理解していくうえでは比較検証する資料として有意義となろう[17]。

加えて、中島家文書中の比較的に保存状態のよい美人画絵葉書や出征記念葉書などは、当時急速に拡大していった郵便メディア研究においても、有用な資料として活用できるはずである。引き続き、関連資料を用いた様々な角度からの研究が望まれる。

---

[1] 歴史学からの「パーソナル・メディア」への注目としては、例えば、新井勝紘.

パーソナル・メディアとしての軍事郵便－兵士と銃後の戦争体験共有化－（特集/戦争の体験と記憶）. 歴史評論 2007;682;12-26、後藤康行. メディアとしてみる軍事郵便－パーソナル・メディアという視点から－. 専修史学 2007;43;8-20 などを参照。

[2] 以下、一太の経歴については、中島洋一. Ⅰ 中島家の歴史. 中島医家資料館・中島文書研究会編. 備前岡山の在村医 中島家の歴史. 京都：思文閣；2015. p38-p41 による。

[3] 注 1 新井前掲論文、p12。

[4] 後藤康行. 軍事郵便によるコミュニケーションの形成－個人と社会にまたがる二重構造－. メディア史研究 2017;42;27。

[5] 注 1 新井前掲論文、p13。

[6] 昭和初期の岡山市土木課長に同名の坪田嘉平次という名が見つけられるが、あるいは同人物であろうか。小野芳朗. 戦前期の都市計画法適用下における岡山後楽園と公園計画. 日本建築学会計画系論文集 2011;76(659);258 を参照。

[7] 中島達二. 喜翁中島達二随想集. 岡山:中島達二;1981. p228。

[8] 注 2 前掲書、p42。

[9] 太田雄寧と『東京醫事新誌』については、近藤禧禔男.「東京医事新誌」―明治初期の医学雑誌についての考察. 医学図書館 1973;20(2);141-152 を参照。また、『袖珍医語字林』は国会図書館デジタルコレクションにて閲覧した。（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836158（2018/2/20 閲覧））なお、デジタルコレクション版のまえがき（「VORREDE」）を閲覧するかぎり、『袖珍医語字林』はとくに何かの原書を翻訳したものではなく、発行元である東京医事局が独自に編纂したものだと考えられる。

[10] 柴田・平出訳本は、国会図書館デジタルコレクションにて閲覧した。（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836158（2018/2/20 閲覧））なお、凡例には原書名を「Gynaekologisches Vademecum」としか表記していないが、本文では正式書名を記した点を断っておく。また、『充爾德氏婦人科準繩』は 1896（明治 29）年 11 月には第二版が、1900（明治 33）年 12 月には第三版が出版されていたことが国会図書館所蔵本より判る。

[11] 中島家の医門第一世・中島友三（1685（貞享 2）-1757（宝暦 7））の弟が「敬真僧都」として明王院の住職となっており、さらに友三の三男（敬快阿闍梨）も同院の住職となっていることが、医門第四世・中島友玄（1808（文化 5）-1876（明治 9））が 1849（嘉永 2）年にまとめた『中島姓一統家系』には記されている。注 2 前掲書のほか、平崎真右. 地域社会における宗教者たち－神子家中島氏とその位置づけを巡って－. 中島医家資料館・中島文書研究会編. 備前岡山の在村医 中島家の歴史. 京都：思文閣；2015. p168-p187 を参照。

[12] 注 2 前掲書、p41 および p297。

[13] 「絵葉書資料館 HP」（http://www.ehagaki.org/history/（2018/2/24 閲覧））

[14] 注 2 に挙げた文献の「年表」中には、一太は 1906（明治 39）年 6 月に「論文

提出、愛知医学得業士」とあるから、恐らく6月までには郷里へと戻っていたことが推測される。「得業士」とは、旧制高等学校や旧制専門学校において授与された称号を指す。

[15] 先行論の一例としては、注1・4に挙げた文献のほか、書籍としては、大江志乃夫. 兵士たちの日露戦争－五〇〇通の軍事郵便から－. 東京:朝日新聞社;1988、専修大学文学部日本近現代史ゼミナール編. ケータイ世代が「軍事郵便」を読む. 東京:専修大学出版局;2009などを参照。また論文紀要類としては、鹿野政直ほか. 国立歴史民俗博物館研究報告2003;101;13-550、新井勝紘. 軍事郵便の基礎的研究(序)（共同研究 近代日本の兵士に関する諸問題の研究). 国立歴史民俗博物館研究報告2006;126;67-85、青木哲夫・伊藤暢直. 地域歴史資料としての軍事郵便－鏑木書簡についての豊島区立郷土資料館の試みから－. 歴史評論2007;682;27-37、などが挙げられる。

[16] 発信制限の内実は、将校および高等文官が月に3通以内、准士官以下が月に1通以内となる。1895（明治28）年には、それぞれ月に4通と2通以内に緩和された（注4前掲論文、p28)。

[17] 岡山県立記録資料館には、軍事郵便資料として凡そ30種の資料が保管される。そのなかには日露戦争期前後に「姫路騎兵第十聯隊」に所属した「草加正悟」宛てのものが数通認められる。その差出人は岡山県下の和気郡や赤磐郡からであり、中島家が位置する邑久郡とは近隣区域となる。同館所蔵資料はいずれも未翻刻の状態であり、その他に未整理の資料も所蔵されているとのことだが、周辺区域より送られた軍事郵便資料を突き合わせてみる作業も今後は視野に入れられるかもしれない。所蔵資料の閲覧につき御融通を頂いた同館に対し、この場を借りて御礼申し上げます。

中島家の売薬能書板木の翻刻

梶谷　真司
東京大学　教授

中島家の製売薬業については、『中島家の歴史』に所収の拙論において、販売していた薬の種類、処方、薬ごとの売り上げ、事業形態（雇用、販売拠点、関連物品（版木、紙、販売店への土産物、薬の原材料）、従業員の業績等について分析した。どの薬がどれくらい売れたかは、「売薬弘所姓名録」に薬の名前が一文字の略号と数字で――「梅三」「肥二」「沈四」「理五」など――記されているところから読み取れる（梅＝梅花錠、肥＝神肥丸、沈＝沈麝丹、理＝理中圓）。

だが、そのさい薬の名前と効能が分かったのは、効能書・看板の板木が残っていたからである。板木は保存状態がきわめて良好で、ほとんどの文字を判読することができる。これがなければ、中島家の製売薬業の実態、とくに販売圏内の薬の需要についてはほとんど不明なままだっただろう。その点でこの板木資料はきわめて大きな意味をもっている。

板木は全部で 102 点あり、関連文書に出てくる薬のすべてをカバーしている。種類は 50 種類ある（したがって一つの薬名で板木が複数あるものも含まれる）。「売薬諸事記」の文書には、冒頭の「板木直段覚」に購入記録があり、中島友玄がこれらの板木を 3 つの業者に直接発注して作らせていたことが分かる。その内訳は、大坂市田次郎兵衛が 14 枚、西大寺見付屋岩吉が 16 枚、西大寺湊屋三郎治が膏薬 3 枚、目書小判 10 枚、袋表形 6 枚、大文字看板 5 枚、預ヶ置袋判 1 枚となっている。

中島家は製売薬の屋号を「月桂堂」としており、大半の板木にこの屋号がついている。「鍼灸施治人名録」や「鍼灸諸事代紳録」から分かるように、鍼灸に関しては、別途「金艾堂」という屋号を使っており、この板木が 2 点ほどある。他に一部「辛崎廣井」が 2 点と「花月堂」が 3 点、「くら田屋」が 1 点ある（何も屋号がついていないものもある）。

能書の内容としては、薬名だけのもの、薬名と効能を記したもの、さらに「用いよう」（使用法）も記したものがある。その他に屋号や薬名、値段を書いた板木もある（看板や判）。

これらの情報をさらに分析すれば、当時のこの地域の薬事情や中島家の製売薬業について、新たな側面が見えてくるにちがいない。それについてはまた今後の

研究を待つことにする。

【凡例】
・器物の後の番号は、中島家医家資料館の資料番号に対応している。
・文字の大小は、実際の板木を模している。
・仮名だけで意味のとりにくい箇所は、その後に括弧で漢字表記を入れた。
・判読できなかった箇所には□を、文字は判読したが言葉の意味が分からないものには「？」を付した。

中島家　板木翻刻

器物 1

備前上寺村
はれいたみ妙薬
たむしの妙薬
月桂堂製

器物 2

萬病藥王　梅花錠（ばいくわじやう）
東備上寺邨月桂堂製
＊裏面墨書　梅花錠

器物 3

紋　はれ症　めう（妙）薬　禹水湯（うすいたうすいたう）
東備上寺邨月桂堂製
＊裏面墨書　禹水湯

器物 4

東備上寺邨

紋　家傳　牛の妙薬

月桂堂製

＊裏面墨書　牛乃藥

器物５

紋　小児藥王　神肥丸（しんひぐわん）

東備上寺邨月桂堂製

＊裏面墨書　神月丸

器物６

御夢想神解散　牛の妙薬　一ふく入銀壹匁

○　此御薬は、元来御むそふ（夢想）にて、まことにありがたき古今無双の名方なり。先祖より代々これを傳ふるといへども、いまだひろめまふさず。此たび人々のすすめにまかせ、いささか料を定め、こんもふ（懇望）の人にゆづり申候。

○　毎月はじめの丑の日に一ふくづゝ用ひおけば、病をのがるることうたがいなし。たとへやむともその病かろし。牛は人とちがい、ものいうことあたわざるゆへ其病をしらずして、ついに生をうしなふことあり。ゆだんすべからず。すこしにても病（わづ）らい有るときはいそぎこの薬を用ひおくべし。大病にいたることなし。

○　第一ねつこし？、しよくたい（食滞）、或はわちたる？によし。その外何病にかぎらず、一さいのやまひに用ひて妙なり。

○　用ひよう　みそしるの中へかきまぜ、一度に用ひてよし。

調合所　東備上寺　月桂堂製　印

器物７

岡山縣

當月

等小學　　卒業候事

岡山縣備前國邑久郡
第三番学区
今城小学
明治　　年　　月

器物 8

蘭傳　　中風の妙薬　壱まわり二十日分　代銀四匁

○　中風にて俄にたをれ、或はかた身しびれ、動きがたく、または顔ゆがみ、口ひきつけ、ものいうことなりがたきもの七日のうちに此薬を用れば、もとの如くに治することうたがいなし。

○常に半身いたみ、或は手足しびれ、またはぞふり（草履）などぬげたるをおぼへざることは、ゆだんすべからず。おゐおゐ中風となるものなり。早く此くすりを用ひ置べし。おとることなし。

○　家によりそんをひき？、代々中風をわづらふことあり。此薬を毎年春と秋と二度づつ用をくべし。おこらざることうたがいなし。

○

此くすりは二十日を一まわりとして用る薬なり。此くすりを二十にわけ一ふくを一日にさけにて用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製

器物 9

備前上寺村
本家　御薬調合處
月桂堂　印

器物 10

さんぜんさんご血のみち
づゝうのぼせ経水不順によし
賀川
絵　山田ふり藥（振薬）

傳方

備前上寺村　月桂堂製

器物 11

さんせん（産前）諸病妙薬　安胎湯（あんたいとう）　一ふく入代銀八分

○　つわりにてむねわるく、或は食をうけざるによし。

○　たかきところよりおち、或は不意にたおれ腹中の子うごかず、又はちづら？はなれ、はらはり、はらいたみ、あしこしひき付るによし。

○　づつう、目まい、またはりんしつ（淋疾）、こしけ（帯下）に、べんのしげく、はら下りするによし。

○　くわいにん（懐妊）中せき（咳）つきて、やまざる人あり。此薬の中へふきのは（蕗の葉）を入、せん（煎）じ用てよし。

○　五六ヶ月、或は七八月にて子ながれくせになりたる人あり。此薬をしんみやうに用ゆるときは、月みつるまで生るることなし。

○　すべてくわいにん（懐妊）中おりおり用ひおけば、なんざん（難産）のちのみち（血の道）のうれいなし。

○　用よう　一二度ふり出し、其後は水二はい入、一はいにせんじ、用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 12

梅の露

御つかいやう　此薬にてはをみがき、そのうへつねのごとくかね（鉄漿＝お歯黒）御つけ被成候へば、廿日三十日はげぬ事妙也。つねにはのいたみ、又はゆるぎ候御方は男女ともにへだてなく、此くすり御つけ被成候へば、はのね（歯の根）すはり、いたむ事なし。おりふし御用ひて被成候。

本家　調合所　長崎延寿堂製

器物 13

小児薬王　神肥丸　　十りう（粒）入　價銀壱匁

○　一切のねつさましによし。
○　むしけ（虫気）にて気いらち、または気うかず、或ははら下り、鳥目によし。
○　しよくたい（食滞）、はらいたみ、たんせき（痰咳？）によし。
○　たいどく（胎毒）、くさけ（瘡気）によし。
○　きやうふう（驚風）、又はほうそう（疱瘡）、はしかによし。
○　すべてむまれつきよわき児に常に用てよし。
○　用よう　二三りう、又は四五りうもさゆにて用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 14

古今無双解毒丸　小児たいどく妙薬　十粒入　銀一匁五分

△　小児たいどくの病にはやく治するくすり世間におほく有之候へども、よく治する時は、毒ないこう（内攻）して、夫より種々の病を生ずる事多し。誠におそろしきもの也。此薬を用てゆるゆる治する時は、少しもわざわいなく、一生の間しゆもつ（腫物）出ざる事うたがいなし。
△　小児生まれて七やのうちに用おけば、たいどくのうれゐなし。
△　口中いたみ、或は頭に腫物いで、或は目いたみ、又は口わき耳わきに水がさ生る症、または鵞口瘡とて口中一めんに白きもの出、或は惣身にこまかなるもの出る症に奇妙なり。
△　用いよう　一りうに水一はい入、八分目にせんじ、一日に用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 15

こん（魂）とりたて

気つけの妙方　保齢丹　一両價銀八匁　半両價銀四匁

○　この薬は第一元気を補ひ、脾胃を調ふ古今無双の名方なり。故にきう病（急病）のきつけには第一の薬なり。其外何病によらず、腹中よわくこん（魂）のうすきに妙なり。
○　夫諸病のおこる始りは、大に心気を労し、或は不意におどろき、又は

大酒大食（たいしゆたいしよく）にて腹中（ふくちう）をそん（損）じ、或は物に気こん（魂）をこらし、又は色にふけり気をへらし、又は大病をわづらい、肥（ひ）立かね、或は産後（さんご）長引症捨置（すておく）には、おいおい労咳（らうがい）または脾胃虚（ひいきょ）、其外種々（しゆしゆ）の大病となるものなり。早く此薬をのみて、腹中ととのふときは、全快にいたること神の如し。

○　腹中よわくして常に風ひきやすく、或は少しのことにおびへ、又は物にたいくつし、めまい立くらみ、或はむねつかへ、はら下り、またはあしこし（足腰）ひへ、あるいは小べんしげき症、みな心気のよわきところよりおこることなり。常に此くすりを用ゆべし。すみやかに大功ある事うたがいなし。

○

此薬朝せんにんぢん（朝鮮人参）にて製したるゆへに、餘分には用ひがたく、一度にかけめ壱分又は弐分づつさゆにてとき、用ゆべし。尤きう（急）なる時は、一度に五六分も用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 16

はれしやう（腫症）大妙薬　禹水湯（うすいとう）　七ふく入　代銀三匁

○　此薬は代々家傳名方にて、はれしやう一通りにおゐては、いかほどむつかしき症たりとも、治せずということなし。

○　さんぜん（産前）さんご（産後）のは（腫）れ、またはかつけ（脚気）、ちょうまん（脹満）、ひぜんの（皮癬）のおゐこみ、又は小児たいどく（胎毒）、或はたん（痰）、又はひへ症（冷え症）にては（腫）れたるによし。

○　もろもろはれしよう（腫れ症）にて、身おもく、口かわき、むね（胸）いき（息）だわしく、小べん少なく、せき（咳）つよきによし。

○　右の分、男女小人にかぎらず、一さいのはれしように大功あること、まことに古今無二の大奇方也。

○

用よう　一ふくに水二はい入、一はいにせんじ、□に一ふくづつ用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 17

阿蘭傳方　蘇雪圓（そせつえん）

主　治

〇気つけによし　〇りういん（留飲）、たん（痰）によし

〇づつう、めまい、のぼせによし　〇ねつ病によし

〇は（歯）のいたみ、口中一切によし　〇はらいたみ、むねいたみによし

〇食滞并どくげしによし　〇暑気はらい、くわくらん（霍乱）によし

〇さんご（産後）血のぼせによし　〇さけ（酒）のよいによし

〇中風并はれしう（腫れ症）によし 〇しやくき（癪気）一さいによし

〇うちみ、はれものによし　〇毒むしのさしたるによし

右いづれもさゆにて御用ひなさるべし。常に用ひおけば、諸病のおこることをふせぐなり。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 18

しよくしよふ（食傷）めうやく（妙薬）　木香丸（もつかうぐわん）

一　第一しよくせう、はらいたみ（腹痛み）、くわくらん（霍乱）、はらいたみによし

一　たんせき（痰咳）にて、いき（息）だわしく、むね（胸）ふさがるによし

一　しやく（癪）、りういん（留飲）、せんき（疝気）、はら（腹）のいたみ、むね（胸）のつかへによし。

一　うを（魚）鳥の毒、或はさけ（酒）のあたり、水のあたりたるによし。

一　旅、又は夏ぶんなどは、かならず懐中すべき大妙薬なり。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 19

小児薬王　救驚丹（きうけうたん）　五りふ入　代銀壱匁

○　此薬は第一きうきようふう（急驚風）、まんきやうふう（慢驚風）の名方にて、いか程さしこみ、目を見つめ、歯をくいしめ、ねつつよく、正気なく、いき（息）たゑんとするに、三四りうも用ゆれば、早そく治することうたがいなし。

○　ほうそう（疱瘡）、はしかのまぶり（守り）によし。

○　かん（癇）にて気みじかく、又は気の□づくに常に用てよし。

○　何病によらず、ふくつう（腹痛）つよきに用てよし。

○　用よう　一りうに水二はい入、一はいにせん（煎）じ用べし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 20

ながち（長血）のめう方（妙方）　補血丸（ほけつぐわん）　一まわり十粒入　價銀三匁

○　月やく十日または十四五日もやまず、或は、五十日も下り、又やみまた下りするは、ながち（長血）の下地なり。又二三月も不足したるが、にわかに沢山に下るあり。これまた長ち（血）となる事あり。或はしろきもの、又はうを（魚）のはらわたの如きもの下るあり。白血の下地なり。はやくこの薬を用ゆべし。全快にいたることうたがいなし。

○　用よう　一りう水二はい入、一はいにせんじ、すきはら用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 21

月桂堂製造　調合薬製品目録

○如聖丸（じよせいぐわん）　ちちをいだす大めう薬也　　○はやめの妙薬

○ながち（長血）の妙薬　　○月ながしの妙薬

○鹿（か）の子のくろやき　　○山田ふり薬

○小児諸病妙薬目録

○神肥丸（しんひぐわん）　小児諸病の薬□也　○救驚丸（きうきやうぐわん）　きやうふう（驚風）の大めう薬なり

○五香湯（ごかうとう）　　○たいどくの妙薬

○疱瘡（ほうそう）やすき妙あらい薬　　○銘紳散（めいしんさん）　小児よる小便をおぼへざるに妙薬

○かう薬并付薬目録

○醸膿膏（ぜうのうかう）　すいだし　　○整膚膏（せいふかう）　いやし　　○解凝膏（かいぎやうかう）　おしかう

○錦嚢丹（きんのうたん）　ちらし　　○たむしの妙薬　　○ほくろぬき

○うるしまけ妙薬　　○なまず（癜風）の妙薬　○わきがの妙薬

○血（ち）どめの妙薬　　○乳（ちち）のいたみの妙薬　　○はのいたみ妙薬

○ひびあかぎれの妙薬　○髪（かみ）はへくすり　　○頭（かしら）しらみうせ薬

○蝮の妙薬

○いろいろ製薬るい目録

○床のうみ　　○染粉いろいろ　　○はみがき　　○あらい粉

○ふし（附子）の粉　○くわい中（懐中）かね（鉄漿）○にほい袋いろいろ

○あぶらぬき

○ちまさり　　○しらみうせ薬　　○牛の妙薬

器物 22

神仙傳授　遺尿妙薬　銘紳散（めいしんさん）　一廻り二十日分　價銀拾六匁

一　此薬は小児よるねい（寝入）りたるうち、おぼへず小便の出るに大めう薬なり。

一　此くすりの方は、或時白髪の老翁来りて予に傳えり。その時点？を問へどもあへて言ず。山中に住いせし人なりとて、つひに帰りさる。其後此方を諸人に誠に□其功百度百中。誠に古今無双の名方也。神仙予に傳えりと思えり。此度世人にほどこし度いささかの料を定め、世に弘るものなり。

一　用ひよふ　かけ目五分づつ、よなよな（夜な夜な）ね（寝）しなにさゆにて御用ゐるにて、さけをあたため、人々の好次第にのみたまい、又其後にて白かゆを喰たまふべし。尤十三才以上の人は、かけめ六分づつ御用ひなさるべし。一廻り二十日にて治し申なり。もし全快せざる時は、二廻り程御用いなさるべし。きわめて治する事うたがいなし。

調合處　備前上寺　月桂堂製　印

器物 23

家傳神方　ひぜん妙湯藥　一回り銀四匁　半廻り銀弐匁

○このくすりをもめんのふくろに入、たらいに湯を三拝ほどいれ、中にてとくとふり出し、一日に五六度づつ三日の間、手と足とを御あらゐ、七日間をおきて、はらとせなを同じく三日のあひだ御あらゐ、四日目にしろ水のゆにて惣身を御洗ひなさるべし。尤よわき人かまたは病おもぎ人なれば、半まわりにて十五日も二十日も間おきて、御あらひなさるべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 24

家傳名方　ちちだし　如聖丸（じよせいぐわん）　一廻り分十粒入　價銀四匁

○　此薬は家傳名方にて諸人のなんぎ（難儀）をすくうこと、あげてかぞへがたし。まことに古今無双の神方といふべし。

○　さんご（産後）ちち（乳）の少なき人、七や（夜）のうちに用ゆれば、三十三日の間にはきわめて沢山にいづるなり。また七や通て用れば、六十三日の間にはかならず出る事うたがいなし。いか程出ざるちちにても、三まわりぐらい用ゆれば、いでずということなし。

○　さんご肥立かね、または大病をわづらい、ちち（乳）のあがりたるものは、此薬を用ひてしきりにちちをすい出だすべし。ちあな（乳穴）ひらきて、ちちの出ることまことに神の如し。さんぜん（産前）此薬を一まわり用おけば、さんご（産後）ちちのすくなきことなし。

○　用よう　一りうに水一合半、さけ五しやく入、一はいにせんじ用ゆべし。別にあづき五しやくをしやうゆ（醤油）にてたき、一日にくひつくすべし。

○　諸薬さし合なし。但しあぶらもの一切かたく禁ずべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 25

神寶丹

主治効書

治二食傷（ものあたり）○霍乱（くはくらん）○熱症（ねつ）○下痢（くだりばら）○心腹卒痛（むねはらにはかにいたむ）○悪心（むなづかへ）○嘔吐（へづきはき）○頭痛（づつう）○眩暈（めまい）○積聚（しやく）○

心下痞硬(みづおちのこり)○産後血暈(さんごのちのみち)
右之諸症(やまい)ニハ、壹包 白湯(さゆ)ニテ 頓服(いちどニのむ)。小児ハ大人ノ半量(はんぶん)ヲ用ユベシ。

器物 26

かんしやくみやう方　神寶丹(しんほうたん)　十粒入　代銀壱匁五分

○　夫しやく（癪）のやまい増長する時はかん（癇）となり、気ちがいとなるものなり。其根元は、みな気のせまき處より生じ、或は不意に心をつかい、気をいため、又は大病をわづらいおこることあり。婦人などはさんご（産後）におほし。

○　此病は気せわしく、はらだち（腹立ち）やすく、物に気をこり、少しのことに気をつかひ、又は物にたいくつ（退屈）しやすく、夜ねられず、わけもなきゆめを見、又はむねふさがり、むねさわぎ、はらいたみ、はらはり、どうき有てむねへさしこみ、いきだわしく、しよく（食）すればつかへ、むね（胸）すかなく、づつう（頭痛）、めまい、かたくびすじ（肩首筋）こりいたむ、症みなかんしやく（癇癪）の病なり。捨置時はおひおひ増長し、一生なんぎ（難儀）となるものなり。早く此薬を用べし。全快にいたる事、朝日の登るがごとし。

○

用ひよう　一りうに水二はい入、一はいにせん（煎）じ、日に一りうづつ用ゆべし。但し大人はかみくだき、さゆ（白湯）にて用もよし。尤急病とちがい、長く用ゆるをかんよう（肝要）とすべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 27

りういん（留飲）めう薬　建胃丸　一回り分七粒入　價銀四匁

○　此薬は家傳名方にて、いかほどむつかしき症たりとも、治せずといふことなし。□□しさし合おほき薬にて是をよく守らざれば功なし。禁物左にしるす。

魚るい一さい　　さけす　　さとう　　もち
とうふ　　こんにやく　　そば　　わらび

ぜんまい　　ごぼふ　　里いも　　竹の子
めうが　　せり　　ほふれんそふ　　ちさ
ごま　　大豆　　ささげ　　なすび
うり　　まつたけ

○　右の物よろしからず。食飼は一日に米二合かゆにつくり、三度に用ゆべし。尤かろき病には少し餘分にてもくるしからず。右のようぜう（養生）よくつつしまずんば、薬ききず不申。

○　夫りういんの始りは、むねつかへ、むねすかなく、或はむかむかして、おくび出、はらなり、はらいたみ、はらすじばる症、りういんの下地也。早く治せずんば、おいおいなんぎの症と成もの也。此薬を用ひ治するといへども、病根よく治せざれば、おいおいおこる事あり。たとへ治すとも、半年斗はおりおり用ひべし。

○　用いよふ　いちりうに水二はい入、一はいにせんじ、用ゆべし。尤かろき病ならば、かみくだき用てもよし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 28

御むそう　　神解散（しんがいさん）

牛の絵の妙薬

家傳　　月桂堂製　印

器物 29

朝鮮大人参入　熊膽丸　一貼代　百文賣

一　第一食しやう（傷）、はらのいたみによし
一　積、つかへ、さしこみによし
一　りういん、酒どくをけすに妙なり
一　くわくらん（霍乱）、又は腹はり、はりくだり、なめしぶるによし
一　小児、むし、はらいたみによし
一　産後はらいたみ、又は血のみちによし
一　おこりにはやくの日に二三りう用いて、おつること神の如し。

一　牛馬のわづらいに用て奇妙也。

一　右いづれもさゆにて用てよし

諸病さし合なし

本家調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物30

神験無比　沈麝丹（ちんじやたん）　十粒入　價四分

○　功能

○　第一気つけ、どくげしによし。水にて用ゆ。しよくせう（食傷）、はらのいたみ、くわくらん（霍乱）によし。しをゆ（塩湯）にて用ゆ。

○　たん、せきにてむねふさがり、いきだわしきによし。せうが（生姜）のおろしゆ（湯）にて用ゆ。

○　しやく（癪）、りうゐん（留飲）、せんき（疝気）、はらのいたみ、むねのつかへ、むねのくぎるによし。さゆにて用ゆ。

○　さけ（酒）より出たる病によし。ちや（茶）にて用ゆ。

○　うを鳥のどくにあたり、又は水のかわりによし。

○　婦人のちのみち、けい水の不順によし。

○　小児きやうふう、さしこみによし。

右の分男女小人にかぎらず、いづれの病にもよし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物31

ひゑ一さいのめう薬　理中圓（りちうゑん）　一両銀四匁　半両銀弐匁

○　此薬は腹中をととのへ、内方をばくたい？にあたため、一さいのひへ症に大めう薬なり。

○　ひへ症にては、はらはり、はらいたみ、はらくだり、或は惣身手足ひゑ、夜ねられず、又は小べんしげく、或は腹中すぢばり、むねつかへ、或は足こしひきつけ、或はきんのすぢはり、又は血の下るによし。

○　疝気、りういん（留飲）、せんしやく（疝癪）、痔（ぢ）、脱肛（だつかう）、りんしつ（淋疾）、がんがさ（雁瘡）、はぐき、或は惣身にしゆもつの出る症みなひゑより生る

病なり。此薬をおこたりなく用る時は、其功ある事、雪霜ににへゆ（煮え湯）をかくる如し。大人小人にかぎらず、ねいりたるうち小便の出るをおぼへず、或いはいんすい（陰水）のもれる症に大奇妙なり。

○　婦人さんぜんさんご長血白血一さいの血のみち径水（けいすい）の不順によし。

○　すべてさしたる病なくとも、常に此薬を服する時は、何となく腹中調ひ、元気つよくして、時々のはやり病をうくる事なし。

○　用よう　一處に二三分、或は五六分さゆにて御用ひなさるべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 32

御むそふ家傳　ほふそうやすき　御あらい薬　一ふく入　銀二匁

一　此薬は、元来御むそふにて代々これを傳えり。疱瘡（はうそう）はやる時分、此薬にてせんじたる大豆にて内の毒をさり、惣身をあらい、外より毒をさる時は、きわめてかろし。誠に有りがたき古今無二の名方なり。

一　洗ひよう　此薬の内へ青大豆二十りうに黒大豆二十りう入、水弐升にて大豆のにへるほどせんじ、大豆ばかりを引あげおきて、程の薬にて行水の如く惣身をあらい、其後にてかの大豆を其子にたべさすべし。もしち（乳）のみ子なれば、其母たべてよし。

調合處　備前上寺　月桂堂製　印

器物 33

山田ふり薬

器物 34

紋　萬病主薬　沈麝丹（ちんじやたん）

東備上寺村　月桂堂　印

器物 35

（欄外右）

懐胎（くはいたい）の婦人腰（ふじんこし）にさげれば、自然（しぜん）に腹内（ふくない）のどくをけすゆへ、さん（産）かろく

生るる児、胎どく氣そくなし。

巾着の絵　奇妙巾着薬　一ふく　　文

ほうさう（疱瘡）前、一年弐三度□□は瘡毒げすゆへ、きはめてかろし。

△雁瘡　△飛火瘡　△楊梅瘡のるい　△寒傷　△小児かぶとがさ

△其外大人小児瘡一さいに用ひてよし。

用ひやうは、此封包のまま巾着に入、帯にさげ、昼夜こしを放さず等と治したるうへ、土中に埋むべし。麁抹にするか、又は封をきり、中を見れば、又そとのごとく瘡生ず。いか体之人にても、発き見る時は、忽ち瘡を病なり。恐れつつしむべし。たとへいかやうの瘡にても、薬を用ひずして不思議にどくを消じ、自然とうちより平養なさしむる妙方なり。ゆへに瘡を押あらひは、病気変じていろいろと難渋する事少もなく、外に病ひ有ともいささかも害なし。かならずうたがふべからず。用ひて其妙を知りなふべし。

△　此薬一ふく腰にさげれば、かるきは二三日のうちしるし有て、はやくいゆるなり。おもきか又はどくなるものを食すれば、つゆる事おもし。毒らしきものいむべし。但し三十日過れば、こうのふ（効能）も薄くなりて、治しがたし。若おもきくさは、三十日のうちいへざる時は、又あるらしき薬に仕被合候。さければ、壱人も治せずといふ事なし。実に無るいの神方なり。万一いへざる時は、薬代へんしん（返進）いたし申べきなり。

執匙所　備前東辛崎　廣井氏製　印

取次所　大阪堂嶋五丁目森久屋　京都三條大橋山口屋

（欄外上）

一　夜行に妖邪狐狸の禍なし

一　墓所海濱深山へ獨行とも、山嵐瘴氣に觸らるる事なし

一　瘟疫時氣霍乱に中て煩ふ事なし

一　高より落るとも怪我なし

一　悪魔悪人立向ふ事なし

抑此薬は本山安樂院の霊方にして所々へ弘め來る所、瘡毒腫物を治する事、速にして是求人多し。依て小兒并遠行人の為に右の方を加て猶普く世に

弘む。悪魔病魔を拂ふ神仙の霊方にして、不思議に災難に逢事なし。　決　て疑 べからず。用て其の霊験を知り給へ。

（欄外左）
座席へ直に置べからず。麁抹にする人は、神仙の罰を 蒙 る者也。　謹　で尊信する人は、悪鬼 退 て善神の加護を得と云。

器物 36

せん薬
丸薬
ねり薬　　調合處
散薬
かう薬

口上

一　此度うり弘め申候御薬は、数年来心がけ、三都の名醫并国々所々の各家の奇方をもとめ、且又おらんだの名方を集め、それぞれ用い、おぼへよくしるし有る方のみをゑらみ（選み）、薬種吟味の上、製法念入調合仕申候□に應じ、多少にかぎらず、御求被下功のう御こころみ、その上幾久御用ゐ、作付□被為下偏奉希上候。已上。

月日　　備前上寺村
くら田屋
三代□

各様

器物 37

和蘭
おこりおとし薬
傳方

器物 38

万病灸鍼療治（まんびやうきうはりのりようぢ）

毎月　二日　十二日　廿二日

昔より灸鍼にて万病を治する事、其功多しといへども、久しくこの道すたれて世に功することを知るものなし。先生数年来この道に心をつくし、大功有る事をおぼへ、此度諸人の病をすくひ度、毎月日を定め、療治いたし申候。又無病の人といへども、寒中初の子の日、土用初の丑の日、養生灸をすへおく時は、年中病を生ずることなし。御望の人は、右の日くり合せ、御出可被成候。已上。

邑久郡上寺村　金艾堂執事

器物 39

大人小人婦人万病の大奇薬

沈麝丹（ちんじやたん）

備前上寺村　月桂堂

器物 40

第一　しよくしやう（食傷）　くわくらん（霍乱）　しやく（癪）

つかへ　はらのいたみによし

くまのゐ丸

壱貼代百文うり

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 41

名方　神中丸

第一しよくしやう（食傷）一通りに妙薬。いかやうにはらいたむとも、此薬大人は三四粒、小兒に一りう又は二りう、さゆ（白湯）にて御用て被成候。たとへ二三年におよぶしよくしやうにても、たちまち下る事妙也。五七度も下りてのち、とめやう、みそがゆ、又は水を用へてとまる也。其外病にきき不申候。但さんぜんさんご（産前産後）はらみ女にいむべし。

器物 42

家傳名方　御目あらい薬　一ふく　銀三分

はやり目　つきめ（突き目）　うわひ（上翳）

そこひ（底翳）　かすみめ　のぼせめ

ちめ（血目）　たれめ　ほしめ（星目）

かかりもの　その外一せいのいたみめによし

あらいよう　ちよくに水すこしいれ、この薬をかきまぜ、鳥の羽にて御あらいなさるべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 43

和蘭傳方　おこりおとし薬　一ふく　銀一匁

用ひよう　水二はい入、一はいにせんじ、ふるひ（震ひ）のつく一時ほどまへに一度にもちひ、そのあとにてさけをきこん程のみ、よぎ（夜着）などおほひやすむべし。落る事うたがいなし。尤毎日ふるひなれば、二日に二ふく用ゆべし。

調合所　備前上寺　月桂堂製　印

器物 44

家傳名方　神功丸（しんこうぐわん）　十りう入　銀六分

〇しやく（癪）はらいたみ　〇しよくせう（食傷）はらいたみ

〇くわくらん（霍乱）はらいたみ　〇ひゑ　はらいたみ

〇むしはらいたみ　〇せんき（疝気）はらいたみ

〇さんぜんさんごはらいたみ

〇右の外、何病にかぎらず、一さいのはらいたみに大妙薬なり。小人は一りう又は二り大人は三四りうもさゆにて用ゆべし。

調合處　備前上寺　月桂堂製　印

器物45

すいだし　醸膿膏（じやうのうかう）　一貝銀弐分

ちよう（癥）　よう（瘍）　ねぶと（根太）

ひょうそ（瘭疽）　こぶ　はばき？

ひぜん（皮癬）　かたむし？

小児たいどく

其外一さいのしゆもつるい（腫物類）によし。

器物46

日本に一法　小兒藥王　肝凉圓　一ふく代は拾文賣

五かん（疳）　きやうふう（驚風）

ほうさう（疱瘡）　はしか

ねつさまし　きつけ

きうひやう？　しよくしやう（食傷）

どくけし　しやうかん（傷寒）

引風　むし一切

小児十五才までの諸病に用て妙也。やまひおもきはとしの数程一日に二三度、七日用てよし。かるきは二三粒づつ用てよし。何れもさゆにて用ゆべし。

此御くすり御用へ被成候時は、五しん（辛）川魚一時いむべし。

器物47

神仙傳授

遺尿妙薬　銘紳散

累代秘薬

器物48

和蘭傳方　蘇雪圓（そせつゑん）

主治

一　第一氣つけ

一　目まい立くらみによし

一　小児急驚風によし
一　酒とく（毒）によし
一　しやく（癪）つかへによし
一　食滞はら痛によし
一　毒虫のさしたるによし
其外すべての急病に用てよし

器物 49

一貼代百二十五文一粒代二十五文うり
紋　むしおさへ
御免製薬所　備前上寺村　月桂堂製　印

器物 50

いやしかう薬　　整膚膏（せいふかう）　　一貝銀弐分
やけど　　きうのうぐい？　　ひび
しもやけ　　づそう（頭瘡）　　げかん（下疳）
たいどく　　うるしまけ
いんきん（陰金）
其外一さいのしゆもつ（腫物）久しくいゑざるによし。

器物 51

神驗　大人小人婦人万病の大奇薬なり
沉麝丹
無比　備前上寺村　月桂堂製

器物 52

家傳
御目あらい薬
名方

器物 53

古今

神寶丹

無双

器物 54

きのつき（気の尽き？）　　めまい

しゆとく（酒毒）　　づつう

しよくせう（食傷）　　はらいたみ

せんき（疝気）　　はのいたみ

小児　　むししやく（虫癪）

きうきやうふふ（急驚風）

右男女共用て妙也。

万病に用てよし。

但はらみ女にいむ。

中島氏製

器物 55

日本に一法

小兒藥王　　肝凉圓

備前上寺村　月桂堂製　印

器物 56

小児　小児第一むしおさへ、ねつさましに大奇薬なり。

紋　　金龍丸

藥王

器物 57

風　はやさまし　ねびへ　暑気はらひによし

日本一

備前上寺村　月桂堂製

器物 58

小児薬王　　金龍丸功能　　五粒入　價百二十五銅

第一氣つけ、むしおさへ、かん（疳）をしづめ、驚風、かたかい（癖疾）、はやくさ（丹毒）、目をみつめ歯をくいしめたる時、歯の根へすり付、鼻へ吹入れば、よみがへることうたがいなし。

一　しよふかん（傷寒）、引かぜ、其外すべてのねつさましに大妙薬なり。

一　ちばなれ早く、脾をそんじ、食かわき、又はしよくしやう（食傷）、はらいたみ、くだりばら、たいどく（胎毒）、くさけ（瘡気）、鳥目によし。

一　すべてむまれつきよはき児に、常に用てそのしるし有ること神のごとし。

右いづれもさゆにて用ゆべし。

器物 59

ごかん（五疳）　きやうふふ（驚風）　ほうそふ（疱瘡）　はしか

ねつ　はらいたみ　たいどく（胎毒）　くさけ（瘡気）

其外諸病に用てよし。

小児五香湯

花月堂製

このくすりすきはらにさけて一度に用てよし。

安氣散

花月堂製

屠蘇

□み□ふくろ□□□

□たし、元日これをのめ□

無病にしていのちながし。

しよくたい　にがり　はらくだり　はら

しやく　つかへ　むねのくぎるよし　其外
さけのよい　ふねのよい　何れの病にも
　懐中　治急散（ちきうさん）
用て然る□　つねにくわい中□□
□をふせぐ名方なり。
　花月堂製

器物 60

　小児万病圓
小児なにやまいによらず、用ひてよし。
第一むし一切によし。
大人小児ともに□生じ、薬に用ひてしよ病をふせぐなり。

器物 61

おしかう薬　　解凝膏（かいぎやうこう）　一貝銀弐分

うちみ	きりきず	たがい
ほねいたみ	出もの	はれもの
かつけ	すりむき	ひびあかぎれ
まめ	わらじくい	

其外一さいのいたみにつけてよし

器物 62

一　種（うへ）て後、三十日乃間は飲食養生尋常（のみくいようじやうねつも）の疱瘡（ほうさう）のどくきびしく慎（つつし）むべし。
　　食餌（くらふ）べき品

一　たい	一　かれひ	一　すぐき	一　せい	一　めばる
一　さより	一　きすご	一　はぜ	一　あかう	一　かき
一　だいこん	一　にんじん	一　山のいも	一　みづな	一　ふき
一　こんぶ	一　わかめ	一　かんびやう	一　ふ	一　すいくわ
一　ぶどう	一　びわ	一　かき	一　かうじ類	

右の外すべくよう　しやすべし、又あふ　　塩からきもの

つよきもの、酒、す、もち類もいむべし。
よきものたりとも、くひすぎぬよふにすべし。
種へ候日より入湯(にうとう)用捨致べく事
かぜ（風邪）ひきせぬやうようじん（用心）すべし。
ははおやうばなどのみくひ、其外萬事よくよく心を附け、かいほうすべし。
衣類にてすりやぶらぬよふに用じんすべし。
神祭は種てより八日に相成候て、見極て候上に、致べく紅手拭用ひ候義も同形之事。
種ての後も十日の内は、はやりはうさう（疱瘡）のうつることあり。よくよく用慎して人をさくべし。
種へ候日より八日目　　十五日目には、必つれ来るべし。
かさぶたあとのみわけかんよう（肝要）に候間、かさぶた落る時は持来りて小児のちんさつ？を受べし。真疱(まほうさう)に相違なきものは相済候。
證札相渡し申べし。旁假疱瘡(かりほうさう)、又はうつらざるもの幾たびも種へ申べし。

器物 63

除痢散

一　此御薬寒中早朝ゆ茶を呑ざる内、南無くわんぜおんぼさつ（観世音菩薩）と三度となへ、水ばつほ？にて一ふく用ゆれば、来年りびやう（痢病）のなん（難）をのがるる事きめう也。用ひて其妙をしり候へ。

調合所　　備前　辛崎廣井氏
取次　讃州丸がめ横丁　亀屋九兵衛

器物 64

細長い枠に模様があるだけで文字はなし

器物 65

人参　熊（絵）膽丸

器物 66

精製

名方　理中圓

無比

器物 67

肝凉圓

（二人の子供が看板を抱えている絵）

器物 68

うち身、きんそう（金創）、骨のたがい、いたみ、出もの、はれもの、しもやけ、とく虫のさしたるよし　　真桐計介製

懐中即功紙　痛をやはらげ、腫をちらし、其外一切骨ふしの痛みに妙方

器物 69

鳥居型印

器物 70

藥衷漢
局中洋
印島折

器物 71

萬金丹

器物 72

アメリカ製

　つり花火

夜ノテアソビ

器物 73

調合所

器物 74

蘂雪圓（途中折れ）

器物 75

蘂雪圓

器物 76（角材の３面）

山田振薬

調合　真桐計介製

人参　敗毒散

器物 77

五香湯

器物 78（両面）

御めあらい薬

正真　鹿の子黒やき

器物 79

木香丸

器物 80

（屋号印）

器物 81

定價金拾銭

器物 82

りびやうを
御夢想　除痢散
やまぬくすり

器物 83

神仙靈驗法

器物 84

梅香

器物 85

備前
　倉田屋
上寺

器物 86

定價五銭

器物 87

定價五銭五厘

器物 88

價

器物 89

月桂堂

上寺

器物 90

達磨型印

器物 91（両面）

ねつさまし

はの妙薬

器物 92

しようかん（傷寒）　はやりかぜ　其外一切の

ねつ病にせんじ用てよし

菊紋　名方　一菊丸

月桂堂製

器物 93

神仙靈驗　沉麝丹　畧主治

〇第一　きつけ（気付け）、どくけし（毒消し）一切、しよくせう（食傷）によし

〇たん（痰）、せき（咳）、しやく（癪）、りういん（留飲）、せんき（疝気）、はらいたみ（腹痛み）、むねつかへ（胸つかえ）によし

〇婦じんちのみち（血の道）、小児きやうふう（驚風）、ねつさまし（熱冷まし）によし。

〇舟かごさけのよい（酒の酔い）、又は魚鳥の毒にあたりたるによし。

〇其外いづれの病にも用ひて妙なり。

西大寺下之町　済世堂製

器物 94

人参　敗毒散

しやうかん（傷寒）　かんぼふ（感冒）
じへき（痔癖）　ふうしつ（風湿）
づつふ（頭痛）　そうかん
かんねつ（寒熱）　手足いたみ
□なじ　こはばり
ほしや一切の妙方也。
一はんふり二はんせんじ、御用ひ被成べく候

器物 95

萬病の神方
梅花錠
代百文

器物 96

虫損で判読不能

器物 97

蝮の妙薬

器物 98

はやりかぜ　ねつさまし
づつう　のぼせ　引さけニ妙也
天下一法　保生湯
備前上寺村　月桂堂製

器物 99

御洗薬

器物 100

（瓢箪型印）

今洗行

器物 101

家傳　＜紋＞　青草

器物 102

家傳薬製

燃草

金艾堂

岡山県医学校（第三高等中学校医学部）在籍時の中島一太に関する資料の紹介

町　泉寿郎
二松學舍大学　教授

【解説】

中島一太が岡山県医学校（第三高等中学校医学部）に在籍した時代のものと推定される資料を見出したので、ここに紹介したい。

医家中島氏の第七世一太（かずもと、1870～1928）の事蹟については、一太自身が編纂した『中島氏系譜』に従えば、その二十歳台までの学齢期の事蹟は次の通りである。

> 哲（たもつ）ノ嫡子。明治三年四月十七日誕生。幼ニシテ學ヲ好ミ小學校ニ入學シテ傍ラ業合年緒ニツキ四書及國史畧ノ素讀ヲ學ビ、年歯漸ク長ズルニ及ビテ五經・唐詩選ノ講義ヲ究ム。後岡山市原泉学舍ニ西毅一（薇山）ノ薫陶ヲ受ク。幾何モナクシテ仝舍ノ廢舍ニ遭ヒ更ニ父業ヲツグノ志ヲ立テ、明治十九年岡山医学校豫科ニ入學シ弐年ノ課程ヲ履修ス。偶々第三高等學校医學部ニ陞格スルニ當リ、轉ジテ愛知医學校ニ学ブ。明治二十七年十二月十日愛知醫學校ヲ卒業シ、翌年三月ヨリ壱ヶ年有餘職ヲ豊橋病院ニ奉ジ、明治二十九年十二月一日志願兵トシテ歩兵第十九聯隊ニ入隊シ優秀ノ成績ヲ以テ見習医官トシテ三重聯隊ニ勤務ス。此レヨリ先父ヲ喪ヒシカバ、直チニ父祖ノ業ヲ襲グ。

一太が入学した原泉学舍は、西毅一（1843～1904）が親友の中川横太郎（1836～1903、健忘斎と号す）の岡山市内の自宅を借りて開いた漢学を中心にした私塾であったが、その後、西毅一は周知のとおり閑谷学校の再興に深くかかわることになる。西毅一との関係から、一太も閑谷学校の関係者に名を連ねている[i]。

『閑谷黌史』等を参考にして、明治以降の閑谷学校の動向を簡略に記せば次の通りである。

明治 4 年、廃藩置県により、閑谷学校、池田家の手を離れる。
明治 5 年 1 月、藩校を岡山県普通学校に改組。
明治 5 年夏、中川横太郎・岡本巍・谷川達海ら、招聘のために山田方谷を訪問。
明治 6 年、普通学校廃校の後、その跡地に私立遺芳館を設立。
明治 6 年、山田方谷、春秋に閑谷学校に出講（～明治 9 年まで出講）。
明治 7 年、岡山県に払下げを求め、閑谷学校は和気郡十八区の共有となる。

明治 9 年 5 月、閑谷私学廃止。
明治 9 年 6 月、（普通学校の後身）私立遺芳館に閑谷学校を永年貸与。
明治 10 年 5 月、私立遺芳館休業、池田学校と改称し岡山で開校。学校は池田家へ譲渡。
明治 12 年 11 月、池田学校閉鎖。その後、西毅一、中川邸にて原泉学舎を開校。
明治 14 年、西・中川・岡本ら閑谷保黌会設立。
明治 17 年 8 月、閑谷黌開校。
明治 18 年、西一家を挙げて閑谷に移住。

一太が原泉学舎に学んだことは、『閑谷黌及門録』（1899 年刊）に附録として収録されている「原泉学舎及門録　自明治十三年三月至仝十七年六月」に、「邑久郡北島村　中島一太」（137 頁）の名があることからも確認できる。一太が原泉学舎に在籍した正確な年次は不明であるが、その後、岡山の岡山県医学校予科に進学したことから考えて、西毅一と共に閑谷黌には移らず、同舎が岡山での活動を閉じた明治 17 年 6 月頃までで原泉学舎を退いたものと推定される。

一太が岡山県医学校の豫備科に進学して初めて本格的な医学教育を受けたのは、明治 19 年のことである。豫科在籍二ヶ年にして、明治 21 年 3 月 16 日に卒業証を受けている[ii]。その後、事情あって愛知県医学校に転学した一太は、同校の第三学年に在籍中の明治 25 年 3 月 16 日に、前年の震災時の負傷者を治療したことを表彰されているので（中島家に賞状が残っている）、一太が愛知県医学校に転学したので明治 22 年、または 23 年のことと考えられる。

したがって、明治 21 年には一太はいまだ岡山にあって医学を学んでいたと考えられる。通常であれば、岡山県医学校の本科に進学するはずのところ、ちょうどこの年の 4 月に、岡山県医学校は京都に本部が置かれていた第三高等中学校の附属の医学部に改組された。そこで一太は、第三高等中学校医学部の第一学年に進学することになった。

次に掲げる資料は、明治 21 年、一太が第三高等中学校医学部の第一学年に在籍した時のものであると推定される。この資料は、邑久郡幸島村西幸西の庄屋出身で、岡山県庁の官吏を務め、退官後に閑谷保黌会の幹事をしていた野崎萬三郎（1839～1910）の手許に残された文書の中に含まれていた簿冊で、現在は二松學舎大学が所蔵している。

書型は縦 15 センチメートル・横 12 センチメートル、上下二カ所を紙縒りで綴じた仮綴じ本である。表紙は表裏とも共紙で、外題や奥書等はない。本文は全 5 丁で、いわゆる「青焼印刷」のような薄紫色の筆写体で記されているが、印刷物であることは間違いない。内容から見て、この資料は第三高等中学校附属医学部に関する一種の名簿である。「部伍編制従員姓名」という資料名の意味は必ずしも

明らかでないが、以下に掲げる翻刻が示すように、生徒全員を収録した名簿ではなく、「團長」「級長」「組長」「什長」「伍長」といった役職名が記されていることから、役員名簿の類いである。正規に作成された名簿かどうかはなお後考に俟つが、やや後年の岡山医学専門学校においても、各学年に「監督」と呼ばれる学年担当教官各一名と、「級長」と呼ばれる生徒互選による委員各二名が置かれていることから[iii]、前身校である岡山県医学校、或いは第三高等中学校医学部においても、同様な学年担当教官として「團長」「級長」、生徒委員として「組長」「什長」「伍長」が置かれていたとしても不思議ではない。したがって、本資料は一太の入学時の教官・先輩・同輩の人員を知る上で一定の価値があると思われる。

この名簿が野崎萬三郎の手許に残った理由も必ずしも明確ではないが、一太のように原泉学舎、あるいは池田学校、あるいは閑谷黌から第三高等中学校医学部に進学した人物から、閑谷保黌会幹事である野崎萬三郎に贈られたものである可能性がある。

既に、中島洋一「中島家の歴史」(『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、2015 年刊、思文閣出版）に概ね言及されていることであるが、一太の詩文書画愛好と基督教信仰については、前者は少年時に西毅一の原泉学舎において修学したことと無関係とは言えないであろうし、後者は岡山県医学校の先輩に石井十次のような社会福祉事業家が出たこととの関連を考えざるを得ない。その意味から、こうした資料を通して一太の初期の修学環境を明らかにすることは、一太個人の事蹟に止まらず、明治期岡山の学術文化史の上で意義があると思われる。

また、以下の資料翻刻に示した通り、一太の同学年の生徒は、彼らが卒業するべき明治 25 年に卒業しているものが上級生に比べて極めて少ない。一太の愛知県医学校転学とも考え併せると、この学年の生徒たちに順当に卒業できない何らかの事情が生じたことを疑わせる。中島洋一が伝聞として記している一太転学の理由となったとされる答案の落書事件は、一太個人に止まらない背景があったことを推測させる。かつて西毅一の周囲には「山陽新報」に拠った小松原英太郎ら民権運動家もあり、中央政府の介入を招いたことがある。岡山医学校から第三高等中学校への移行にあたっても、中央政府と地元との間に対立があったのかも知れない。この問題については目下未詳であるが、今後追及すべき問題として指摘しておきたい。

以下、資料翻刻にあたって、使用する漢字は正字体・常用字体の統一をせず、原資料に近い字体を採用した。丁の表裏の変わり目には、一丁表には「1a」と記入した。

なお、それぞれ名前の下に丸括弧で括って記した内容は、筆者が『岡山医学専門学校一覧』(1912 年）や『岡山大学医学部百年史』(1972 年）等の資料から補っ

た情報である。

【資料翻刻】

部伍編制従員姓名

團長　　清野　勇　　（教諭、病院長）

第四年級

級長　　緒方太郎　　（教諭、奏任官四等、緒方郁蔵男）

甲組

組長　　平原碩衛　　（岡山出身、明治 22.7 卒、横浜木下医院勤務）

什長　　内田房次郎

第一伍長　岸美之三　　1a」（島根出身、明治 22.7 卒）

第二伍長　物部恭平　　（岡山出身、明治 22.7 卒、開業医）

乙組

組長　　矢野恒太　　（岡山出身、明治 22.12 卒、第一生命保険会社創設者）

第一什長　宇野　武　　（岡山出身、明治 22.12 卒）

第二什長　澄川吉太郎　　（島根出身、明治 22.12 卒、神戸菊愛堂医院勤務）

第三什長　堀　周造

第一伍長　荒木蒼太郎　　（岡山出身、明治 22.12 卒、岡山医専精神科教授）

第二伍長　西源之助　　1b」

第三伍長　髙畑運太　　（香川出身、明治 22.12 卒、香川県技師）

第四伍長　正田利喜太

第五伍長　山本良吉

第六伍長　近藤新之亟

第三年級

級長　　原田元貞　　（教諭、奏任官四等、産婦人科）

甲組　　2a」

組長　　田中冨三

第一什長　祝良之助　　（島根出身、明治 23.12 卒、開業医）

第二什長　瀬戸山清彦　　（宮崎出身、明治 23.12 卒、衆議院議員）

第一伍長　保田幾次郎　　（岡山出身、明治 23.12 卒、開業医）

第二伍長　江良郁次

第三伍長　林　武平

第四伍長　橘髙徹夫　　（広島出身、明治 23.12 卒）

乙組　　2b」

組長　　髙阪駒三郎　　（香川出身、明治 23.12 卒、開業医、岡山医学会

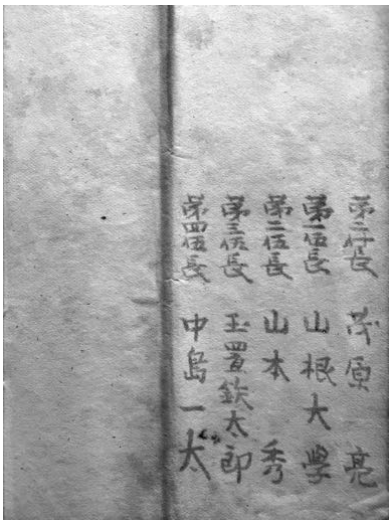
幹事）

第一什長　堀　庫三　（岐阜出身、明治 23.12 卒）
第二什長　米原彦三郎　（島根出身、明治 23.12 卒、開業医）
第一伍長　石川新市　（島根出身、明治 23.12 卒）
第二伍長　五十嵐辰馬
第三伍長　岩谷林之助　（島根出身、明治 23.12 卒、開業医）
第四伍長　奥山一平　3a」（奈良出身、明治 23.12 卒）

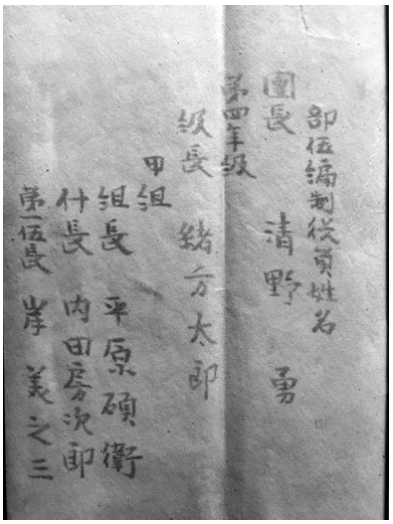
第二組長
級長　柘植宗一　（教諭、奏任官五等、組織学）
甲組
組長　賀屋英治
第一什長　林　清馬　（山口出身、明治 24.12 卒、開業医）
第二什長　國方長三郎　（徳島出身、明治 24.12 卒）
第一伍長　楠岡謙吉
第二伍長　中元寺長風　3b」（宮崎出身、明治 24.12 卒、宮崎県技師）
第三伍長　山根壽三郎　（島根出身、明治 24.12 卒、開業医）
第四伍長　駒井貫太郎
乙組
組長　三浦佐之輔
第一什長　三並知夫　（愛媛出身、明治 24.12 卒、開業医）
第二什長　小出亀雄　（兵庫出身、明治 24.12 卒）
第一伍長　伊藤熊治　（兵庫出身、明治 24.12 卒、開業医）
第二伍長　疋田直太郎　4a」（岡山出身、明治 24.12 卒、福岡医科大勤務）
第三伍長　加藤文郁　（大分出身、明治 24.12 卒、開業医）
第四伍長　石井剛太郎　（岡山出身、明治 25.11 卒、開業医）

第一年級
級長　松尾周蔵　（教諭、奏任官四等、化学）
甲組
組長　佐野珠悦
第一什長　藤村乕雄　4b」
第二什長　奥平孫太郎
第一伍長　大島勘平　（徳島出身、明治 25.11 卒、開業医）
第二伍長　増岡道太郎
第三伍長　久永久太郎
第四伍長　松井隈太
乙組

組長　　西崎熊七
第一什長　黒瀬匡志　　5a」
第二什長　茂原　亮
第一伍長　山根大學　　（島根出身、明治 25.11 卒、開業医）
第二伍長　山本　秀
第三伍長　玉置鉄太郎
第四伍長　中島一太　　5b」



（図版　左）巻末・5 丁裏



（図版　右）巻頭・1 丁表

注

[i]例えば、明治 37 年 3 月 28 日に西毅一が自殺した際、閑谷学校に西毅一の碑を建立するにあたり、一太はその発起人に名を連ねている（二松學舍大学所蔵・野崎萬三郎文書）。

[ii]中島家に残る「豫備科卒業證」を転記しておく。

豫備科卒業證
　　岡山縣平民　　中島一太　十八年
本校附属豫備科定規ノ學科ヲ卒業候事
明治廿一年三月十六日
　　製薬士　　松尾周蔵
　　片平周三郎
岡山縣醫學校附属　　神戸要次郎
豫備科教場試験委員　　河崎柄徳
　　芳本鉄三郎
　岡山縣醫學校附属豫備科教場

[iii]『岡山医学専門学校一覧 自大正元年九月至大正二年八月』（1912 年）の規程による。

The Nakashima Family Collection and its State of Research

Erin Kitagawara
The University of Tokyo, PhD candidate

Introduction

The Nakashima family is a family of physicians who had practiced medicine since the late Edo period in the Oku area of Okayama prefecture. Their medical practice was all-encompassing: it included diagnosis and treatment from the perspectives of the subdivisions now known as internal medicine, surgery, dermatology and obstetrics, as well as the trade of pharmaceutics. Moreover, the family contributed to the maintenance of public health within the Oku community through the administration of the smallpox vaccine. In regards to theoretical underpinnings, the practice of the Nakashima family was not limited to traditional Kampō medicine organized around acupuncture: its members actively studied away under notable physicians in Kyoto and Nagasaki, and imported the most innovative medical concepts of the time, such as the Yoshimasu style Kohō-ha (School of Classical Formulas), as well as Dutch medicine.

The books, manuscripts, letters and objects owned by the family remained safe from loss or destruction during WWII, and are now displayed and preserved at the Nakashima Ika Shiryōkan (Nakashima Doctor Family Museum). The museum is a rare case that offers a glimpse into the realities of community-based medicine in rural regions in early modern to modern Japan. This paper provides an overview of the history of the family, the establishment of the museum, and the ongoing research projects associated with the collection, with the hopes of inspiring further research of the collection itself and the topic of community-based medicine, both of which deserve more attention.

History of the Nakashima Family from its Origins to the Establishment of the Museum

The Nakashima family was established in the early eighteenth century through branching out from the Shinto priest family of Kitajima Shrine in Setouchi. This section briefly outlines the history of the family from its

earliest origins to the current era, through summarizing the lives and accomplishments of the key figures in chronological order.[1]

The origins of the Nakashima family's medical practice could be traced back to Nakashima Yūzō (1685-1757), eldest son of the carpenter Nakashima Tashirō. No records remain about Yūzō beside the fact that he had also farmed part-time, and how his first encounter with medicine was when he accompanied Tashirō to Enmu-in Temple and met a physician who frequented the temple.[2] The second-generation practitioner was Yūzō's eldest son, Genko (1715-1789), who became an independent physician and began his practice in Oku, where the museum is now located. Genko had originally intended for his second son, Tsūzō to inherit his medical practice, but due to Tsūzō's death at the young age of twenty-five, the candidates of inheritance became limited to his youngest sons, Teikan and Sōsen. Although Teikan inherited the family practice upon Genko's death, Teikan himself passed away at the young age of twenty-eight, which inevitably left the family line to Sōsen, who was twenty-four at the time. It should be noted that although Teikan should be referred to as the third-generation physician in terms of chronology, Sōsen is referred to as the third-generation instead, due to Teikan's short duration of practice.

Significant increase in the body of knowledge, as well as advancements in medical technology accessible to the Nakashima family occurred at the time of third-generation Sōsen and his son Yūgen. Sōsen studied away at Kyoto from the years 1800-1, under Kohō-ha physician Yoshimasu Nangai (1750-1813), as well as noteworthy physicians of obstetrics and surgery. According to the family finance records, after Sōsen's return from Kyoto, the number of patients as well as revenue increased significantly. In addition, Sōsen also went to Nagasaki in the year 1819 at the age of 46, from which many handwritten copies of Dutch medical treatises remain. Similarly to his father, fourth-generation Yūgen studied away at Kyoto in 1833, and learned Kohō from Yoshimasu Hokushū 1786-1857, and Dutch medicine from Koishi Genzui (1784-1849) and Fujibayashi Fuzan (1781-1836). Moreover, Yūgen also studied obstetrics and surgery under noteworthy figures in the field. Although Yūgen momentarily returns to his hometown, he later returns to Kyoto to continue his study. Yūgen's accomplishments also include research into the ancestral family, the administration of the smallpox vaccine in 1876, and the production and selling of medicine.

The period following Yūgen's time, which also happened to coincide with the moment of modernization and westernization for Japan, was tumultuous: the family was met with multiple setbacks, such as deaths of male successors, falling into debt, in addition to financial hardship at the time of the Great Depression. Fifth-generation Genshō (1836-1860) deceased at the young age of 25, thus the line soon went to sixth-generation Tamotsu (1843-1898), who was hailed as a prodigy at the young age of five, and became the adoptive son of Yūgen shortly before Genshō's death. Unlike his predecessor Yūgen, Tamotsu did not have noteworthy achievements to his name: although he had attempted to revive the selling of medicine, the project ended in a failure.[3] Tamotsu's son, seventh-generation Kazuta (1870-1928) studied Western medicine at Aichi Igakkō, inherited the family practice in 1898 upon Tamotsu's death, and then enlisted as an army surgeon in the Russo-Japanese War in 1904. Although Kazuta is primarily known for his role as a military surgeon, he had also made numerous contributions to the Oku public sphere, by establishing clubs and building communal spaces for leisure.

It was in the interwar years that eighth-generation Tatsuji (1904-1984) became the head of the family due to Kazuta's death: Tatsuji was still a student at the Okayama Ika Daigaku, now known as the Medical School at Okayama University. After practicing internal medicine for some time, Tatsuji relocated to Manchuria with his immediate family in 1935 for reasons that included the family's financial difficulties, and worked as a physician of internal medicine at several South Manchuria Railway hospitals. Upon his return to Japan in 1946 after the end of WWII, Tatsuji returned to Oku and opened a clinic for the regional community. His son, ninth generation, Dr. Nakashima Yōichi[4] (1935-) had not only expanded the scale of the family practice by establishing Nakashima Hospital, but also made numerous contributions in the field of history, namely through the establishment of the museum for the preservation of the collection owned by the family. Nakashima has written numerous academic articles on the family collection, for instance, on the travelogues and records left by the Nakashima physicians. To this day, he participates in collaborative research projects with academics from various fields to further the research into the collection, as well as the role of physicians in local or community-based medicine.

The Beginnings of Research on the Nakashima Family Collection

Research on the collection began around 2003, and in their 2005 joint article, Nakayama, Kurosawa and Sakai identifies the contents of the collection, which could be roughly divided into the categories of written records, texts and objects. Written records include those related to diagnosis and treatments, family matters, hobbies and leisure and schooling. The texts are of a variety of genres, such as medical treatises, Confucian texts, literary works and religious texts. The category of objects includes surgical implements and printing blocks for the production of packaging and handouts used for the selling of medicine, to name a few. It is also noted that there are numerous monks and Shinto priests in the Nakashima lineage, as well as cases in which the bond between the Nakashima family and the descendants of the aforementioned clergymen was strengthened through marriage: according to the authors, this could point to the fact that the Nakashima family and their affiliated families maintained their influence as members of the ruling class over the Oku community through maintaining these familial connections over the generations.[5]

From the year 2010 onward, further research into the collection was conducted as part of the "Community Medicine in Edo Period: the Study of Nakashima Doctor family in Oku County, Okayama Prefecture" research project led by Matsumura: According to Shimizu's presentation, the aim of the research project from 2011 onwards was to sort the bibliographic information and provenance of the texts, as well as to investigate the relationship between the collected texts and the medical practice of the family, in order to reveal how knowledge was consumed and applied by these group of intellectuals. Shimizu notes that out of the 500 texts, 80% are printed books, which include classics of Chinese medicine such as the *Compendium of Materia Medica* and *Shanghan Lun*, along with their Japanese commentaries, the Four Books and Five Classics of Confucianism and collections of poetry, all of which would have provided the necessary basis for Chinese Learning in the Edo period. Japanese medical treatises are also present, such as the *Honchō Shokkan* and the *Ensei Ihō Meibutsukō*, in addition to handwritten books such as transcriptions of lectures by noteworthy physicians at the time.[6] Numerous presentations were given by the research committee members, such as at the annual congress and monthly meetings of the Japanese Society for the History of Medicine. In the 111st Congress (2010), Kajitani delivered his paper on an analysis of Yūgen's pharmaceutical business, Nakashima on the succession of the family line from Yūgen to Tamotsu, and Matsumura and Nakashima on

the records of acupuncture kept by Yūgen.[7] In the 112nd Congress of the following year, Kinoshita and Nakashima presented on the spatial spread of the patients of Yūgen, and Nakashima and Matsumura gave a talk on the text *Oranda Shuyuhō*, which details the distillation of medicine according to Rangaku.[8] Papers by these academics and their collaborators on each of the respective topics were later compiled into a collection in 2015, which is the subject of the following section.

Research into the Nakashima collection was not only limited to thematic investigations such as those surrounding vaccination or pharmaceutics, but also included those that focused on individual texts or records within the collection. In the years 2013 to 2014, Nakashima in collaboration with Itano and others performed detailed investigations on the two editions of the renowned *Kaitai Shinsho*, or the *Kaisei Kōhō Daioku,* a record of obstetrics kept by Yūgen. In their joint paper, the importance on Yūgen's record is emphasized since up until this point, texts related to difficult labor tended to be written in a "textbook-like" format, and did describe in detail individual instances of delivery complications like in Yūgen's case.[9] The transcription with annotations of the *Kaisei Kōhō Daioku*, has also been included within the 2015 publication, offering a glimpse into the multifaceted approaches of research that are conducted in relation to the Nakashima collection.

The Pivotal 2015 Publication, *Village Doctors of Bizen-Okayama*

The various research endeavors culminated in the 2015 publication, *Bizen-Okayama no Zaison'i: Nakashima-ke no Rekishi* (Village Doctors of Bizen-Okayama: A History of the Nakashima Family), a collection of papers by academics from various fields including the history of medicine, philosophy, literature, Chinese classics and Bibliology. This book shed light on the various aspects of the Nakashima family's role as medical practitioners and public intellectuals embedded within the local context.

In regards to the theoretical basis of the Nakashima family's medical practice, Machi explores to what extent Sōsen and Yūgen's approach to medicine could be understood to be Kanran Setchū, a combination of traditional Kampo and Dutch medicine. Machi introduces readers to how physicians of the Kanran Setchū school combined the two differing types of medicine: for instance, Ishizaka Sōtetsu (1770-1842) believed a study of human anatomy would further the understanding of acupuncture and Unagami

Zuiō (1758-1811) and Noro Tenzen (1764-1834) attempted to formulate original theories of medicine through putting the traditional into conversation with the Western, through re-reading the *Shanghan Lun* using the theories of anatomy. Likewise, the Nakashima physicians used as the basis the Yoshimasu style Kohō medicine, of which emphasizes the prescriptive aspect, and adopted Dutch medicinal substances into their existing corpus. [10]

On the other hand, a series of papers deal with Yūgen's practice viewed from a variety of standpoints. Matsumura, in his paper on *Shinkyū Shiji Seimeiroku* (Record of the Names of Patients who were Administered Acupuncture) kept by fourth-generation Yūgen between the years 1862 and 1863, raises how the records attest to the Nakashima physicians' role and importance as village physicians as opposed to those employed by the han or the Bakufu government. The records demonstrate that Yūgen had used acupuncture to cure common conditions such as phlegm, epigastric discomfort, neck-and-shoulder pain and headaches, and had recurring patients.[11] Kinoshita's two papers deal with the area of the possible house calls for the Nakashima family, along with Yūgen's use of smallpox vaccination from the late Edo period into the early Meiji period. His analysis of Yūgen's patients has revealed that there were multiple physicians in the Oku area that practiced within close proximity of each other, and they each were in charge of a given territory.[12] In contrast to the researches that focus on treatment, Kajitani's paper explores Yūgen's entrepreneurial role in the local trade of medicine. According to Kajitani, the most popular medicines were those related to dental problems, childhood diseases, disorders of the digestive system, and skin conditions. Although the enterprise ended in a loss, it attests to Yūgen's proactive stance as a local businessman, since he had attempted to expand the sales of medication to areas that were beyond the areas in which he administered medical treatment. [13]

Furthermore, other papers elaborate on the Nakashima family's involvement in obstetrics: in her paper on the *Taisan Shinsho*, a comprehensive text on childbirth, Shimizu notes that there are multiple editions of this text, of which the text in the Nakashima collection is the most extensive ten-volume version. Moreover, she hints at a potential connection between Sōsen, Yūgen and Nanba Hōsetsu (1791-1859), the author of the *Taisan Shinsho*, who had studied under the same physicians that the Nakashima father and son had, during their stay at Kyoto.[14] On the other hand, Suzuki investigates the *Kaisei Kōhō Daioku*, a record of obstetric

surgery by Yūgen from the years 1834 to 1870. Suzuki notes that, a clear intent on behalf of Yūgen to record the clinical examples of Kaisei-jutsu, a group of surgical methods used to remove the dead fetus from the womb in order to save the life of the mother. Moreover, Suzuki notes how Yūgen's wife Chiyo, and his son Genshō's wife Taka had performed diagnoses on behalf of Yūgen starting in the years 1860 and 1861 respectively, which could point to the possibility of female participation in local physician families.[15]

The Nakashima family's influence in fields other than medicine is also highlighted in Hirasaki's research on the Miko-ke Nakashima family, the family associated with the Shinto shrine from which the Nakashima family of physicians are descended from, and their crucial role in the local community[16] Moreover, Kurosawa's paper on the sixth-generation Nakashima Tamotsu's activities and accomplishments as a master of the Mishō-ryū school of the art of flower arrangement at the time of its introduction into Okayama reiterate the close connection of the Nakashima family to the context of the local community.[17]

In Lieu of a Conclusion: Recent Directions of Research

As shown above, research up to this point has primarily focused on the Nakashima family and the texts and records compiled by its members. Yet, that alone does not elucidate the Nakashima family's connection to other institutions within the community, such as the Igakukan, an educational institution of medicine established as a part of the Okayama-han. In his 2017 presentation, Matsumura raised that the Igakukan functioned as an educational institution for not only aspiring han doctors, but also for local doctors of the towns and villages, such as the Nakashima, who were not part of the state's medical system. Moreover, a document published after the han system reform in 1870 listed Yūgen, a private doctor, as an official of the medical bureau of Okayama-han, which points to the dual function of the Igakukan to not only educate physicians, but to also police and regulate the medical practice within the region.[18]

These observations made by Matsumura serve as a starting point for further research into the relationship between community-based medicine and the state, as well as how various local institutions and actors were embedded in a web of relations within the local context. A continuation in research will not merely contribute to the body of literature on regional or local medical

practice in Japan, but could offer hints to deepen understandings of larger concepts such as “community” or “center as opposed to periphery”.

---

[1] This section relies heavily on Dr. Nakashima’s book chapter, See Yōichi Nakashima, “Nakashima-ke no Rekishi” in Nakashima Ika Shiryōkan and Nakashima Monjo Kenkyūkai ed., *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi* (Tokyo: Shibunkaku Shuppan, 2015), 3-63.

[2] Nakashima, 7-8. Nakashima quotes the *Nakashima Family History* (*Nakashima-sei Ittō Kakei*), which was compiled by the fourth-generation physician, Nakashima Yūgen in the year 1849. To write the family history, Yūgen referenced mortuary tablets, kakochō (family death registers) and recounts by older members of the community.

[3] However, it should be noted that Tamotsu was a man of culture, and had mastered the art of flower arrangement. Tamotsu’s contributions to the artistic and cultural sphere of the region is elaborated upon in Kurosawa’s research, which is mentioned in the latter half of this paper.

[4] To avoid confusion between the various members of the Nakashima lineage, predecessors belonging to the Nakashima family will be referred to using their first names, whereas Dr. Nakashima Yōichi will be referred to by last name hereafter. It should be noted that the medical practice has been inherited by the tenth-generation Dr. Nakashima Yūichi, who is currently the director of Nakashima Hospital.

[5] Manabu Nakayama, Manabu Kurosawa and Shizu Sakai, “Okayama-ken Oku-gun Nakashima-ke Shiryō Chōsahokoku”, *Nihon Ishigaku Zasshi*, 51 No. 2 (2005), 160-1. The earliest investigation on the Nakashima collection was performed as a part of the “Edo no Monozukuri” and “A study on the Integrated Database System with Documents and Instruments” KAKEN research projects of the fiscal year 2001-2006 and 2002-2005 respectively.

[6] Nobuko Shimizu, “Nakashima-ke Zōsho Shiryō ni Tsuite”, *Nihon Ishigaku Zasshi* 58 No. 2 (2012), 150. The investigation into the contents of the collection was part of “Community Medicine in Edo Period; the Study of Nakashima doctor family in Oku County, Okayama Prefecture” KAKEN research project of the fiscal years 2011-2015.

[7] Shinji Kajitani, “Edo-ki Zaison’i no Seibaiyaku: Okayama-ken Oku-gun Nakashima-ke no Kanren Monjo no Bunseki kara”, *Nihon Ishigaku Zasshi* 56 No. 2 (2010), 199. Yōichi Nakashima, “Nakashima Yūgen no Kankoku narabini Igakkan Nyūgaku Shojtome: Meiji Shonen no Ika Keishō Jijō”, *Nihon Ishigaku Zasshi* 56 No. 2 (2010), 207. Noriaki Matsmura and Yōichi Nakashima, “*Shinkyū Shiji Seimeiroku* ni Tsuite: Bakumatsu no Okayama-ken Oku-gun Shūhen ni Okeru Shinkyū Kiroku”, *Nihon Ishigaku Zasshi* 56 No. 2 (2010), 233. Kajitani and Matsumura had also given presentations on related topics at the monthly meetings in October and November of 2011.

[8] Hiroshi Kinoshita and Yōichi Nakashima, “Nakashima Yūgen no Kanja no Tsūinken”, *Nihon Ishigaku Zasshi* 57 No. 2 (2011), 201. Yōichi Nakashima and Noriaki Matsumura, “Nakashima Sōsen no Oranda Shuyuhō ni Tsuite: Bunsei 2 nen Sōsen Nagasaki Yūgakkuji no Shahon”, Nihon *Ishigaku Zasshi* 57 No. 2 (2011), 202.

[9] Toshifumi Itano, Kenji Tanaka and Yōichi Nakashima, “Nakashima Yūgen no *Kaisei Kōhō Daioku* wo Yomu”, *Itan* 100 (2014), 93-118. The authors speculate that texts related to obstetrics took this form after Kagawa Gen’etsu’s pivotal text, *Sanron*.

[10] Machi notes that in contrast to figures such as Unagami, physicians who have traditionally been identified as Kanran Setchū, such as Sugita Genpaku, Ōtsuki Gentaku and Udagawa Shinsai, could not be considered as such: when translating foreign medical treatises, these physicians extracted terminology from Chinese medical treatises, emptied the meanings and associations embedded in the term, and transplanted them into the foreign context. See Senjurō Machi, “Nakajima Sōsen, Yūgen to Jūkyū Seiki Nihon no Kanran Setchū Igaku” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 127-9, 135.

[11] Noriaki Matsumura, “Chiiki Iryōshi Kenkyū no Tansho to shiteno Nakashima-ke Monjo” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 67-74.

[12] Hiroshi Kinoshita, “Nakashima Yūgen no Kanja no Shinryōiki ni Tsuite” “Nakashima Yūgen to Okayama-ken Oku-gun ni okeru Edo-makki kara Meiji-shoki no Shutō” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 75-95, 96-110.

[13] Shinji Kajitani, “Jigyōsha to shiteno Yūgen” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 111-124.

[14] Nobuko Shimizu, “*Taisan Shinsho* Shohon ni Tsuite” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 138-158.

[15] Noriko Suzuki, “*Kaisei Kōhō Daioku* kara Mita Nakashima Yūgen no Sanka Iryō” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 159-167.

[16] Shinsuke Hirasaki, “Chiiki Shakai ni Okeru Shūkyōsha-tachi” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 168-187.

[17] Manabu Kurosawa, “Nakashima Tamotsu to Meiji-ki Okayama no Mishō-ryū” in *Bizen Okayama no Zaison’i: Nakashima-ke no Rekishi*, 188-211.

[18]Noriaki Matsumura, “Okayama Igakukan ni okeru Kangakuryō to Rangakuryō no Heisetsu ni tsuite” (presentation, Kanran Setchū ni Kansuru Sōgōteki Kenkyū, Tokyo, Japan, March 10, 2017). A collection of papers from this symposium is forthcoming for publication in the spring of 2018.

「医家」という視点の豊穣性について

～現代の医療制度の原点～

松村　紀明
帝京平成大学　講師

江戸中期から現代にかけて備前国邑久郡（岡山県瀬戸内市）で地域医療を担ってきた在村医家・中島（なかしま）家の諸活動については、いくつもの学会発表・論文が積み重ねられ、2015 年 11 月には単行本として『備前岡山の在村医　中島家の歴史』（思文閣出版）を刊行し、また、2016 年 3 月には中島醫家資料館が開館した。本紀要は、これらの研究さらに推進することを目的として創刊されたものである。

本稿では、医療の変遷をそれぞれの地域社会という文脈の中で総体的に捉える「地域医療史」という視点において、在村医家・中島家の歴史を議論する際の論点を整理し、蓄積された研究成果をより有機的に関連づけることを目的とするものである。

ここで、在村医家という存在に焦点をあてる意義はどのようなものであろうか。それを検討するには、現在の日本の医療制度の特徴から考える必要がある。

１．日本の医療制度の特徴としての「開業医」

一般的に、日本の医療制度の特徴には次のような点があると言われている[1]。

①国民皆保険
②フリーアクセス
③開業の自由
④民間医療機関中心の医療提供体制

このなかで、①については、大正～昭和にかけて公的医療保険制度の創設によって筋道がつけられたと考えられるので、ここでは脇に置くとしよう。②～④を分かりやすく言えば、医師はどこでも自由に開業することができ、それらの医師によって運営される民間医療機関によって日本の医療の主たる部分は支えられており、患者（国民）はそれらに自由にアクセスできる、ということである。

では、その民間医療機関はどのようなものであるのかというと、第二次大戦終結までは基本的には個人医師が経営する小規模病院ないしは診療所であった。

欧米においては診療所と病院は基本的に機能が別の医療機関とされるが、日本では診療所と病院の機能の区別は明確ではなく、入院ベッド数という設置基準で線引きさ

れてきた。しかも、第二次大戦終結までその基準は 1 病床 10 床以上かどうかであり、100 床を越える病院の存在は少なく、かつ多くの国公立病院は特定患者や特殊な疾病に対する専門病院であった。基本的には、民衆の一般的な医療需要に対する供給は、個人医師＝「開業医」の肩に掛かっていたと言えよう[2]。

すなわち、現代の日本の医療を考える上で、その特徴の根幹を支える「開業医」という視点は必要不可欠なのである。では、その個人医師＝「開業医」はどのように形成されてきたのであろうか。

２．江戸時代における「開業医」のとらえにくさ

開業医の歴史についての著作としては、たとえば、布施昌一『医師の歴史　その日本的特長』（中公新書）がある。

布施はそのなかで、「徳川国家」という「平和国家の社会的・経済的・文化的な発達と安定した世界」のなかで「日本の医師・医業の特色としての開業医制度（ただし「開業医」の言葉は明治の文明開化語である）は、江戸時代に十全の発達を遂げた」とし、「その形体が明治以降の近代開業医師・医業の「原形」といった類いの素朴なものではけっしてなく、明治から現在に至る近代開業医形体そのものにまで完成していた」と指摘している[3]。

しかしながら、江戸時代における「開業医」＝個人医師に発達は、社会的地位を明確に保証されていたことによるものではなかった。確かに幕府や藩における「侍医」「御目見得医」「藩医」といったものは存在したが、それは幕府や藩という組織の内部における地位であり、医師そのものについての統一的な法令や社会的合意などがあったわけではない。幕府や藩に仕える医師以外の町医や在村医といった医師は、それぞれの地において自らの意志で活動・努力し収入を確保しなければならなかったのである。

このことを布施は、「徳川医業として完成した開業医形体の問題性は（中略）そのまま明治以降の近代日本に受け入れられて、徳川開業医体制＝日本開業医体制＝日本医療体制の図式となっていく」としている[4]。

すなわち、自らが保有する専門的知識と技術によって医療活動をおこないそれにより生計を立てる専門職＝開業医が完成したのが江戸時代という訳である。

しかしながら、そのような開業医（個人医師）の有り様が、江戸時代において一様であったわけではない。たとえば布施は医師になる過程（修行過程）で分類をし、正式に師について医術を学んだ医師（一）、儒者で医を勉強したもの（二）、無学文盲医師と独学医師（三）、経験医師（四）の４類型があるとしている[5]。

また、近年の江戸時代の医師の修行過程についての研究としては、海原亮『江戸時代の医師修行』（吉川弘文館）があるが、そのなかで海原は、全国各地に「多種多様」な医師が存在し、共通項があるとすれば「医に関する知識・技術を所有し、それを根

拠として診療活動をおこない、社会に一定の地位を確保した」ことに尽き、医師としての身分を「とらえにくい」、と指摘している[6]。

つまり、江戸時代において完成した「医師」像は、あくまで「専門的知識・技術を提供しそれにより生計を立てる」という側面「のみ」であり、生計の立て方や、専門的知識・技術の獲得の仕方、そしてそれらの継承のあり方は様々であったという訳である。

このことは、言葉を換えれば、いや、言葉遊びのそしりを恐れずに言えば、現代社会における様々な社会的文脈のなかで「医師」の位置づけや役割が（たとえそれが多岐に渡るとしても）明々白々なことの裏返しでとも言えるのではないだろうか。江戸時代以降昭和に到る過程において、「医師」という身分・職業とその役割や社会との関係性が、多種多様な社会的な文脈のなかで分節化され形成されていったということなのである。

３.「医家」という視点の豊穣性

ここまで、「開業医」＝個人医師として話を進めてきたが、敢えて重要な点について触れてこなかった。それは、近世社会においては医を含む多くの職がイエ（家）によってそれが維持・継承されていたという点である。

江戸時代は、日本の歴史上稀に見る長く平和が続いた時代であり、長期に渡る安定した社会の継続により経済は発展し各地に様々な産業が興り、そのなかで各々の職業は分化し高度化していった。当然のことながら、分化・高度化していった職業で必要とされる技術や職業に付随する社会的諸前提を、世代を超えてどのように継承していくのかは、重要な問題となってくる。近世社会の多くの職におけるその解決策のひとつの形態がイエ（家）であり、もちろん医も例外ではなかった。すなわち、医を継承するイエ（家）＝「医家」ということである。

共時的にみれば江戸時代は全国各地に「多種多様」な医師が存在した訳であるが、それが「医家」を軸として継承されていき、幕末・維新の混乱期を越え、明治初期における近代的な医療システムの構築後も「開業医」として日本の医療の根幹を支えるものとなったという訳である。このように考えると、「医家」という通時的な視点から「医」の社会的文脈のなかでの分節化の過程を解明していくことは、現代日本の医療制度における「開業医」の特徴を明らかにする際の大きな手がかりとなるのではないだろうか。

このような、「医家」からみた「医」の分節化の過程を医家・中島家の事例で考えてみると、次のようになるであろう。

（1）医家の成立と、その維持・継承

「中島家姓一統家系」によると、中島家は神子の家系から分家し成立した[7]。また、中島家の太祖とされる多四郎は大工であったが、その子の友三が医業を始めたが半農半医状態であり、玄古の代になってようやく専業医家となった[8]。また、専業医家となった後も周辺地域の地主でもあった[9]。

自給自足的であった近世の村落社会のなかで様々な職業が誕生し分業化・複雑化していく訳であるが、これは、「医」がどのように村落社会のなかで発生し維持されていったのか、という過程の例といえるであろう。

（２）医業に必要な知識・技術の獲得・継承

中島家における医学・医術ついては、先ずは藩内の医師から漢方を学び、次いで、藩内の医師から蘭学に触れ、「解体新書」をはじめとした蘭学書の購入や、京都や長崎への遊学と、その吸収先を広げていった[10]。

これらは、漢方・古医方・蘭方・産科などそれぞれの学統の展開・継承の事例としてももちろん重要であるが、個々の医家において職に必要な知識・技術の獲得・継承の内実がどのようなものであり、それが医家の維持・継承にどのような意味があったのかという事例といえ、すなわち「医」が医業を支える学問や技術としてどのように分節化していくのか、という過程の例ともいえるであろう。

（３）医と公権力（公儀）との関係

中島家の医師たちは在村医として活動していたが[11]、宗仙は御目見医を仰せつかり（固辞した）、またその次の代の友玄は実際に御目見医となった[12]。加えて、友玄の養子となった哲は閑谷学校から岡山藩医学館で学んだ[13]。

これらの経緯・過程は、一般に現在でいうところの医療・公衆衛生行政政策に存在しなかったとされる江戸時代において、医師と公権力（公儀＝藩・幕府）との関係がどのように発生・発展していったのかを示す事例であり、「医」が公権力の一部としてどのように包接され分節化していくのか、という過程の例といえるであろう。

（４）公衆衛生の担い手としての医

公儀（藩と幕府）における公衆衛生政策の不在のなか、幕末の民間医師たちの特筆すべき活動の一つとして、種痘活動やコレラ対策がある。中島家は特に種痘活動に深く関わり、また、種痘館の設立など、岡山藩もこれに関わっていくことになる。コレラ対策についても、明治政府からの顕彰の文書が残されている。これは、民間医師たちによる、公衆衛生政策の揺籃期の事例であり[14]、「医」が公衆衛生の担い手の一部としてどのように分節化されていくのか、という過程の例といえるであろう。（３）の一部とも位置づけることが出来るであろうが、視点としては公儀よりも民間側から分節化をみようというものである。

（5）維新期における「開業医」の連続性と非連続性

先に、明治政府は「営利医業としての面は徳川医療体制としての開業医形体を国家のものとした」という布施の指摘を紹介したが、幕末から明治初期における個々の医家の維持・継承は、必ずしもスムーズで平坦な道のりではなかったことは、政治経済環境の激変に加え医師免許制度の導入とそれに伴う漢洋闘争といった出来事からも、容易に想像出来る。

中島家においては、家督継承問題も重なったこともあり、友玄や哲が様々な事業に手を出したことが判明している[15]。また、哲の息子の一太は軍医にもなっている[16]。これらは、幕末から維新の激動期という時代背景が、各地の医師たち・医家に対しても大きく作用した一事例、つまり同時期の前後において「開業医」においてどのような連続性と非連続性があったのかを示す事例であろう。言葉を換えれば、「医」が近代的な専門職としてどのように分節化していくのか、という過程の例といえるであろう。

このように、「医家」という通時的な視点から「医」の社会的文脈のなかでの分節化の過程をみてみると、様々な切り口を挙げることが可能であり、これらの切り口による分節化の過程の検討は、「開業医」が支えてきた現代日本の医療の特徴を明らかにする際の大きな手がかりとなるであろう。

註

1 地域の医療と介護を知るために −わかりやすい医療と介護の制度・政策− 第1回 日本の医療制度とその特徴. 厚生の指標. 2016; 63(7): p. 44

2 福永肇. 日本病院史. 東京: ピラールプレス; 2014. p. 200-4, 231-4

3 布施昌一. 医師の歴史　その日本的特長. 東京: 中央公論新社; 1979. p. 25-26
布施も指摘している通り、もちろん「開業医」というのは厳密には近代以降の用語・概念である。またそれは、自ら診療所または病院を営んでいる医師という意味であり、勤務医の対義語・対概念であるが、ここでは便宜的に個人医師と同義としておく。

4 布施前掲書. p. 113-4

5 布施前掲書. p. 114

6 海原亮. 江戸時代の医師修業. 東京: 吉川弘文館; 2014. p. 2-4

7 中島医家資料館・中島文書研究会 編. 備前岡山の在村医 中島家の歴史. 京都: 思文閣出版; 2015. p. 3-6, 168-187

8 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 7-9

9 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 29-30, 32

10 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 8-20, 125-158, 219-256

11 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 67-95, 159-167, 212-218

[12] 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 11-23
[13] 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 25-36
[14] 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 25-36, 96-110
[15] 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 16-23, 25-36, 67-74, 111-124
[16] 中島医家資料館・中島文書研究会前掲書. p. 37-46

資料館展示報告

2016(平成28)年3月に正式に開館した中島醫家資料館（中島医家資料館）は、正式開館前の段階から展示活動を行ってきている。本報告では、2015年11月から2018年3月まで展示資料の一覧と企画説明文を掲載する。

第1回中島医家資料館展示資料（H27.11.21～　）

解体新書	安永3年	1774
医範提綱	文化2年	1805
医範提綱内象銅版図	文化5年	1808
増補重訂内科撰要	文政9年	1826
遠西医方名物考	文政5年	1822
病学通論	天保9年	1838
銅人形	江戸時代後期	
ジンボトル	文政2年	1819
筑紫行雑記	文政2年	1819
京遊備忘	天保4年	1833
中島姓一統家系	嘉永2年	1849
邑久郡西方并村内配剤謝義姓名録	嘉永7年	1854
邑久郡分売薬弘所姓名録	弘化2年	1845
邑久郡西南鍼灸施治姓名録	文久3年	1863

第2回展示資料（H28.4.10～　）

歴史を彩る医学書

解体新書	安永3年	1774
増補重訂内科撰要	文政9年	1826
新訂増補和蘭薬鏡	文政11年	1828

緒方洪庵と中島家とのつながり

緒方洪庵短冊		
病学通論	天保9年	1838
扶氏経験遺訓　写本	江戸時代末期	

種痘について

戴曼公唇舌図訣　写本	江戸時代末期	
種痘諸事留	慶応元年	1865
種痘伝習録	明治9年	1876

中島家の医師たち

ジンボトル	文政 2 年	1819
御目見医記録	江戸時代末期	

中島家の販売した薬

清凉散売上帳	明治 17 年	1884
神寶丹　版木と実物	江戸時代末期	
山田ふり薬　版木	江戸時代末期	
肝凉圓　版木	江戸時代末期	

第 3 回展示資料（H28.10.22～　）

江戸期の産科

仲条流産科全書　写本	江戸時代	
産科発蒙	寛政 7 年	1795
産術筆記　写本	江戸時代	

中島家と難波抱節の産科

胎産新書	文化 10～安政元	1813～1854
回生鈎胞代臆	天保 5～明治 3	1834～1870

コレラの流行

虎列剌病流行ニ付御伺	明治 13 年	1880
虎列剌流行予防の報償（岡山県）	明治 13 年	1880
虎列剌病心得書	明治 12 年	1879
明治１３年患者表	明治 13 年	1880

中島家の医師たち

ジンボトル	文政 2 年購入	1819
京遊備忘	天保 4 年	1833

中島家の販売した薬

清凉散売上帳	明治 17 年	1884
神寶丹　版木と実物	江戸時代末期	
山田ふり薬　版木	江戸時代末期	
肝凉圓　版木	江戸時代末期	
版木御薬調合処	江戸時代末期	

第 4 回展示資料（H29.5.20～　）

企画展示　在村医中島家の蔵書

傷寒論　張仲景　著	享和元年刊本	1801
傷寒論国字解　雲林院了作　編	明和８年	1771

傷寒論集成　山田図南　著	江戸時代	
傷寒論正義　写本　吉益南涯　著	江戸時代	
傷寒論劉氏伝　白水田良　著	安永３年	1774
金匱要略　張仲景　著	寛保３年刊本	1743
難経	江戸時代	
素問	江戸時代	
霊枢	江戸時代	
外科正宗　陳実功　著	寛政３年	1791
万病回春　捜廷賢　著	江戸時代	
千金方　孫思邈　著	万治２年刊本	1659
普救類方　林良適・丹羽正伯　編	享保 14 年	1729
病名彙解　蘆川桂洲　著	貞享３年	1686
諸病源候論　巣元方　著	正保２年刊本	1645
格致余論　朱丹溪　著	慶安２年刊本	1649
十四経発揮　滑寿　著	江戸時代	
本草綱目　李時珍　撰	正徳４年	1714
本朝食鑑　人見必大　著	元禄 10 年	1697
志都能石屋　平田篤胤　講説	文化８年	1811
一本堂薬撰　香川修庵　著	享保 16 年など	1731

第５回展示資料（H29.12.30～　）

企画展示　病への取り組み（中島家の近代）

乙 54 号通達,	明治 13 年	1880
流行病診断書	明治時代	

天然痘（痘瘡）

（種痘医員ニ奉懇願候）	明治６年	1873
布告第７号	明治８年	1875
（万民救助ノタメ無謝義ニテ相施申奉願）	明治８年	1875
（種痘免状頂戴度奉上願）	明治８年	1875
救助種痘　難波立原ト　協議施行願	明治９年	1876
救助種痘普及　仕度御願	明治９年	1876
種痘医規則	明治９年	1876

種痘術免許之証	明治 12 年	1879
コレラ		
虎列刺病心得書	明治 12 年	1879
虎列刺病流行ニ付御伺	明治 13 年	1880
虎列刺流行予防の報償（岡山県）	明治 13 年	1880
明治 13 年患者表	明治 13 年	1880
甲第 119 号通達	明治 14 年	1881
脚気		
乙第 70 号通達脚気患者明細表	明治 13 年	1880
脚気患者診断製表雛形	明治 14 年	1881
甲第 108 号通達	明治 18 年	1885
腸チフス・発疹チフス		
腸チフス病予防法の概略	明治 10 年代	
乙第 43 号通達　発疹チフス　届方標式	明治 14 年	1881
肝臓ジストマ		
上道郡小医会意見書	明治 16 年	1883
解剖許可相成候ニ付申達	明治 19 年	1886
蛔虫発顕ノ一現ヲ挙クレバ左ノ如シ	明治時代,	

第 4 回展示　「企画展示　在村医中島家の蔵書」説明文

江戸中期からこの地に開業した中島家には数多くの医学資料群が残されていた。その中でも際立って多いのが医学書である。中島家の蔵書の特徴は、その数の多さもさることながら、その種類が多岐にわたることと保存状態が非常に良いことが挙げられる。いわゆる中国の古典医学書を皮切りに、産科、外科、鍼灸、薬学、解剖書、洋学の翻訳書、さらには数多くの写本までがそろっている。著名なものでは「解体新書」や「医範提綱」、緒方洪庵の著作や写本、入門した吉益家の写本、さらには入門していない華岡家の写本までが残されている。今回の企画展示では、中島家に残された膨大な蔵書を紹介するが、既に展示した蘭学書や解剖書、漢蘭折衷派などの書物については、展示スペースの関係で次の機会へとまわしたい。中島家医門三世の宗仙や四世友玄が学んだ京都の吉益家は古医方派の重鎮であった。特に吉益東洞は、陰陽五行説を否定し、「傷寒論」を思うがままに改ざんして自己の論を強く主張した。その子南涯は、父の過激な主張を修正する方向には向かったが、「傷寒論」がバイブルであることには変わりはなかった。その

南涯に学んだ中島家に「傷寒論」やそれの解説書が多いことは至極当然のことであろう。宗仙も友玄も、帰郷してからも「傷寒論」を手元に置いて、師匠の説を思い出しながら治療に当たったに違いない。中島家には、その「傷寒論」だけでなく、中国の古典医学書がほぼそろっている。「金匱要略」「素問」など当時の医師の必読書とされる医学書から、「外科正宗」「万病回春」「格致余論」といったベストセラーまでが残されている。さらには「霊枢」「難経」「十四経発揮」などといった中国の鍼の医学書も多い。その他にも、「本草綱目」や「本朝食鑑」などの本草書の辞典や「病名彙解」という病名の辞典もあり、これらは在村医として必ず必要な書であったに違いない。「普救類方」は治療方法が記された手引書だが、幕府が編纂し出版したという珍しい医学書である。珍しいといえば国学者平田篤胤が著した「志都能石屋」も医師として篤胤が著し、しかも洋学を肯定しているという点で珍しい。このように和漢の数多くの多岐にわたる蔵書をもつ中島家は、自らが専門とする医学書や当時話題となった医学書などを次々と買い集めていったと考えられる。そこには決して安くはなかった医学書が買える財力と、医学書から学ぼう、治療に役立てようという臨床医としての在村医の立場が見えてくる。いずれにせよ、これだけの医学書を所蔵している中島家は、医学塾としても、地域の医療センターとしても大きな役割を果たしていたに違いない。

第５回展示　「企画展示　病への取り組み（中島家の近代）」説明文

維新を迎え，明治新政府はそれまで旧幕府がやってこなかった国家を挙げての医療政策に取り組むことになった。 医療政策を整え，国家が国民の衛生状態を把握し，国民の健康を保持することになったが，国民が健康であることは，政府の大きな目標である富国強兵と密接に関わっていた。 国民が健康でないと強固な兵にはならないし，国力も上がらないのは自明の理であった。その医療政策の出発点が「医制」の制定である。 明治４年（１８７４）に公布されたこの制度は，医薬分業や医師開業免許制度など医療・衛生行政に関する幅広い事項が含まれていた。中でも特筆すべきことが西洋医学・薬学の導入であり，これ以降，西洋医学を学んだ医師が西洋医学で治療をしていくという現在の体制が構築されていったのである。しかし，新政府がいかに西洋医学の導入を図ろうと，庶民の側では，急激に医療状況が変化することはなかった。むしろ，外国人の流入や人々の大幅な移動など急激な社会変化が，それまで以上に伝染病を全国に蔓延させていった。在野の医師たちは，現代のような薬や抗生物質などの根治の方法も持たず，行政と庶民の間に立ちながら，病に立ち向かっていくしかなかった。この頃中島家は，江戸後期に活躍した医門四世友玄から，養子の医門五世迄（たもつ）へと代替わりしつつあった。 二人とも蘭学は学んでいるが，「医制」に則った西洋医学を正式に学び，国家試験に合格した医師ではなかった。しかし，種痘をはじめと

する新しい医療や公衆衛生の波にもまれながら, 在村の医師としてこれまで同様に地域の医療を支えていった。 それまでは個人が経営する在村医で良かったが, 新制度からは身分が確立され, 通達に従い, 報告を励行する地域医療の担い手の歯車としての一面も持つこととなったのである。その顕著な例の一つとして, 今回の企画展示では, 伝染病を中心とした中島家に残る近代初期の病に関する資料を展示し, 当時の医療体制の様子を俯瞰したい。

（中島醫家資料館　木下浩）

研究活動報告

中島家に関する研究・調査・報告については、学会発表・学術論文・市民講座・テレビ番組など多様なものが多数存在するが、本報告においては、2018 年 3 月までの特に研究プロジェクトと刊行物を中心にその活動についてまとめる。

中島家に関する研究活動は、当初は医門第９世である中島洋一（現・資料館館長）の個人的な活動に端を発する。1946（昭和 21）年、まだ幼い洋一は父・達二とともに満州から邑久（現・資料館所在地）に引揚げてきた。その際、渡満前に長持に封印されていた先祖伝来の蔵書・文書・器物類を父子で点検し、併せて中島家の歴史について聞いた。また、中学時代には歴史の授業で蔵書のひとつである『解体新書』が貴重な歴史的書物であることを知った。これが、洋一が中島家の歴史に触れた最初である。

爾来、洋一は遺された蔵書・文書・器物類の整理・研究を個人的に行ってきたが、それが転機を迎えたのは、2003（平成 15）年のテレビ番組「開運！なんでも鑑定団」へのスタジオ出演である。そこで、『解体新書』だけではなく、器物の銅人形やコップなどにも高い価値があると鑑定されたため、順天堂大学の榊原宣名誉教授を介して、同大学医史学研究室の酒井シヅ教授（現・特任教授）に遺された資料全体の評価を依頼した。その結果、中島家の資料群は戦中戦後の混乱を恐れて封印されていたため江戸～明治期にかけての同家の医療活動を示すものの多くが散逸せずに残っている「未盗掘の古墳」の状態であり、資料群全体を学際的な研究視点から評価・分析をする必要性が明らかになった。

これをきっかけにして、多くの日本史・医学史・医療関係史・郷土史などの研究者の協力を得ながら、2004 年～2006 年にかけては科研費研究プロジェクト「科学に関する文献資料と実物資料を総合的に扱えるコミュニケーションの研究」、2007 年～2011 年には同「米国国立医学図書館等の所蔵の日本古医書調査・目録・データベースの作成」、2011 年～2015 年には同「江戸時代における地域医療研究　～岡山県邑久郡の中島家をもとに～」、2013 年～2017 年には同「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」、2016 年～2019 年（予定）には同「幕末から明治期における地域医療研究　～岡山県邑久郡の中島家をもとに～」の下で研究が進められてきている。

また、これらの中島家に関する研究成果として、2006（平成 18）年には『江戸のモノづくり　岡山県邑久郡中島家資料調査成果報告書』（科研費補助金成果報告書）、2015（平成 27）年 3 月には『中島家蔵書目録』（中島醫家資料館）、同年 11 月には『備前岡山の在村医　中島家の歴史』（思文閣出版）を成果として刊行し、加えてここに、資料館の紀要として「中島醫家資料研究」（本誌）を創刊した。

以上のプロジェクトと刊行物の概要は次の通りである。

中島家を主たる対象とする科研費研究プロジェクト

研究課題名	科学に関する文献資料と実物資料を総合的に扱えるコミュニケーションの研究
種目・番号	特定領域研究・14023218
研究期間	2002 年度～2005 年度
概要	「器物・文献資料総合データベース」の開発と、これをコミュニケーション・ツールとして用いた領域横断型研究を試みたプロジェクトである。本研究プロジェクトの研究期間は 2002 年からであるが、上記領域横断型研究の試みの試験的事例として中島家の資料群が選ばれ、2004 年から本格的な研究対象となった。
研究成果	中島家の資料群についてはその全体像・概要が明らかになり、研究成果は『江戸のモノづくり　岡山県邑久郡中島家資料調査成果報告書』（科研費補助金成果報告書・非売品）としてまとめられた。

参考：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-14023218/

研究課題名	江戸時代における地域医療研究　～岡山県邑久郡の中島家をもとに～
種目・番号	基盤研究(C)・23501206
研究期間	2011 年度～2014 年度
概要	多様な研究者の参加により学際的に資料の解読・解析が進められ、主に江戸時代の中島家の個々の医療活動の具体的内容や、近接する他の医師との相互関係、地域社会との様々な関係性が明らかになった。
研究成果	研究成果は『中島家蔵書目録』（中島醫家資料館）、『備前岡山の在村医中島家の歴史』（思文閣出版）としてまとめられた。

参考：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23501206/

研究課題名	幕末から明治期における地域医療研究　～岡山県邑久郡の中島家をもとに～
種目・番号	基盤研究(C)・16K01166
研究期間	2016 年度～2018 年度（予定）
概要	前科研の手法・成果を引き継ぎながら、主に幕末以降の中島家の医療活動について、立体的な分析を進めている。
研究成果	資料館の紀要として「中島醫家資料研究」（本誌）を創刊し、2018 年度以降にこれの次号の刊行を計画中である。

参考：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16K01166/

その他中島家に関係する科研費研究プロジェクト

研究課題名	米国国立医学図書館等の所蔵の日本古医書調査・目録・データベースの作成
種目・番号	基盤研究(B)・19406017
研究期間	2007 年度～2011 年度

参考：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19406017/

研究課題名	近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究
種目・番号	基盤研究(B)・25282066
研究期間	2013 年度～2016 年度

参考：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-25282066/

中島家に関する研究の成果刊行物

『江戸のモノづくり　岡山県邑久郡中島家資料調査成果報告書』
(科研費補助金成果報告書) 2006(平成 18)年 3 月

『中島家蔵書目録』(「中島醫家資料研究」第 1 巻第 0 号・中島醫家資料館)
2015（平成 27）年 3 月

『備前岡山の在村医　中島家の歴史』(思文閣出版) 2015（平成 27）年 11 月

「中島醫家資料研究」第 1 巻第 1 号（中島醫家資料館）2018（平成 30）年 5 月※本誌

(帝京平成大学　松村紀明)

ISSN 2189-387X

中島醫家資料研究　第１巻第１号

2018（平成 30）年 5 月 31 日　第１刷発行

編集　松村紀明、木下浩

発行　一般財団法人　中島醫家資料館

〒 701-4232　岡山県瀬戸内市邑久町北島 1241

ウェブサイト：http://nakashima-ika.jpn.org

電子メール：shiryokan@nakashima-ika.jpn.org

印刷　港北出版印刷株式会社

本研究は JSPS 科研費 16K01166 の助成を受けたものです。

（研究課題名「幕末から明治期における地域医療研究　～岡山県邑久郡の中島家をもとに～」）